
君との日々

Toki.

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君との日々

【Zマーク】

Z2160D

【作者名】

Toki.

【あらすじ】

不良高校生の池山大地が、三つ編みモードと美人モードの二つの
顔を持つ優等生の池上雲に一目ぼれをした。自分と全く違う世界に
住む彼女との恋愛に、苦しんでいく大地の日常を描いた学園ベタベ
タラブストーリー。

#01 魔女の田舎ご（繪書き）

この小説は、一話一話が短くなっています。
そのため、できるだけ毎日更新ができるかと思っています。

では、短い前置きですが、「魔女の田舎」を『』覗くだぞー。

一人、丘の上で夕日を見ながら、タバコを吸う男、池山大地。この丘の上から、空を見るのが好きなのだ。

俺の周りには、綺麗な花や、素敵な女の子もいない。

ただ、俺は愛に飢えていた。

小学校4年生のときに、親が離婚。

俺は母親に引き取られ、双子の兄弟は父親に引き取られた。

それ以来、母子家庭で育つてきた俺は、ちょっとずつ性格も荒れてきて、今に至る。

神崎高校の池山といつたら、このあたりじゃ結構有名。

まだ、少年院には入ったこと無いが、留置所になら…まあ多少。

警察官の人とも仲良くなり、警察内部でも結構有名な？ 存在なのです。

俺の携帯がブルルと鳴った。

「もしもし？」

『あ、大地君。あたしだよ～。今日なんだけど、そっちは遊びに行つてもいいかなあ？』

遊びに行く＝SEXをしよう。という話だ。

「別にいいよ。」

『じゃあ、7時にそっちにいくねー。』

そのまま電話は切れた。

俺の母親である馬鹿女は、夜はどこかで働いていていない。

前の夫が金持ちだったせいか、家だけは大きいのだ。そのため、俺の不良仲間たちの宴会場になつたり、乱交場所になつたり色々。

家に帰り、7時になると家のチャイムがなり、俺は人を確認したあと、家のロックをはずした。

そして、また欲求発散の行為が始まる。

行為も終わり、そしてベッドに裸のまま横たわっている女がつぶやいた。

「大地君のSEX好きなんだよね」

「そつか。」

俺はそつけない返事を返し、またタバコを吸い始めた。

「大地君は、明日学校？」

「行くかはわかんないけどね」

自分で言つのもなんだが、俺の顔はいいほうだと思つ。

だから、勝手に女が寄つてくる。

女なんてものは、抱く玩具。俺の欲求を発散させてくれればいい。

そんなもんだ。

女が帰ると、俺は眠りについた。

翌日、目が覚めると、学校に行く準備をした。

俺の家から、学校までは電車を使い、30分ほどかかる。

どつかのテレビや、映画や漫画みたいに、歩きで登校なんてのは夢のまた夢なのだ。

駅のホームで、電車を待ち、電車に乗り、電車を降りて、学校にむかう。

そんな当たり前の行動なのだが、今日はその行動の中に俺の心を動かされる事が起きた。

電車を降りて、改札口を出て、学校へとむかおうとしたとき、変な女が俺にぶつかってきた。

「いってえなー。」

俺が怒鳴りつけると、女は小さな声で「『めん…』」といつて立ち去ろうとした。

「ちょっとまってよ。」

女の腕をつかむと女がこっちを向いた。

「あ、なんでもない…。」

俺はそう言って、女の腕を離し、俺は、その女の去っていく姿を知らぬ間に田で追っていた。

そのとき、ふと足元に何かがあるのが分かり、下へと田線を向けると、やつきの女が落としたであろう定期が落ちていた。

定期には『石上 霽』

「イシガミ…シズク」

俺は、頭に叩き込むように彼女の名前を呟いた。

「それにして、とてもなく可愛かった…。それにいい臭い…。」

甘くて、俺の心を癒す香り…って、香りまでかいでいる俺は変態か。

ぼそつと呟くと、後ろから小学校からの幼馴染である安藤 明が俺の背中をぽんと叩いた。

「おっはよー。今日は学校に登校ですかい？」

「お、おひめ」

俺はようやく我に戻り、学校に向かった。

そうこええば、俺と同じ高校の制服、しかも2年生のバッヂをつけていたような気がする。

……って俺は、なんであの女の事をこんなに考えているんだー！

学校に着き、授業が始まつた。

少し…あの子に会いたいな。

ち、違うんだぞ！ 好きとか、そういうのじゃなくて…

もう一度だけ、顔がみたいな…なんて。

「… そうだ…！」

俺は授業中にもかかわらず大声をあげてしまった。

しかし、周りには俺を笑つのはいない。

いふとしたら、隣の席で爆睡している明べらになのだが、寝ているので笑うことも無い。

昼休みにでも、石上霧に定期を返しに行けばいいのか。

これほど、心がドキドキしたのは久しぶりだ。

#01 書きの玉露ご（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、ひつひつがいいとアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で書いていく場合は、
net_touki@yahoocom.jp にメール
を送ってください。

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージページもできます。
宜しくお願いします。

#02 会いに行ひ

「これほど、昼休みを楽しみにしたのは小学校以来なのではないか。
いや、それ以上かもしない。

4時間目授業があと10分程度で終わる。

そう思つと、ドキドキが止まらない。

さつきの休み時間に、友達に聞いて『石上雲』は何組にいるのかを
聞いておいた。

どうも、3組らしい。

あの子にもう一度会える…。

そう思つと、なぜだか笑みがこぼれた。

「きもちわいい」

そういうのは、隣の席で座つていてる明だ。

「うひせ」

「思い出し笑いか？ 思い出し笑いする奴はエロい人なんだぞ。
つて、大地はエロいかあ！」

しゃつかしゃつかと笑いながらそういう明の言葉は的外れだね。うん。

俺は思ひ出し笑ひじゃない。

「やれとも、一やけてたのかな？」

やつこわると、俺の顔は熱くなつた。

多分今は、『はい、図星ですか』と言わんばかりの赤もだらわ。

「お、大地ちゃんにも春が来たか。」

「ち、ちづえよ。別に好きとか、そんなんじや……」

ねーよな？ 俺。

「どよな子だ？ 可愛いか？ やつちゅつたか？ 何歳だ？」

やつむ、俺の反応を見ながら質問をしてくる。うしー。

「ま、まさか、片想い…」

その叫び声で教室全体をビクッとした。

「うわあおおおおおおおーー！」

明の叫び声で教室全体をビクッとした。

「だから、そんなんじやねえって」

俺はやつこながらも、自分の顔が赤くなつてこるので隠していく。
る。

まさか、俺がもう女に惚れるなんてありえねえ。

ありえないんだ。

明は叫んだ後、少し呆然としていたが、少し落ち着いたのか、今度は笑い出した。

「な、なに笑つてんだよ。きもちわづい」

「いや、お前がそんな顔するの、久しぶりだからよ」

クククと笑いをこらえてるつもりなのか、俺に喧嘩を売つてこるのが分からぬ。

無性にむかついて、俺は明の頭を殴つてやつた。

「いてえ」

そういうながらも、明はクククと笑つてこる。

付き合つてらんねえ。

そんなこんなで、昼休みまではあと2分ほど。

2分間がこんなにも長く感じたのはテスト以来ではないのだろうか。

じーっと時計を見て、チャイムが鳴つた瞬間に教室を出た。

俺は、1組だから、池上雲がいると言つ3組は2個横の教室。

「なんで俺は、あんな可愛い子を今まで知らなかつたのだろう」

俺は後悔をした。

3組まで足を運ぶと、俺は大きく深呼吸を3回ほどして、3組の教室のドアを開けた。

俺のことをみんなは怖がっているのか、一瞬俺を見て、目をそらす。

3組の中をぐるりと見渡したが、池上雲がいる様子は無い。

その辺の男子の前に立つて、池上雲の名前を出してみた。

「あ、池上雲ですか？」

何度も聞くな。

「やうだ」

俺の返事で、俺が怖くなつたのか、彼は恐る恐る彼女の方に指を指した。

その先には、楽しそうに喋る女子2人組み。

一人は髪の毛を二つ編みに結んで、眼鏡をかけた大人しそうな子。

もう一人は、髪の毛がセミショートのストレートで、活発そうな女の子。

「え、どこつ？」

俺はもう一度、男子に問いただした。

しかし、結果は同じ。

さきほどの一人のほうに指を指す。

その二人の後ろにいるのかと思ったが、やはりいない。

すると、俺の後ろから、

「石上さん、先生が呼んでたよ」

と、一人の女がそういった。

「わかった。ありがとう」

そして、石上が返事をする。

石上……？　雪！？

『わかった。ありがとう』と言った子は、さきほどの2人組にいた…

あの…三つ編みで眼鏡をかけていた女の子だった。

#02 会いたがり（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、ひつひつがいいとアドバイスをくさ
ると本当に嬉しいです。

評価で書いていく場合は

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送ってください

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#03 お前が石上霧?

「え…」

俺はつい、声をもらしてしまった。

いや、だつてさ、今朝あつたときは超美人で、可愛くて、髪の毛は結んでいなかつたし、田はくりくりしていて、眼鏡掛けてない子なのに…

結局、俺の思考の先には、別人という文字が浮かんだ。

別人かよ。

そう思つて、諦めて自分教室に帰るうとしたとき、あの香りがした。

甘くて、俺の心を癒す。そんな香り。

あの、石上霧と同じ香り。

その臭いの元は、三つ編みの眼鏡の女の子からだつた。

無意識に手が伸びる。

今朝同様、腕をつかんでしまつた。

「いし…がみ?」

「は、はい?」

「君、石上雲か？」

「は、はあ」

彼女はおどおどしている様子。

恥ずかしいのか、まともに俺の顔を見れないようだ。

周りの視線を集めているのは嫌でも分かる。

「これ、お前のだらうっ。」

そういうて取り出したのは定期。

それを見て、彼女は俺を見てはつとした顔をした。

「あつ……」

俺は小さく声をもらしてしまった。

眼鏡のおぐには、くじつとした目。

俺が探し求めていた人に違いない。

「あ、あのさ」

「て、定期ありがと」

そう言って、彼女は去っていった。

あの子だったのか。

教室がざわざわしていた。

それを無視して俺は自分の教室へと戻つていった。

「よし、おかえつ。飯食あつぜ

明が待つていた。

「ひむ

俺は、行きに買つてきたパンを取り出して、口へと運び始めた。

あの子は何で顔を隠すのだひつ。

あんなに可愛いのに、本当にほきたいない。

「……いち、だ…ち？ 大地きいてるか？」

「あ、おひへ

「なんだよお。せつかく人が面白い話しじ、じてやつてこるのは。好きな子のことでも、考えて

たのか？」

クククと再び笑い出す明。

「ううせ。あのう…」

「ん？」

「あ、いや、なんでもない」

ここに、石上靈のこと聞いたなら、絶対馬鹿にされる。

また、色々聞かれるのが面倒だから、後で瑞樹にでも聞いておくか。

瑞樹のフルネームは、遠山瑞樹。俺と、明と同じ小学校出身の幼馴染だ。

俺は瑞樹を女と見たことないし、瑞樹も俺を男と見たことは無いだろ。

昔からの相談相手。特に俺が聞く側だが。

放課後、瑞樹の携帯にメールをして、一緒に帰ることにした。

「どうしたのよ？ 珍しい。何かあった？」

帰り道、瑞樹が俺に聞いてきた。

「いや、まあ、うん」

「どうしたのよ~」

「まあ、たいしたことじゃないんだけど、3組の石上櫻(いのうらざき)って知ってるか?」

「石上…ああ、あの優等生?」

瑞樹はパンと手をあわせて、思い出したかのように呟いた。

「優等生?」

「そうそう、学年でいつも上位の成績をとっている子よ。確か、入学式のときも、挨拶をしてた気がする。入学生代表として」

「あ、そうなんだ」

俺とはかけ離れた存在か。

小さく、心の中でため息をついた。

#03 お前が石上暉？（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、いつしたほうがいいと書つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net_touki@yahoocom.jp にメール

を送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージページもできます。
宜しくお願ひします。

#04 そして俺は醒了

翌朝、昨日と同じ時間に登校した。

目的はもちろん、霧に会つため。

…さじめに霧ついておくがストーカーじゃないぞ。

電車を降りて、少し歩くと、三つ編み、眼鏡モードの池上霧を発見。

俺は、ドキドキしながら霧に近づいた。

「なあ」

俺が呼ぶと、霧は無視して歩いてこぐ。

「石上さん」

そう呼ぶと、霧は止まつて俺のまつを見た。

「昨日は定期あつがとい」

…やつて、霧はまた歩き出した。

…その行動一つ一つが可愛く見えて仕方ない。

なんか胸が痛いや。

「ちよつと待てって、一緒に学校行こひせ?」

……無視。

「ちよ、待てって」

……無視。

「お~い、石上さん」

……無視。

「おこってー」

俺はイリツいた声で叫び、彼女の方をつかんだ。

「何?」

「いや、なんでもないけど

「なら、話しかけないで」

そう言って、再び歩き出す。

うわあ、いきなり嫌われた俺……。

「あ、あのや」

俺は彼女にもう一度声を掛けた。

無視されたけど。

それも覚悟の上だーー！

「なんで、仮面をかぶつてんの？」

俺がそう問うと、彼女の動きが再び止まつた。

「何が？」

「昨日、俺にぶつかったの石上さんでしたよ？」

「私は、ぶつかってなんか……」

明らかに動搖してますが。

「あんなに可愛いのに、なんでそんな格好を？」

少し黙つてから、ため息を零ついた。

「…貴方なら分かるでしょ？ 顔がいじと損するのよ

それだけを言つて、彼女は歩き出した。

損をするつひ？

まったくわからねえよ。

「何で？」

俺がそう問い合わせても、彼女は無視をして歩いていった。

昼休み、俺は暇だからと理由で、体育館裏へと煙草を吸いに行つた。

体育館裏に着くと、女の声がした。

「先着がいましたか」

俺はぼそっと呟き、ほかの場所を離れようとしたとき、彼女の声が聞こえてきて、体育館裏を覗いた。

そこには、女3人に囲まれている雲が立っていた。

どうも、何かを問いただされているらしい。

まあ、あの格好で、あの性格だ。

いじめられるのは目に見えている。

いつもなら、そんな面倒なのは放つておくのだが、今回は頭より先に体が動いてしまった。

「おい、お前等なにやつてんだよ？」

俺がそこにつと、びびったのか、女の子は退散して行つた。

3人が去つて行つた後に取り残されたのは、俺と雲。

「…顔が悪すやると、損する事だつてあるぜ？」

「アーティスト」

そう言って、零は去つて行つた。

#04 そして俺は黙つ（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつしたほうがいいとアドバイスをください
ると本当に嬉しいです。

評価で書いていく場合は

net_touki_net@yahoo.co.jp メール
を送ってくださいね

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#05 雨の涙

今日も学校が終わり、暇な友達を誘つてゲーセンへと向かった。

いわゆる不良のたまり場だ。

特に何をするわけでもなく、ただ話している。

この前警察に誰々が捕まつたとか、どつかの誰々が売春やつてるとか、シャブやつてるとか、どつかの暴走族に入つたとか。

俺にはまったく関係ない話。

それでも、周囲にあわして俺は話をしていく。

話をしていくと、いつもどおり女が話しかけてきた。

「大地君、今日あたしをお持ち帰りしない?」

「――」ときもちわらい笑みを浮かべる女。

「あ、いい…」

いつもどおり、いいよと言おうとしたときだ。

びつじてか、雲の顔が浮かんだ。

彼女は、俺が『いつこう』をしていたことを知つたらどう思つのだろつ。

「『』めん、今日は気分が乗らないんだ」

俺がそういうと、彼女は「そつか」と言つて、友達であろうつ女友達のところに戻つていった。

「どうしたよ？ 大地が女の誘い断るなんて珍しい」

俺の隣に座つてゐる、男が言つた。

確か、名前はカイトだつた気がする。

「別に、気分が乗らないんだ」

そう言つと、周りは「へえ～」と言つて、納得してくれたようだ。

…皆が納得したにも関わらず、俺の左隣に座つてゐる明がきやつきやつと笑いながらみんなに言つ。

「『』じつ、好きな子が出来たらしいぜ」

俺は「馬鹿つ！」と言つて、おもいつきり腹部ヘパンチを入れた。

「ぐはっ」と明が痛がつてゐたが、ニヒヒと笑つてゐる様子から反省はしていないうらしい。

周りの連中は俺を見た。

「まじかよ！ あの大地が？」

「どんな子なんだろ？」

「すりげえ氣になるー。」

色々言葉が飛び交う中、俺は呆れてこう言った。

「好きな奴なんていねえから」

しかし、こう話している中でも、思い浮かぶのは、雪の三つ編みモードでは無い方の姿。

俺の家から、ゲーセンまでは約駅ひとつ分。
今日は電車には乗らず、なぜか歩いて帰った。
立ち去った。

空はもう暗い。
川原の土手を歩いていると、ある男集団が田に入ってきた。

「喧嘩か？」

そつ思い、近寄つてみると、ベタではあるが、四人ほどであるひつ男の集団に囲まれて見えたことのある女が立っていた。

「石上…雲」

俺がボソッと呟くと、男集団の一人がこっちを向いた。

「お前、誰だよ？」

…どうも、俺のことを知らないらしい。

結構有名なんだがな。

「それより、俺の女に何やつてんだ？ てめえら」

「…」いつ、お前の女なのか。結構美人だから、俺たちが食べてあげよつと思つてな」

男集団の一人がそういうと、周りの奴等も一緒になつて笑っていた。

雲のほうに目を向けると、少し目が涙目になつていて…気がする。

「とりあえず、その女をこっちに渡してほしいんだけど。」

俺は作りに作った最高の笑みをみせて男たちに言った。

「はあ？ お前は自分の女が食われているのを見ればいいんだよ」

男がそういう終わると、一人は雲を捕まえ、あとの三人は俺に襲い

掛かつってきた。

どつかのアニメみたいに、一瞬で三人を滅多打ちに出来れば格好いいのだが、さすがにこれは厳しい。

しかし、負けるわけにはいかない。

多少、ボコボコにされたが、なんとか男たち三人を叩きのめしてやつた。

最後は、雲を捕まえている男だが、俺が雲のほうに近寄っていくと、殴りかかってきた。

一人なら問題ない。

相手の拳を軽々とよけて、腹部に一発、顔面に一発パンチを入れて、KOしてやつた。

「大丈夫かよ？」

俺がそう言って、雲に近寄っていくと、三つ編み、眼鏡つ子モードでは無い雲は、そっぽを向きながら泣いていた。

#05 書の涙（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こつこつしたほうがいいとアドバイスをくれると本当に嬉しいです。

評価で書いていく場合は

net_touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送ってください。

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#06 感謝して

あれから、どれぐらい経つただろうか？

そんなには経っていないのだろうけど、どうも霊と一緒に居ると時間が長く感じる。

とりあえず、さっきの場所から移動して、川原で霊と一人きりの俺。脈拍を今測つたら、1分間に100ぐらいは、いつもよりじやないだろうか？

「大丈夫か？」

俺がそう聞いても返事は無い。

聞こえるのは、泣いている声。

やはり、怖かったのだろうか。

「もう安心しのよ」

少し落ち着いたのか、彼女はようやく話し始めた。

「わっ、私は…あなたの女じゃない」

助けてやったのに、第一声がそれかよ。

もつ少し、ありがとうとか、助けてくれて嬉しかったとか、怖かったよおとか言って、抱きついてくるとか、何か無いのか？

「そうですね」

俺がそつけない返事をすると、彼女は下を向いてしまった。

「たす…くてかん…し…る」

「え？」

雪は大きく息を吐いてから、少し大きめな声で

「助けてくれて、感謝してるー。」

と、言った。

「あ、あひゅ」

俺はなんだか恥ずかしくて、そっぽを向いて返事をしてしまった。

本当に可愛いと思つてしまつ俺は、馬鹿になつてしまつたのだろうか。

いや、元から馬鹿なのだが、やつこつ馬鹿じゃなくて、なんていうかやの…

「…ねえ、聞いてる?」

「へ?」

「やつぱり聞いてないか」

そつぱり、ため息をついた。

「わ、わらー！ もつ！ 四つてくれ」

「やだ

「うんってー！ 本気でやんー！ もつ一度だけでいいから四つてくれー！」

俺が手を合わせて、本当に申し訳なさがつて謝った。

俺がそうこうと、彼女はクククと囁いて、笑い出した。

「なんだ、笑えるじやん」

俺がボソッと囁つたのが駄目だったのだろうか、こきなじり笑うのをやめて、やっぽを向き歩き出した。

「じめん！ 本当にじめんなさい！ だから、もう一度囁つてくれないでしょ？」

敬語なんて、何年ぶりに使つただろうか。

彼女は、立ち止まり、じつけを向いた。

「名前は何て言つの？」

「俺の名前？」

俺が聞き返すと、呆れた顔をして零は言つた。

「あんたしか居ないじやん」

内心、少しイラつときたが、そこは男。我慢だ、我慢。

「池山大地。2年1組の男子生徒だ。」

雪は少し驚いた顔をした。

「そう、あんたが、池山大地だったのね」

そういう終わると、彼女は再び歩き出した。

俺がもう一度、声をかけようとすると、再び彼女は止まり振り向いた。

そして、俺の元へと一歩、一歩と近づいてきて、俺の目の前へ立つ。

「今日は、本当にありがとう。大地が来てくれなかつたら、私危なかつた」

雪が俺のことを大地つて呼んでくれたことが嬉しかった。

「私に聞いたよね?『なんでそんな格好を?』って。……私、ストーカーされたことがある

のよ

そう、話し始めた彼女は悲しい顔をしていた。

「中学校の時だった。男子からは毎日喋りかけられたりし、告白もされていて。中には、まったく知らない人から告白もされたりして。そんな中、ある事件が起きたのよ」

雲の日から、一粒の涙が零れ落ちた。

「ある日、家の前にクマの人形が置いてあつたの。そこには、ストーカー紛いの文章が書かれた手紙もあって。こいつのはたまにあつたから許せたんだけど、その日から毎日、無言電話の日々が続いたし、盗撮もされて、ネットに乗せられたりしたの。なにより一番ショックだったのは…」

彼女が最後まで言つ前に、俺の体は彼女を包んでいた。

強く抱きしめていた。

「分かつた…もう言わなくていい。ごめん、そんな辛い過去を思いださせてしまって」

彼女は俺の腕の中で泣いていた。

俺は心から思った。彼女が愛しいと。

#06 感謝している（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、いじついたほうがいいとアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で書いていく場合は

net_touki-net@yahoo.co.jp メール
を送ってくださいね

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#07 涙の後は

雪の話によると、あの後地元から引越しをして、ここに住み始めたらしい。

そのうりから、二つ編みの眼鏡っ子としたといつ話だ。

俺にすれば、それでも十分可憐いのだが。

腕の中で泣き止んだ雪は、ほっとした様子を見せて、俺から離れていった。

俺は「危ないから」と言いつて、彼女を家まで送ることとした。

さつきは、買い物に行っていたといつ。

その買い物袋は、さつきの男たちに追われているときに、どこかに落としたらしい。

雪は「また買えばいいから」と言いつて、今日は断念した。

家まで送ると、ありがとう。と彼女は俺に囁いて家中へと入つていった。

驚いたことに、俺の家から雪の家までは10分程度で行ける場所にあつたのだ。

俺は少し、まだ腕に残っている零の温もりを感じながら、家へと足を進めた。

帰る途中、メールアドレス聞いておけばよかつた。と後悔したが後の祭り。

明日の朝にでも聞けばいいか。

俺は、誰もいない家のドアを開いた。

「ただいま」と言つても返事は無いこの家。

わざわざまでの温もりが一気に冷えたよう、少し…少しだけ感じたことの無い、寂しさが俺の心へと入り込んできた。

次の日の朝。

いつもの時間の電車に乗り、再び零に会えることを期待して学校へと向かった。

すると今日も、電車の中で三つ編みモードの零を見かけた。

俺が乗る、次の駅から乗つてきてこらしー。

「爛」，上九

俺が彼女のそばに寄り話しかけると、案の定無視をされた。

「おー、ちび櫻さん？」

肩をポンポンと叩くと、ひしゃく俺のほうを向いてくれた。

「氣安く名前で呼ばないで」

昨日は俺のことを名前で呼んだくせに。

「で、何？」

彼女は俺を睨み付けるように見てきて、俺はその視線に少しうるた
えた。

ベビーッたんじやなくて、照れるまうで。

…睨まれて、照れるなんて俺はマゾっ気があるのか？

いや、殴られるのは好きじゃない。

…これが恋なのか？

「いや、おはようって言つてに来ただけなんだけどね」

「や、おはよう

彼女はそれだけ言つと、再び俺を見なくなつた。

そのまま少し沈黙の時間が過ぎたとき、昨日のメールアドレスを聞く事を俺は思い出した。

「石上、電話番号とメールアド教えてくれよ

俺がそうこうつと、再び彼女の顔がじつちを向いた。

「な、なんであんたに教えるきやいけないのよ」

少し驚いた様子の零。

「俺と、石上の仲だろ？」

「どんな、仲よ」

雲は呆れた様子を見せてから、手をポケットに突っ込んだ。

そういう顔をされると、少し悲しくなるんですが。

「早く携帯出しなさいよ」

雲がそつと、俺はあわてて携帯を出した。

「私が受信するから、送つて」

俺は、赤外線送信できる機能を使って、俺のメールアドレスと電話番号を送った。

携帯をこいつやって、向かい合せになると、少しじドキドキする。

こんな事、今まで無かったのにな。

「送信完了」の文字が表示されると、彼女はちゃんと入っているか確認のため、携帯をいじつている。

「へえ、大地って私と同じ誕生日なんだ」

「まじか？」

俺が送った情報には、住所や、誕生日なども含まれてゐる。

そうしてみると、学校の最寄の駅にてしまつた。

「それじゃあ、あとで私の送つておく」

それだけを言つて、零は電車を降りた。

去つていく彼女に俺は少しでも近づきたくなつて、少し小走りをして追いついた。

零と一緒に行く学校が何よりも幸せだった。

#07 涙の後は（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、いつしたほうがいいとアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で書いていく場合は

net_touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送ってください

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#008 メール

来ない。

何故だか来ない。

学校についてから、家に帰るまでには来るだろうと予想していたのに。

メールが来ない。

そう、メールが来ないのだ。

「メールが来ない！」

俺は学校から家に帰ると、一人で叫んでいた。

学校での俺の行動や言動は明らかにおかしかった。

授業中も、携帯をずっと机の上に出して、零からのメールを待つていたし、何度もセンター問い合わせをした。

そんな姿を明に見られて爆笑された。

「お前つて、分かりやすいなあ！」

「何が？」

「お前、好きな子からのメール待ってるんだろ？ 分かりやすすぎて、腹イテエって。」

「こつてえ！」

あやめはと、授業中にも関わらず笑い続ける明の頭を殴つてやった。

頭をたすりながら、明は笑うのをやめた。

「でもさ、友達として嬉しいんだぜ？ 友人に好きな子が出来ると」

かすかに笑みを浮かべながら、明は俺に言つてきた。

明も、性格はともかく、容姿は悪くない。

服のセンスもあるし、話もつまご。

ただ、性格が少しやっかいなだけで、一緒に居ると楽しい奴だ。

そんな、明だから結構女からも人気がある。

「なんで、嬉しいんだよ。意味わからねえ」

俺は苦笑いしながら、明に問うと明はさつきと変わらない笑みをこぼしてこう答えた。

「こんな純粹な恋をして、こんな顔をしてると、やっぱ大地は心を持つた人間なんだな、って。今まで冷血とまで呼ばれた大地がだぜ？ そう考えると、やっぱ嬉しいんだよ」

俺は「そつか」と答えると、「やつそつ」と明が答えた。

「やういえば、どんな子なんだ？ お前の好きな子っていうのは。」

「…秘密だよ。秘密」

「教えてよ～」

そんな話をしていると、授業の終わりを示すチャイムが鳴った。

それから一日中、明から質問の嵐だ。

こんなのが、ずっと続いたら、俺は不登校になるかもしれない。

それぐらい、心に悪かつた。

家で一人ベッドで横たわりながら、彼女のメールを待つた。

夜になつても、来ない。

来ないではないか。

「来なああああい！！」

本日、何度目であろうかの言葉を発すると、俺の携帯が鳴つた。

携帯の画面を覗くと、そこには明の文字が。

大きいため息をひとつ立て、電話に出た。

「なんだよ…」

「うわっ、お前テンション低いぞ」

「…なんだよ？」

「合コンが、今からあるんだけど…その様子じゃ来れないよな

行けるわけが無い。

「い」みんな

俺がそうこうと、明が元気よく「いってー」と言ってくれた。

そのまま電話が終わると、俺は枕元に携帯を置いた。

今日は来ないかな。

はあ……とため息をつく。再び携帯がなった。

「雲かー!？」

そう叫んで、携帯を覗くと見知らぬアドレスからのメール。

メールを開くと、メルマガからのメールだった。

「…ふつ殺すぞ。何度も期待させてやがって」

携帯を折ってやひつかと思つたけど、わすがに出来ない。

「雲…」

俺がそう呟いたとき、再び携帯がなった。

少し期待していたが、内心「来ないだろ?」という気持ちが大きかった。

ため息をつきながらメールを開くと、題名の部分に「石上雲」という文字が表示された。

嬉しさのあまり、ベッドで横たわっていた俺の体は、いっきに起き上がる。

メールをあけると、そこには雲のと思われる電話番号と文章が一文だけ表示されていた。

呼び方、雲でいいよ。

•

#008 メール（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こつこつしたほうがいいとアドバイスをくれると本当に嬉しいです。

評価で書いていく場合は

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送ってください。

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#09 テーブルの誘い

あのあと、俺は壇にメールを返した。

返したところで、メールが返ってくるとは思っていなかつたが。
メールを送つてから一時間、少し期待をして待つていたが案の定返つてこない。

諦めて、明日のために寝ることにした。

次の日、俺はいつもおつ彼女に会つたために学校へ向かった。

毎日同じ電車に乗つていると重つことも分かつたから、毎日学校に登校するのが楽しくて仕方が無い。

今日も、次の駅から乗つてきた彼女を発見した。

「おはよう

「おはよう

今日は無視をしないで、しっかりと返事をしてくれた。

これも、恋成立のための第一歩なのか…?

そんな淡い期待とは裏腹に、そのあと会話が進まない。

「し、し、し、し、」

改めて、靈と呼ばないとすると恥ずかしさのあまり、言葉が詰まってしまった。

こんな気持ちになつて居ることを靈は知らないのだろつた。

そう思つて、少し悲しくなつた。

「し、靈？」

名前を呼ぶと、かすかに反応があつた。

「何よ？」

「えっと、あのね」

それで、何を言おう。

計画も無ごのに、名前を呼んでしまつたではないか。

少し沈黙が続く。

相変わらず、雲は俺のほうを見ない。

「あのや、今度の日曜日…」

俺は何を言おうとしてるんだ。

5秒ほど時間を置いた後、言葉の続きを言った。

「暇…かな？」

…『デートに誘つてしまつた。

「何で？」

「いや、遊べるかなって

「何で、大地と…？」

少し驚いた様子の彼女。

それがおかしくて、笑いそうになつた。

「」で笑うと、多分機嫌を損ねるんだろうな。

そつ思い、笑うのは我慢した。

「いいだろ？ この前助けてあげたよね？」

俺がちよつとした悪戯の笑みをこめて彼女に送ると、零は少しうつむかえていた。

「だ、だから？」

「そのお礼として、俺とトークをしてほしい」

一ヤリと笑う俺に、零は落胆の表情を見せた。

そこまで落ち込まなくともいいのに。

「…いいわよ」

「本当に？」

「嘘…とっても、大地は連れて行くんでしょう？」

そうじゅよ。

そうですとも。

「まあ、いいわ。日時と集合場所はそつひできめてね

そういうと、彼女は電車を降りた。

今日も、いつも처럼感じる電車が、とてもなく一瞬に感じた。

改札口を出て、彼女の後ろをついていくと、電車は止まり、俺のほうを向いた。

そして一言。

「いの前のお金だからねーーー？」

それだけを言って、再び学校へと向かっていった彼女だった。

日曜日は明後日。

大地がこの2日間がとてもなく長く感じたことは、言つまでもない。

#09 テーブルの誘い（後書き）

今回は本当に短くて、申し訳ございません。

。 。 （泣、 、 ） 。 。 。

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつもほづがいいと書つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で書くににくい場合は

net_touki.net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q>

84s / mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#1-0 カットされる（前書き）

【最近、雲のキャラ設定が俺の中で少し変わってきた】

#110 ちつてくれる

田羅口。

11時に霊の家前に集合。

土曜日に俺はそうメールを送った。

とうとう明日か。

そつ思ひと、今日はなかなか寝付けない。

羊を1300まで数えた所で意識が無くなつた。

…やばい。

ただいまの時間、午前10時半。

俺は起床した。

「やべー。」

時間が無い。

あと20分ほどで家を出発しなければならないのだ。

「なんで、マナーモードになつてんだよー。」

俺は自分の携帯にソリハツた。

髪の毛を即行でセッティし、服を着替え、歯磨きをして、出発。

朝飯なんか食べてられるか。

走って雲の家の前まで行くと、雲はまだ出てきては居なかつた。

「…間に合つた」

雲の家に着いたときには、11時5分前だつた。

息を整えてから、雲にメールをする。

『着いたよ』

それから5分後、11時ジャストに彼女は出てきた。

「…く？」

俺のどいつから出たか分からなによつた声とともに。

「何よ~？」

「何よ…じゃな~って、それ…どうした?」

「ど、どいつたって聞かれても…」

俺がどうした、と聞いたわけは零に原因があった。

だって、ほり、あれ…。

「な、なんで三つ編みモードじゃないんだ?」

そう、今の零は俺が最初に彼女にあつた姿だったのだ。

髪の毛を下ろして、眼鏡をはずし、とっても美人モードの零。

「なんでつて…あなた、自分が有名つて事を忘れてない?」

「へ？」

彼女は意味不明なことを言い出すと、面倒くさそうに答えた。

「私が、学校に行く格好で大地とデートしたら、私は立っちゃうじやない」

つまり、雲は立つのが嫌なのだ。

「この姿だったら、学校に行つても誰も私だってわからないからね。石上大地と何か関係あるのか？」って、最近朋子に聞かれて困つてるんだから

不貞腐れた表情の雲もまた可愛かつた。

朋子というのは、どうも仲のいい友達のことらしい。

俺が定期を渡しに行つたときに一緒に居た人だと説明してくれた。

「まあ、俺だつて最初分からなかつたからな。雲のあの変貌振りは。

「

分かつたら駄目なのよ。と彼女は言った。

「でも、大丈夫か？ その姿で外に出るの、嫌がってたじやないか」

俺がそう言つと彼女は少し俯いて何かを言つた。

それを何か聞き取れない俺は、聞き返すと零は俺の目を見て今度ははつきりと

「大地が…守ってくれるんでしょう？」

と言つてくれた。

予想もしていなかつたその言葉に、俺はかなり戸惑つたが、「当たり前だろ」と答えておいた。

「それじゃあ、行きますか」

俺がそつ言つて駅へと足を運ぶと、素直に零はついてきてくれた。

なんか俺たちカップルみたいだな。と俺が言つて、馬鹿じゃないの？ と素つ氣無く言われて、ショックを受けたまま目的地である遊園地まで行つた。

#1-0 ゆうべれる（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、いつしたほうがいいとアドバイスをください
ると本当に嬉しいです。

評価で書いていく場合は

net_touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送ってください

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#1-1 初デートの行方1

白髪の彼女…いや、現在は彼女ではないが、女の子を引き連れて、俺は遊園地に着いた。

みんなが、雲を見ているのが嫌でも分かる。

『見るな!』とか言つてやりたい…。

けど、雲が怒るんだろ? うあ。

「どうしたの?」

周りの連中を”無意識”に睨んでいると、雲から声をかけられた。

「いや、なんでもない。早速入るか」

遊園地の中に入ると、懐かしい雰囲気が俺を包んだ。

「お~…

無意識にこぼれた言葉に雲はこりこりと笑ってくれる。

「遊園地ぐらいで驚くんじゃないわよ」

そつ言い捨てて、彼女はテクテクと歩き出した。

「どう行くんだ？」

と、俺が声をかけても無視する。

「無視されると傷つくなのですが。」

率直な意見を述べると、あっさりと俺が一いつ瞬まきを向いてくれた。

しかしそのまま俺を睨んでくる。

「な、なんだよ」

「何でもない」

再び俺は前を向いて歩き出した。

俺は少し小走りをして、彼女の横へと着く。

「いや、一人で歩いていると、本当に彼氏、彼女みたい…。

「マジで嬉しい。」

「そんなこといつど、霧はさつきみたいに『馬鹿じゃないの?』と俺を否定してくれるだりうが。」

それ以前に、霧は俺が霧に恋心を抱いてることいつどに付いてくれているんだろうか?

「おっ、これ乗るわー。」

俺はそう言つて霧の肩をポンと叩き、田の前のジョットロースターを指差した。

「…」

沈黙の霧。

その様子は…まさか…

「ジョットロースター乗れない…?」

俺がそうこうと、彼女の顔がギョッとした。

「の、乗れないわけ無いでしょー。」

そう言って、雲は無意識なのか、意識してなのか分からぬが俺の手を掴んでジエットコースター入場口へと歩いていった。

雲の手は暖かくて、やわらかくて、気持ちよかつた…と、言えれば変態扱いされるのかな。

田曜日と言つのこと、あまり人は多くなく、ジエットコースターの順番も2、3度待てば順番がやってきた。

「だ、大丈夫か？」

あきりかに、雲の顔色が尋常じやない。

やめるなら、今のうちだぞ？

「だ、じゃいじょーぶなの！」

…思いつきり言葉を噛んでいますが。

『安全バーをしっかりと下ろし、固定してください』

アナウンスが流れると、俺は自分の前にある安全バーを下ろした。

もう一度、雲のほうを見ると、緊張しているのかアナウンスが耳に入っていない模様。

「安全バー」

「…」

反応が無いので、俺が仕方なく彼女の安全バーを下ろしてあげると、彼女は意識を取り戻したようだ。

こんな様子で大丈夫なのかよ…。

『出発します…』

アナウンスが流れると、ジェットコースターはゆっくりと動き始めた。

初めは坂を上って、落下していくという仕組みのジェットコースターだ。

この遊園地ではベスト5に入るような怖いジェットコースターだらう。

俺は、まったく怖くは無いのだが。

ビビンと頂上に近づいていくと、雲の顔が恐怖であふれていた。

降りる3秒前なのか、5秒前なのか分からぬ。

雲が俺の手をとつたのだ。

「し、雲？」

俺がそう問いかけると、ジェットコースターは落としていった。

「怖いなら、言えよかつたのに」

あのジェットコースターも終わり、俺たちは近くのベンチに腰掛けっていた。

雲の顔は、真っ青だ。

「い、言いたくなかったのよ」

「ふつ、強がりやがって。可愛いやつめ。

「はいはい、冷たいジュース買つてきてやるから待つてろみー

俺はベンチから立ち、自動販売機へと向かった。

#1-1 初テートの行方1（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言つアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

net_touki_net@yahoo.co.jp にメールを送つてくださるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#1-2 初デートの行方2

「えっと、何を買おうかな……」

俺は今、自動販売機である難題と立ち向かっている。

零の好みも知らないし、何が嫌いなのかも知らない。

炭酸は飲めるだろ？

ミルクティは飲めるだろ？

お茶より、オレンジジュースの方が好きなのか。

俺：結局零のこと何も知らないよな。

1分ほど悩んだ挙句、結局ミルクティとオレンジジュースにした。

どっちも飲めない奴なんていないだろ？、という考え方だ。

少し遅れたため、少し小走りで零の元へと向かうと、男子3人組に囲まれていた。

これだから、可愛い奴は可愛そつなんだ。

俺は零の下へと走った。

「おい！ 僕の女に何の用かな？」

そう言って、零と男子どもの間へ入った。

「 「 「 「 … <?」 「 」 」

すると、俺と男子3人組の声が重なった。

「え、こんなところで何しているんだよ…？」

「大地こじ…これ、噂の…？」

一番出会いたくない相手と言えば分かるだろ？

相手はそう…明達である。

「い、こんな可愛い子だったのかよ」

「ひっせ…」

俺の後ろでポカンという顔をしている零に説明をした。

「えっと…」いつは俺の友達で、明つて言つんだ。」

「そつ」

雫は少し不機嫌そうに返事をする。

「じゃ、俺たちは退散するとしましょうか。ごめんね～！　大地の彼女さん！」

明は手をフリフリと振りながら立ち去ってくれた。

俺は雫の隣に座り、買ってきたジュースを見せて「どっちがいい？」と聞くと、彼女は即座にミルクティを選んだ。

「だから、私は大地の彼女じゃなつて」

ボソッと聞こえるように言つてきた雫を、悪魔と思つた俺はおかしな人間でしょうか。

「そつですね」

雫は無言でミルクティを飲み続ける。

「靈ひで、ミルクティイ好きなの？」

彼女は正面を向きながら頷いた。

「何で？」

少し考えた素振りの後、彼女は少し微笑んで言つた。

「なんか、ほわわんってするじゃない？」

「ほわわん？」

「うん。ほわわん。」

彼女の少し真剣な顔を見ると、俺の心もほわわんとした気がした。

「ほわわん…ね」

分かる気がする。

俺は心の中でそうこつた。

「ジヒツト」「ースターは駄目なんだよな、どりあえず回る系に乗るか？」

そうこういつと、彼女の顔がギヨツとした。

「無理なのね」

「む、無理じゃないもん！」

「正直に言ひなさい」

俺はつよいがる雰を抑えるかのよつて言つた。

「雰が楽しんでくれなきゃ、面白くないだろ？ 嫌いなのは嫌い
つて言つてくれ」

俺は本日最高の笑顔と思われる笑顔で彼女に言つた。

「じゃあ、遊園地なんか嫌い。」

そこまで否定しますか。

「…OK」

そう答えるしかなかつた俺の心境を誰か受け取つてください。

その後は、適当に時間をつぶすために、飲食店で昼食を取つたり、
アーケードゲームなどで遊んだ。

#1-2 初テートの行方2（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言つににくい場合は

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてください

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#1-3 初デートの行方③

「観覧車は…乗れるよな?」

本日の最大のイベント（俺が勝手にきめたけど）の観覧車に乗れるか聞いてみた。

「うん、観覧車は大丈夫」

「じゃあ、乗る?」

今の時間は、6時を回っている。

彼女は無言で頷き、俺の後ろの服を掴んでついてくる。

あれから、毎を過ぎると、一向に遊園地の人口密度が増え、交差点では彼女を見失つてしまつのではないかと心配になるほどだ。

観覧車の入場口で10分程度待つていると、順番がやつてきた。

係員の人には案内をされ、観覧車内へと乗りこむ。

零と俺は向かい合わせになるように乗合わした。

本当は、零の隣に座りたいんだけどな。

観覧車に乗つてから、最初の5分間ぐらい、沈黙が続いた。

その沈黙を破つたのは、なんと雫だったのだ。

「今日は…」

雫はそのままで言つて、言葉を詰めらせた。

「ん?」

「…なんでもない」

そういうえば、さつきから外が見たいだけなのか、よく分からぬが
俺の顔は見ない。

「そんな途中までだと、気になるだろーが…。」

俺は雫の顔をじっと見ていると「そんなに睨むな。」と怒つてきた。
睨んでないの!」…。

「わ、私となんかと、デートして何が楽しいの?」

やつと、俺の顔を見てくれた。

「やつや、……雲が面白いから」

俺は笑いながら囁つと、ため息をつべ雲。

なんでため息をつべ必要があるんだ。

「雲は？」

「今日は、災難だつたね」

そりやそつだ。

明に絡まれるし、ジエットコースターに乗らされると、雲ひとつで災難の日だつただろうな。

「…」めんな

俺が謝ると、雲は驚いた顔で俺の顔を見てきた。

「な、なんだよ…」

雪は俺から田線をはずし、外を見ながら「別に」と答えた。

観覧車を降りたら、帰宅することにした俺たち二人。

人が多いから彼女は相変わらず俺の後ろの服を掴んでいる。

誰かこの状態を、写真でも、絵でもいい、残してくれないか！

俺自身、さつきから後ろを振り返りたくて仕方ないんだ。

…めりやくめりや可愛いんだろうな。

雪の…そんな姿は。

帰りの電車に乗り、零の家の最寄り駅で降りて、俺は彼女を家まで送つてあげた。

その途中は、さすがに俺の服を掴んでくれなかつたけど。

無言のまま歩いてると、彼女の家が見えてきた。

家の目の前に来ると、彼女は大きく深呼吸して、俺の服をちゃんと引つ張つた。

その行動がとてつもなく可愛くて、抱きしめたくなつた…。

「ど、どうした？」

抱きしめたい気持ちを抑えて俺は静かに聞いた。

「…」

なぜか黙っている。

数秒後、もう一度大きく息を吸つて吐いたかと思うと、何か言い出した。

「か、観覧車の中では、さ、災難とか…言つたけど、本当は……」

た、た、たのしかったよ

雲はそう言つて、俺の言葉を待たないまま、家へと入つていつてしまつた。

「そ、そりゃ…」

俺がそう呟いたときには、家のドアは閉まっていた。

#1-3 初テートの行方③（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいとアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で書いていく場合は

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送ってください。

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#1-4 初デートの行方4

し……心臓に悪いって……。

デートの帰り道。

10分ぐらいの道のりなんだナビ、その帰り道は今日あつたみたいで、頭がいっぱいだった。

靈と出会い、靈と語り、靈と喋る。

そんな一日を振り返つてみると、一ヤニヤがとまらなかつた。

特に……最後の……

あの、恥ずかしがり方は、俺の心臓に響く。

あと数秒、靈が家に戻らなければ、俺の理性はふつとんでいたどうう。

今より仲を悪くしたくないからな……。

「けど……あれは、可愛かったなあ……えへっ……えへへ」

独り言を言つてしまつた。

気持ち悪い……俺。

あれこれ、考えていると、自分の家を通り越してくることに気がついた。

「…馬鹿か俺は」

ため息を大きくひとつこて、自分の家へと足を運んだ。

翌朝。

今日も、いつもどおりに彼女が乗るであらわ、電車の時間に間に合つた。

最近、学校に行くのが、楽しくて仕方ない。

前までは、あれだけ行くのを嫌がつて居たのに。

…恋つて、素晴らしいね。

「何を、馬鹿なことを呟いてるんだろうか、俺は」

「何が?」

後ろから、ふと声がかかった。

「お、おはよ。今日もいい天気だね」

三つ編みモードの雲だ。

「…私の質問は？」

「え？　あ…最近学校に行くのが楽しいなって、心の中で呟いたのさ」

「何で、学校が楽しいの？」

「何でつて…そりゃ…」

雪と会えるからに決まってるじゃん。

けど、わざがにそんなこと言えないよなあ…。

そんなに、問い合わせないでくださいませ、雪様…。

「わざや？」

「…無視する気？」

「いやいや、そういうわけじゃないナビ…」

俺の顔をめったに見ない事が、今日なぜたら見つめ…いや、これは睨んでくれとこつた方が正しけ。

「言えなによいつな事なの？」

「えっと…」

そりや、やつに決まってるだろー

この鈍感女。

「…勉強が楽しいの？」

「…は？」

「それとも好きな子が居るとか？」

…もしかして、俺が悪いこと好きなのを知つて、それを俺に言わせよつとしてるのか？

いや、そうに違いない。霧も俺が好きで、それで告白をしてもいいんだ。

俺に鎌を掛けてるにちがいなんだ。

「そ、それは……」

俺が、『霧が好きだからー』とおっしゃった瞬間、霧は言葉を挟んだ。

「あなたでも、好きな子いるんだね。」

そう言って、彼女は俺から視線をはずし、再び黙つた。

…一瞬でも期待した俺が馬鹿だった。

やつですみね。この霧がそんな回りくどいことをする訳がないよね。

はは…はは…泣きたくなるよ。

「乗っ過（の）したいの？」

霧の声で、我に戻つてみると、電車は学校の最寄り駅についていた。

「あ、降る

やつまつて、俺の下へと歩み寄った。

… あなたのようだ、元気な俺のことを無視するのかのようだ、歩いて
いつたが。

#14 初テートの行方4（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言つににくい場合は

net_touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてください

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#1-5 学校での俺たち

「おい、大地。あのチョオオオオオオ可愛い子は誰なんだ」

学校に着くと、明にいきなり質問をされた。

まあ、予想はしていたが。

「誰つて、噂のあの子つて言つただろ」

そんな恥ずかしいことを何回も言わせるな。

「どこの学校の子だよー。」

「…秘密。」

俺と関わってるって事を知られたくないから、あのばれない格好にしたんだからな。

学校名まで言つたら、絶対明のことだから、名前まで聞いてくるだろ。

明のしつこわは、天下一品だからな。

学校でも結構有名な俺の昨日の出来事は、学校中に知れ渡ることになつた。

話に聞くといふ、『』メまで出回つてゐるらしい。

…あの雰の本当の姿を知つてゐるのは俺だけで十分なのに。

みんなが知つてゐるとなると、少し嫉妬心が沸いてきた。

「だ、大地先輩…」

廊下を歩いていると、下級生と思われる女の子に話しかけられた。

「どうした？」

俺は優しい声で聞いてあげると、女の子は少しひくびくしながら

「さ、昨日の人は、彼女なんですか？」

と、聞いてきた。

恥ずかしがつてゐると言つより、怖がつてゐる様子。

」の様子からすると、脅されたか、何らかの手段で、どうかのケバイ女から聞けと言われたんだろうな。

「…違つよ。友達さ

俺は、優しく微笑んで答えてあげる、彼女はそれと立ち去ってしまった。

「可愛がりやつて」

そう呟き、再び歩き出した。

俺が、今向かっている場所は、2年職員室。

先生に呼ばれたのだ。

…別に悪いことはしてない。

職員室の前まで来て、ドアを開けようとして手を掛ける前にドアが開いた。

俺の目の前には、霧が居た。

「…」

「…」

ビックリして名前を呼ぶと、田で『何?』と訴えているようだ。

「何かやらかしたのか?」

「あんたとは、違うから」

「…そつか」

俺は、零の横を通り抜けて、職員室へと入ると、後ろで教師と零がなにか話し始めた。

「池山なんかと関わっているのか? 石上は優等生なんだから、あんな池山なんかとは関わりなんか持たないほうがいいぞ。変なことをしているんじゃないかなって、他の先生に疑われるからな。」

ハハッと笑いながら言う先生のその言葉に、俺の頭の中にある句かが、プチッと音をたてる音が聞こえた。

「テメー…」

俺が、その先生に近寄らうとしたとき…

「…先生は大地の何を知つて、そう言つてゐるのでしょうか？私は、貴方なみみたいな大人にはなりたくないありません。先生を見損ないました」

雲が先生にそう言つたのだ。

先生も驚いたのだろう、田が点になつてゐる。

「僕は、石上のことを思つて…」

何かをいい続けよつとする先生を思いつきり雲は睨んだ。

そのまま、その場から立ち去つたのだ。

「し、雲…」

雲の言葉で少し心が安らいだ。

しかし、先生の言つ事は間違つていない。

分かっているんだ。

俺は、雲には相応しくないと。

毎回成績上位を取り続けている優等生の霧と、ここまで落ちこぼれた俺とは不釣合いなのだと。

分かつていたんだ。

だからこそ今まで霧には何も言ってこなかった。

分かつっていても……離れられたかったんだ。

だって、俺……霧の……事が……好きだから。

愛しているから。

#1-5 学校での俺たち（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言うアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

net_touki_net@yahoo.co.jp にメールを送つてください。

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#1-6 大地の心の揺れ

あのあと、職員室で先生の説教をくらった。

どつかのおばさんが、ゲームセンターで俺が他校の不良と喧嘩をしているところを見て、学校へ通報があつたらしい。

余計なことしゃがつて。

謹慎は免れて、厳重注意だけとなつた。

しかし、その説教も、俺の頭を素通りしていった。

さつきの、あの事が頭から離れないために。

教室での俺も自分でも分かるぐらいおかしかつたのだ。

自分の席を間違えたり、明の呼びかけも耳に入らなかつたり。

あんな些細なことで…俺がこんなふうになるなんて。

そこまで、俺の中で零の存在は大きくなつていた。

「馬鹿みてえ……」

家に着き、ベッドの上で一人、腕で目を隠しながら横たわつていた。

むしゃくしゃかる。

心が騒がしい。

ベッドから飛び起きると、明に電話をしてゲームセンターへと足が向かった。

時代遅れの商店街の中に、ポツンとある古びたゲームセンター。

周りにはイチャイチャしているカップルや、不良が煙草を吸っている。

「うつとうは、ぱつと遊ぶのが一番だ。」

そんなことを考えていると、明たちがやってきた。

「よつー 明」

「じつしたんだよ？ お前から遊びに誘つとか珍しこな」

「うつとなー」

俺は満面の笑みを向けて、明と会話をした。

楽しもつとした。

しかし、その雰囲気に害を加える男が俺に近寄ってきたのだ。

「よお、大地じゃないか」

そこに居たのは、俺が今日先生に説教をくらつ原因になつた喧嘩でボコボコにした男と、仲間であろう3人の不良だつた。

俺がボコボコにしてやつた奴の名前は山井隆一。俺に恨みを持つている不良の一人だ。

「どけよ。気分が悪くなる」

俺はそう言つて、隆一の隣を通り抜けようとした。

「そういえば、お前の女見たぞ」

その言葉で、俺はびくっつと体が反応し、歩くのをやめた。

「可愛いなあ～お前の女。…探して俺が食つてやうつか？」

俺はケケケと笑いながら言つ隆一の胸倉を掴んだ。

「てめえ、そんなことしゃがつたらぶつ殺す。」

隆一を睨んでいると、後ろから明の声が。

「大地やめろ！」

多分、数的不利だから、手を出すんじゃない。といつ意味だりつ。

「あの池上大地も、あの女が絡むと、ただの男か。これで食うのが
楽しみになつたぜ」

大声をあげて、笑う隆一に俺の怒りが頂点へと達し、ドン！ とい
う音と共に、隆一は吹っ飛んでいった。

「いってえなあ！」

隆一は、体を起こし俺に殴りかかってきた。

それをまともに食らう俺。

4対2の喧嘩が始まった。

周りには、野次を飛ばす高校生。

俺は無我夢中で、隆一達に殴りかかった。

相手は喧嘩慣れしてるだけあって、この前のレイプ未遂野郎なんか
よじよじっぽじ強い。

そして数10分後、俺たちの喧嘩は終わった。

「ぐはっ」

冷たいコンクリートの上に倒れる俺。

その隣には明が居た。

隆一と、その仲間は、俺らの少し回りついで同じよじて横たわっている。

ははは…身体中いてえ。けど、骨折はしてないみたい。

「あき…ひ」

はあ、はあ、と少し息の荒い明の下に体を起こして近寄った。

「大丈夫か？」

俺がそう聞くと、明はエヘヘと笑いながら頷いた。

「骨折はないのか？」

「大丈夫だと思ひ…。」

そういうながら、体のあちこちを確かめる明。

「じめんな…」

俺が下を向いて謝ると、明はいつもの元気な声で

「なんで、謝るんだよ。俺たちは心友だろ？　お前がムカつく事を言われたときは、おれだってムカつく。俺がお前の立場でも、あいつを殴つてたと思うよ。だから…泣きそうな顔して謝るなよ。神崎高校の池上大地だろが」

「せうだな…」

分かればよろしい。と言ひて、エヘヘと笑う明に俺は肩を貸した。

#16 大地の心の揺れ（後書き）

心友といつ言葉を使ってみました。

友達がよく『心友』といつ言葉を使うので…。

特に深い意味はありません。

親友ととってももらつていいです。

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、『うしたほうがいい』と書つアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いくらい場合は

net_touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてください

<https://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#1-7 自宅謹慎

あのあと、俺は学校から一週間の自宅謹慎と告げられた。

明はびしきら厳重注意だけですんだらしい。

「はあ…」

そして、今日は謹慎最終日。

俺はベッドの上で寝転んでいた。

今回の離一の救いは、退学にならなかつたこと。

あれだけ、派手な喧嘩をすれば退学になつてもおかしくないのだが、
今回は“リンク”された

と呟つことになつていたらしく。

それでも、喧嘩は喧嘩と言つことじで、俺には一週間の自宅謹慎です
んだのだ。

朝8時くらいおきて、毎日2回学校から電話して、俺は一週間の自宅謹慎です
す。

そんな毎日の中、俺にある一通のメールが届いた。

「あ、誰だ？」

いつも、こんな生活をしていると、独り言が多くなる。『』。

携帯を手に取り、メールを開いてみると、そこには『石上雲』の文字が。

「……雲……」

俺は嬉しさのあまり、ベッドから飛び起きて、その辺をうつわうわしながらメールを読んだ。

『家どけ』

雲からのメールは、ついぶん短かかった。

なんで、雲は俺の家なんか知りたいんだ？

まさか、見舞い！？

それとも夜這い？

いや、後者は無いな。前者も…ないけど。

俺は自分の住所と、分かりやすい説明文を加えて、返信をした。

それから20分後、メールが返ってきた。

『今日、行くから』

…何で？

もしかして、喧嘩でボコボコされたのを知つて見舞いに来てくれるのか？

まさか…あの雲が？

いや、もしかしたら雲は…。

色々妄想を膨らませ、俺はたまらず、雲の今までのメールを保護した。

それにしても、あの雲に会えるのが楽しみで仕方が無い。

俺は、自分の部屋から出て、髪の毛、服装、その他身なりを雲に会つても恥ずかしくなこようにてセッテをした。

夕方4時ごろ。

そろそろ学校も終わり、雲が家に着く時間帯だから…

結局俺は3時過ぎから玄関で雲が来るのを待っていた。

学校が終わるのが3時半と言うのに、馬鹿か俺は。

そして、4時17分。家のインターフォンがなった。

俺は、何も言わず玄関のドアを開けると、そこには美人モードの雲が居た。

「し、雲…」

7日ぶりに雲に会つた俺は、彼女を抱きしめたい衝動に襲われた。

「大地が自宅謹慎になつたって聞いたから」

「とりあえず…入る?」

「いや、いい」

速攻断られましたとも。

「えっと…今日はどうしたの?」

俺はジグビクしながら黙って、靈はかばんに手を伸ばし、何かを取り出すとじてこる。

「この前ね……学校に行るのが乐しこつと言つたじゃない?」

「うん

それは、靈が居るから。

あると靈のかばんから取り出されたものせ、なんと…

「はい、皿や謹慎だと、まともに勉強できないでしょ?だから、ノートをapseしてきてあげたの」

ノートのapse用紙だったのだ。

「……なんでこれ?」

「何でって、勉強が好きなんでしょう?」

至つてしまじめな顔だ。

もしかして、この子は本気でやつれていたのだからつか。

「icusの前、言つてたじゅん

本当に彼女はまじめな顔だ。

確か、この前の電車のときは『好きな子が居る』でまとまつた気がするのだが。

とうあえず、雪に反論するのは面倒やつなので…

「え、あ…うん。ありがと」

そうこうで、ノート用紙に手を伸ばした。

雪の文字は、綺麗と書いつつ、可愛かった。

「字、読めなくとも文句言わないでね」

そう言って、彼女は俺家を後にした。

このページ用紙が、俺の宝物になつたことは言わなくて分かるだ
ら。

#17 自宅謹慎（後書き）

自宅謹慎といつものは、自分も回りもなつたことがないの。。

半分以上というか、ほとんどが想像です。

ハイ。

先生に聞くのもなんだと思ったので、想像で許してください。。。

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつしたほうがいいと書つアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net-touki-net@yahoo.co.jp にメールを送つてくださるが、

<https://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>

で、監修でのメッセージページもできます。
宜しくお願いします。

#1-8 守れなかつた（前書き）

暴力シーンが含まれて居ます。

苦手な人は、ご遠慮ください。

…よく考えてみるとそんなに入つてないか。

#1-8 寅れなかつた

雲が帰つて、俺はベッドの上で雲の文字と睨めっこをしていた。

これが、雲の文字か。

「可愛いなあ……」

雲のことを思い浮かべると、笑みが勝手にこぼれる。

重症だな、こりゃ。

Hへへと笑つていると、携帯がなつた。

画面には『石上雲』の文字が。

びつしたんだね!へ、と思ひ、電話に出る。

「もしも~し。何があった?」

雲から電話がかかってくるとか、もう人生に無いことだらう。

しかし、俺のその気持ちとは裏腹に、予想もしていなかつた声が聞こえた。

『大地』

その声の持ち主は、最近聞いたことがある。

「隆一」

何故、この電話番号から、隆一の声が…。

…最悪だ。

あの隆一に、零が拉致されたのか。

『女を助けてほしかつたら、今すぐ高杉工場に来い』

そういうと、電話はブープーと音を立てて切れた。

俺は携帯をポケットに入れて、家を飛び出した。

「くそつー！」

原付バイクにまたがり、高杉工場へと向かう。

確か、あそこは廃工場だったはず…。

雲の安否が気になり、スピードをあげた。

高杉工場に着くと、俺は原付バイクを適当に駐車して、入り口を探した。

すると、人が4人ほど並んで通れそうな大きなドアがあった。

そこの奥に、隆一が居ると思われる。

意を決して、ドアをあけると、そこには予想通り隆一と大勢の不良集団が。

「おい、雲は？」

そう問い合わせると、隆一はニヤリとしながら指差した。

その先には、雲が柱に縄で縛られている。

あの様子だと、まだ何もされていないようだ。

俺は無意識のひび、元ひびのまづくと走り出やうとしていた。

「待てよ」

隆一のその声で、我に戻る。

「あれは、後のお楽しみだ。お前をボコボコにしてから、あの女をお前の前で犯してやるよ。」

「テメエ…ふつ殺す」

ざっと見る限り、相手は10人以上。

こんなのは、俺一人じゃどうにもできない…。

けど…けど…靈を見捨てるわけにはいかないだろ。

隆一の合図とともに、十数名の中の4人が俺に殴りかかってきた。

最初の一発、二発、三発はよけたものの、攻撃が出来ない。

すると、四発目で俺の腹部を、相手の蹴りが直撃した。

「ぐはっ」

俺は、倒れそうになつたその体を、無理やり立て直す。

「テメエら……ぶつ殺す……」

容赦なく4人からの攻撃が。

反撃をするものの、4対1という数的不利はなんとも否めない。

くそつ。

守るつて……約束したのに。

俺はそれでも、殴り続けた。

ボコボコにされながらも、4人を倒し、前へと進んだ。

「大地……もうやめて……」

泣きながら訴える零。

泣かしたのは俺なのか。

雲を……泣かしたのは俺……？

「雲……泣くな。大丈夫だから……」

強がつてみても、ビヒシナツモナニの分かつている。

「テメエ……殺す！」

俺が隆一の方へと走つて行つても、その前に居る野郎じもに殴られ倒れてしまつ。

くそ……くそつつ……！

「雲……は……おれ……が……ぐはつ……！」

倒れたところに蹴りを食らわされた。

もう……駄目なのか？

「大地……」

涙を流している雲を俺は守れないのか……。

そう思つたとき、工場入り口付近で、声が聞こえた。

「…あ…さひ」

明と、その他大勢の俺の知り合いが、工場の中へと入つてきたのだ。

「大地、大丈夫かよ。電話に出ないと思つたら、先回りされていたのかあ」

いつもの笑みで俺に話しかけてくる明。

「明…」

「まあ、あとは任せとけって！」

そう言って、明グループと隆一グループの喧嘩が始まつた。

俺は、なんとか立ち上がり、雲の下へとフラフラになりながらも歩いていった。

「雲…」

雪の下へと行くと、俺はまず縄を解こうとしたが縄が外れない。

握力が無い……。

早く、ここから逃がしてあげたいと思つばかりに、焦つて何も出来なくなる。

「「めん……」めんな。俺の……せいで……怖かっただひ……」めんな

…

涙を流しながら訴える俺に、雪は何か言葉を掛けた。

それを何かは覚えていない。

俺の記憶は、ここでも遡くなつていたから。

#1-8 われなかつた（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、いつしたほうがいいとアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いくらいには

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送ってください

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#1-9 彼女の正体、俺の過去

気がついたら、俺は自分の家のベッドの上に居た。

「…」

俺はそう叫んで、飛び起きた。

「痛え…」

体中にビビビと何かが走ったのだ。

「大地、体を起こすな」

そうこつたのは、明。

ビビビ、看病をしてくれていい感じ。

「…」

「ナゾで寝てるよ」

明が指差したのは俺の足元。

そこにはベッドの横にある椅子に座り、ベッドの上に置いた腕を枕にするように寝ている零の姿が。

その寝姿が、可愛くて愛しくて…

「彼女、お前の傍から離れなかつたんだぜ」

明がボソッといつ言葉に、俺の顔はハツとした。

零が…。

心配してくれたのか？

そういえば、あの後どうなつたんだ？

体中痛いながらも、廊下へと歩み寄つたのは覚えているのだが、そのあの記憶が…。

「あのあと…どうなつた？」

俺は自分の記憶が整理できないまま、明に喧嘩の事を聞いた。

明の話によると、隆一グループは明グループにボコボコされたら

しい。

「まあ、あいつ等もレイプまではいかなかつたが、女の子を拉致したから、俺たちにやられたなんて警察には言えないだろ?」

との事。

「大丈夫。俺たちが何か責任を負つようなことは無いよ」

「ヒッ」と笑いながら言つ明に俺は素直に「ありがとう」と答えた。
明たちが何故、高杉工場に明たちが現れたかというと、俺達の知り合いが、写メの子を隆一に拉致されたのを見て、明に報告したということだ。

明が俺に電話しても繋がらないことで、状況がヤバイということに気付き、隆一グループのたまり場である高杉工場へと集団をつれて向かってくれたと言う話だ。

あと少し遅かつたら、本氣で危なかつた。

「ありがとう… 明…」

泣きながら明に言つと、頭をポンと叩かれた。

「俺たち、心友って言つただろ。な？」

明の優しさに触れて、涙が止まらなくなつた。

何より、零が無事でいてくれて、嬉しかつた。

「…なあ、大地。この子の名前って確か…」

そこまで言つて、言葉に詰まる様子を見せる明。

明になら言つてもいいかもしれない。彼女の本当の姿。

正体を。

「石上響ひづるんだ。 3組の…」

「やつぱり。あの、天才少女だろ?」

天才少女…そこまで言われてるのか、零は。

「らしいね。」

「まさか、あの地味な子がこんな…可愛かつたなんて。」

じつと明は俺の足元で寝ている雫を見つめる。

「おい、惚れんなよ？」

容姿では勿論、性格でも明には勝ち目が無いからな。

「それにしても、変貌って言つのは怖いな。眼鏡をはずしたら、かわい子ちゃんでした！って、いうのはアニメの中だけの話だと…。まあ大丈夫だつて、友人の彼女に手を出すような事はしませんよ」

「か、彼女じゃないつて！」

俺がちよつと大きめな声で言つと、明の表情が固まった。

「え…まだ片思いなのか？」

明のその言葉に顔がカアと赤くなるのが分かった。

「大地が、そんな風になるのは、由梨先輩以来だよなあ」

そのまま言つて、明の顔がハツとなつた。

「うーんめで…」

明は俺に謝り、俺は気にするなと声をかけた。

由梨先輩。

谷口 由梨と言つて、俺の中学校のときの彼女だ。

俺が中2、由梨は中3だった。

愛を味わつて、心が満たされていた。

由梨がいれば何もいらないといつほどに彼女を愛していた。

一緒に涙し、一緒に愛を育み、一緒に笑いあい…。

あの日、由梨が居なくなるまでは…

俺は本当に幸せだった。

#119 彼女の正体、俺の過去（後書き）

元カノ出現ですね。

これもベタな展開です。

次回は、由梨と大地のお話。

… 次回題名が「由梨と大地」です…。

そのまんまじょんとか思いました？

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつしたほうがいいと直すアドバイスを貰うと本当に嬉しいです。

net_touki-net@yahoo.co.jp にメールを送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>

で、監査でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#20 由梨と大地

由梨に会つまでの俺は、荒れ果てていた。

喧嘩の毎日。

他校の不良や、高校生に絡まれば、ボコボコにして警察沙汰に何度もなつたりしていた。

そんな毎日だったのに。

由梨に会つまでは……。

あの日は確か、中学1年の時だった。

俺は金髪だったために、学校の先輩の反感を買い、先輩達に体育館裏に連れて行かれて、集団リンチにあい、地べたに倒れていたときの話。

「君、怪我してるよ！？ 大丈夫？」

女の声が、空のまづから聞こえた。

「まじ、早く保健室に行こう。」

俺は女の伸ばす手をはらい、自分で立とつとした。

「いてて…」

結構痛めつけられていたので、身体中が痛い。

「ほり、無理しないで。保健室行こう。」

そう言つた彼女に、強引に保健室へと連れて行かされたのだ。

「センセーイー！」

彼女の呼びかけに答える声は、保健室にはなかつた。

「あれ、いないのかあ…仕方ないな」

そつ言つて、保健室の奥においてある椅子に座らされた。

「大丈夫、安心してね」

彼女は少し緊張した面持ちで、消毒液などを取り出し、俺の傷口にあててきた。

「 いてっ。」

俺がそう言つと、おきまりの「男の子でしょ？ 我慢しなさい」と共に、優しく微笑んでくれたのだ。

その微笑に、俺は不意にも恋に落ちた。

これが、俺と由梨の出逢い。

俺の心動かす出来事だった。

その日からといふものの、俺は金色だった髪の毛を校則通りの黒髪に戻し、優等生となつた。

そして、彼女を見つけると声を掛けるといつ、恋真最中の俺だったのだ。

名前を聞いたのは、初めて会つてから1ヶ月も後だったつけ。

由梨は毎日話しかけてくる俺に嫌な顔をひとつせず、優しく接してくれた。

周りの評判が落ちようが関係なく、一緒に時間をすごしてくれたのだ。

中学校2年生になり、彼女を初のデートに誘つた。

いいよ。と返事がきた時の俺の喜びよりは、周りから馬鹿呼ばわりされるほどだったのだ。

そして、初デートにて、人生初の告白。

由梨とはじめてあつた時から好きだったことを述べると、「私もあの時好きになつたよ」と笑つて答えてくれたのだ。

心の高鳴りは、今までの人生にないほどに高まって、『もう死んでもいい!』って言う奴の気持ちが初めて分かつた気がした。

俺の由梨への愛の大きさは、学校でも『バカツブル』と有名になるほどだった。

毎日、由梨にヒヨコヒヨコついているペットみたい。と、由梨の友達に言われたもんだ。

「由梨大好き～！」と俺が言えば、彼女も「大地大好きだよ～」とギュッ抱きしめてくれる。

そんなバカツップルの毎日が、俺にとつては幸せだった。

愛を知らなかつた俺には、初めて感じた愛だつたのだ。

なのに…どうして…。

あんなに大事なことを…俺に言わなかつたんだ。

あれは…12月31日の真夜中。

由梨と一緒に初詣に行くために準備をしていると、俺の携帯に着信が入つた。

その着信音は、彼女から電話がかかってきたときの音楽。

俺は携帯を取り、電話に出た。

「由梨どうした〜！ 少しひらい遅れたつて構わないぞ？」

俺は笑いながら言う。

しかし、いつもの楽しそうな返事は返つてこなかつた。

むしろ、俺の耳には由梨の泣き声が耳に届いた。

初めて聞いた、彼女の泣き声。

俺は、その時背中に何か冷たいものを感じた。

「ど、どひした… んだよ」

言葉に詰まりながら俺が聞くと、少し時間が経つた後、彼女は工へ
へと笑つてやつと喋りだした。

「大地ごめんね～！ 今日さあ、いけそうにな〜…」

その声は、自分の感情を押し殺しているような声だった。

「由梨… 何かあつたのか？」

「大地い… 私のこと、忘れてね」

由梨は今まで溜まっていた感情が、あふれ出すかのよつ泣き出
した。

「お、おい… どひしたんだよ。」

「だ… だいちい… ごめんね… わ、私の事忘れてね…。大地い… 大好
きだよ」

その後携帯には、プープーと言つ音が鳴り響いていた。

忘れてつて……？

「どうしたんだよ……由梨！」

俺はたまらず家から飛び出して、由梨の家へと向かつた。

その間、何度も由梨の携帯に電話をかけているが、電源が入っていないみたいだ。

約5分で着く彼女の家には、人影が見当たらない。

庭に侵入し、家の中を覗ぐが誰も居ないみたいだ。

由梨の家の外を探索していると、後ろから声をかけられた。

「『まつちゃん、ここ』の家の人と知り合いなのかい？」

黒いスーツで身をまとっているヤクザ風の男の人があなぼざ。

「は、はい」

そう答えると、彼等はフッと笑つて、由梨の家の人たちの事を話し始めたのだ。

「こここの家の人にはね、うちに1000万の借金があって、返せなく
なつて夜逃げしたんだよ」

よ、夜逃げ？

1000万？

状況を把握できていない顔を見たのか、彼等は言葉を続けた。

「だから、ほっちゃん。こここの家の人はもう戻つてこないんだ」

ハハハと笑いながら、彼等は去つていつてしまつた。

…そんな馬鹿な。

もう、戻つてこない…だと？

由梨が？

俺の下へ？

戻つてこない？

俺の抑えきれない感情は、由梨が俺を置いていったといふ憎しみ、怒りへと変わつてしまつた。

冬休み明けの始業式にはやはり…由梨の姿は無かつた。

#20 由梨と大地（後書き）

とうとう、大地の元カノ登場です。

(・・。) (- -。) (・・。) (- -。) うんうん

もつと早い段階で出したかつたんですが…。

まあ、この段階で来ました。

けど、この話は俺の文章能力の無さを表す回になってしましました。
よろしければ、もつとこうしたほうがいい。などの意見を募集しています。

net_touki_net@yahoo.co.jp

のメールか、評価等にお願いします。

「だ……いち？」

その声で、俺は過去の記憶の瞑想から、現在へと引き戻された。
どうやら足元に倒れる、雲が起きたようだ。

「雲……起きた？」

雲は、畠を「シゴシしながら」「寝つけやつたのか」と呟く。

「雲、云、ごめんな……」

俺のせいで、雲にあんな危ない畠をあわせてしまった。

俺なんか……雲の傍に居る権利なんか無いんじゃないのか？

雲と関わってはいけなかつたんぢゃないのか？

俺は……人を……好きになつてはいけなかつたのではないだろうか。

下を向いて落ち込んでいると、足に衝撃な痛みが走った。

「二つでえー。」

「あ、これで許してあげるー！」

そして、彼女はまた顔を赤らます。

さうして、雪が俺の脚に自分の手を振りつけたようだ。

「…うん」

俺は素直にうなずき、そのまま立ち上がった。

そのまま立しきへゆく。

「あ、歩けないのか…。」と下を向いて呟いた。

「あ～、家に帰るかひ迷つていけど。

分かりにくアピールの仕方だな。

「送つてこくよ。おひと待つてて、着替えるか？」

そう言つて、俺は自分の服に手を伸ばす。

さすがにボロボロの服で行くわけにもいかない。

時間を見ると、もう8時を回つていた。

服を手に取りながら、俺は少しの間のほうを見て少しそまつてみる。

雪は俺と田があつと、『何?』みたいな顔をしている。

気付いてないのか…。

俺はおかしくなつて、雪の顔を見てフツと笑つてしまつた。

「何よ?」

雪は本当に分かっていないみたいだ。

俺が、服を持つて着替えると、この空間に居る事の意味が。

俺はおもむりに服を脱ぎだした。

すると、彼女はハツとして後ろを向いた。

やつと気が付いたか。

俺は服を着替え終え、零に「行くぞー」と言つて、彼女はしつしつを振り向いて俺についてきた。

明は、気を利かせたのか、俺たちと一緒に家を出て、一人で帰つていつてしまった。

10分程度の道のりで着く零の家。

その間、無言のまま隣同士歩く俺たち。

沈黙をやぶったのは俺のほうだった。

「俺…」

「このまま、零の傍に居ていいいのかな?」

そう聞いijとして、やめてしまった。

案の定、零は俺の中途半端な言葉に、問い合わせてくれる。

「何?」

「いや、なんでもない。」

「気になるから、聞こなさー

「なんでもないって。」

「なんでもないなら、言えるでしょう？」

「言いたくなー

「怒るか?..」

「…」

「何が

「今日」

「それは、やつを許したでしょ。こいつまで引き立つてこるのは。馬鹿じゃないの?」

「うつ、好きな人に馬鹿じゃないの? って、言わると傷つくなのですが。

「…俺も、霧の傍に居ていいくのかなって」

「はあ? 何それ」

「また、今日みたいなことがあるかもしない

俺は、零に相応しくないから。

零は言葉を返せないまま黙つたままだった。

…と言づか、俺つてあつけりかんとゆうことをしてしまつたの
ではないのか…

『傍に歸る』とか…。

やつと思ひと、顔が赤くなつてきたのが分かる。

外が暗くて本当にみかつた。

零の家の前まで行くと、零は家へと入つてこいつとした。

…が、そのまま俺の方へと振り向き、いひついたのだ。

「あ、あ、明日…いつもより三本早い電車に乗つてこくからね…」

俯きながら言つた、本当に可愛かったのだ。

その言葉は、傍に歸ることと言つ意味なのだひづか。

それとも、気まぐれで言つただけなのか。

俺は「わかった」と呟いて、「おやすみ」と零に手を振った。

「なんだよー 気になるだろ」

俺の足は来た道へと進みだした。

10歩ぐらい歩いていたところだらうか、後ろからガチャッとこいつ音が聞こえて、何かがこっちへと走ってきた。

雲だ。

「どうした？ 忘れ物か？」

俺は、雲を見ながらそういうと、雲は首をブンブンと振った。

「う、違うの……その……えっとね

雲は何かを言おうとして、詰まっている様子。

そのときも、俺の顔を一度も見ようとしない。

俺は、雲が何か言つのをじっと待つてると、「なんでもない！」
と言つて、彼女の家へと戻つていこうとした。

俺は雲の腕をつかみ、戻るのをとめた。

そうすると、雲は下を向きながら言葉を発した。

「だ、だ、大地が…ま、ま、ま、守ってくれる…んでしょう？」

その雲がとても愛しくて、離したくなくて…ギュッと、抱きしめてしまった。

「だ、だい…ち」

その言葉で我に戻った俺は、雲をパツと離した。

「い」めん…

俺は謝り、彼女は下を向いたままだった。

『バイバイ』も言わずに去つて行った彼女を、俺は追いかけることができなかつた。

#21 大地と雲（後書き）

大地と雲の…（。・、・）ンーw

雲は、大地の名前を呼ぶのは恥ずかしい…という表現の仕方w

ちょっとばかし、雲はシンデレ希望です（、・・、）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こいつしたほうがいいと言つアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

net_touki.net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。

どうぞ宜しくお願ひします。

#22 テスト勉強1

帰り道は、雰の温もりを感じながら歩いた。

しかし、雰にあんな事をしてしまったから、明日は何を言われるか…いや、もう話してくれないかも知れない。

そんなの嫌だ。

後悔なんでしたくないけど…今回ばかりはやつりました。

家に着いて、ベッドにもぐつこみびつこみびつとかと考へてみると、そのまま寝てしまっていた。

次の日の朝、何故か田覚めがよく、田覚まし時計をかけていないのに、いつもより三本早い電車に乗るには、十分な時間だった。

学校の支度をして、今日は雰に無視される覚悟で学校へと向かった。

三本早い電車は、同じ学校の人が全くと言つていいほどのなく、神埼高校の制服を着た三つ編みモードの雰を見つけるのは容易かつた。

「あ、おはよう」

俺が声をかけると、やはつ無視された。

「昨日は……その……抱きしめたりして」めん

俺は素直に謝ると、雪はいつかを向いて

「あんなの私が気にかかるほどもなー」

と言った。

『あんなの』と言われると、少しショックだったが、話をしてくれたのによじとじよつ。

「やつこえぱ、今日はなんでこんなに早いの?..」

家の学校は都合とはお世辞でもいえない場所にあるために、電車一本といつと一時間以上時間が違つてくるのだ。

「知らないの? 今日から期末テストなのよ」

「え、まじか

テストと詰つ悪魔が、今日からだつたとは。

自(モ)謹慎が解けて、初日にテストとは…やつてくれるな、あの先生。

「私は、勉強しなきゃいけないからね。そういえば、大地はテストどうなのよ？」

そういえば、この前の中間テストのときに、4科目赤点だから期末のテスト頑張らないと留年…とか言われたな。

そのことを零に話すと『なにこいつ、馬鹿じゃないの？』みたいな顔をしていた。

「…はあ、一緒に勉強しようつか」

そんな顔をした零から飛び出した言葉は、世界がひっくり返つても出てこないような言葉だった。

俺はその言葉に素直につなづき、嬉しくて押さえ切れないニヤニヤが表へと現れてしまった。

学校に着くと、雲は誰もいないのを確認して、トイレへと入つてしまつた。

俺はトイレの横で彼女を待つ、一分ほどで出てきた雲を見て俺は驚いた。

いや、ありえないだろ。と心中で呟く。『

「…何よ」

ボソッと呟く雲は、俺の驚きの表情にイライラしているみたいだ。

彼女の姿は、三つ編みモードではなく、美人モードへと変身していたのだ。

驚かないほうが、どうかしてる。

「し、仕方ないじゃない！ 大地は有名人なんだから、一緒に居るところを見られると、私が友達に追及されるんだからね！ この姿なら、誰にも『地上雲』って分からぬいし」

それはそうだけど、それはいくらなんでも大胆すぎじゃないのか？
しかし…制服を着ている美人バージョンの雲を見るのは、初めて会つたとき以来だよな。

「や、そりだよなあ」

一応、零の言葉を肯定しておぐ。

「早く図書室行くわよ。あまり時間がないんだから」

図書室に着くと、零の個人レッスンが始まった。

分かりやすく、丁寧に教えてくれる零のおかげで、苦手だった数学もポンポン解けていく。

今日のテストは、話に聞くところの数学と、世界史らしい。

『世界史は渡されたプリントを頭に詰め込むだけでいいから』

と言われ、世界史は後回しにされた。

「や、それにしても… 大地呑み込みが早いわね」

30分も経たないうちご、数学の範囲が終わってしまったたらしい。

「零のおかげだろ」

零と一緒に居ると、何故かやる気が出るんだよな。

もしかすると同じ教室だったら、俺は先生に優等生扱いされるかも
しない。

「それでも卑いわよ……」

そういわれてみれば、絶対無理と言われていた、この高校にも一ヶ月勉強しただけで入れたつ。

この高校にした理由も、結構近いし、明が行くから。で決めたんだよな。

「次は世界史か？」

俺が質問すると、零は戸惑いながらも、「う、うん」と返事をして、世界史のプリントを俺に渡した。

プリントも分かりやすく書いてあり、15分で全部覚えきった。

その後、彼女と交互で問題を出してたりして、時間をすこじした。

その間、図書室の男子と、可愛い女の子がいるところを聞きつけ、駆けつけた男子たちの視線が零に向かっていること、言わなくても分かってもらえただろう。

勉強も終わり、零は図書室を出て、零田^{ヒロタ}で来た男子たちを俺は睨んだ後、図書室を出て零の後を追つた。

「どこか、人が居ない場所ないかな?」と聞かれ、「特別棟の最上階になら、カッフルしかないから、女の子一人だと気にもされないよ」と答えた。

俺が零と一緒に行くのはさすがにまずいと言つことで、彼女一人行かせ俺は教室へと足を運んだ。

零田^{ヒロタ}での男子が居ることは、どうせ『付いてない』であろう零にはあえて言わなかつた。

多分俺が睨みつけたことにより、零の後をつけようとしたことはしないだろうから。

まあ、そんなことしゃがつたら、ボコボコにして蝶れなくしてやるけどな。

#22 テスト勉強1（後書き）

勉強タイムでした。

正直、俺は学習能力が無いために

覚えたことをすぐに忘れます（つゝ。）シンシン

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださいか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#23 テスト勉強2

『別にいいよ』

俺は、今日のテスト終了後にあるメールを零送った。

さきほどの、『別にいいよ』は、その俺のメールに対する返信メールである。

朝、零と別れた後、教室に入ると、数名の男子の視線を感じた。

その視線を無視し、俺の席である窓際の一番後ろにつくと、隣の席の明が俺の前までやつてきた。

「なんで、しず…噂のあの子と、一緒に図書室なんかで勉強しているんだよー?」

わざと教室全体に聞こえるように、明は言つてきたのだ。

「ひよ、お前、少し静かに喋れー。」

明は俺にだけに見えるようにオヤジと笑つてきた。

この状況をどうやら明は楽しんでいたらしい。

今度は、俺にしか聞こえないように話し始めた。

「それで、なんで君たちがあの格好で？」

「……えっと、俺って有名じやん？」

俺の質問で明は頭の上にクエションマークを浮かべている。

「まあ、そりゃな。有名だる」

「俺の友達に、俺と一緒にいる理由を聞かれて、君は説明するのが面倒らしい」

なるほどー」と言わんばかりで、手をポンと叩いた。

そして、チャイムが鳴った。

昼前にはテストが終わり、「案外簡単だったな……」と呟くと、俺の隣に座る明が「はあー?」と反論してきた。

「ひつやー、明は出来が悪かつたらしー。

わっかのお返しも含めて、明の肩に手を置き、ドンマイと笑みを見せてやった。

そして、俺が次にとる行動は、零にメールを送ることである。

それはテストが始まる前から決めていた事。

力チカチと携帯を打つていて、横から明の顔がスッと伸びてきて、俺の画面を覗いてきた。

「へえー、大地君も可愛い所あるんですね」

メールの内容を見てやつたと言わんばかりに、ニヤリと笑つてくる。

「み、見たな」

俺は明から携帯を遠ざけた。

「見てなこよー

「ヒヒヒと笑う明の様子からして、90%メールの内容を見たに違い

ない。

そして、残りの10%を増やし、俺が100%の確信を得たのは、明のこの言葉からだつた。

「俺も、今日大地の家に行こうかな

「うふ、お前！ やっぱり見たんじゃないか！」

俺はそうひきつて、明の腹を殴る。

痛そうにしながら、「嘘だ決まってんだ！」と呟いた。

俺はそのまま家へと足を運んだ。

雲は家に帰つて「飯を食べてから、俺の家に来るといつ。

少し、部屋を片付けて、『飯を食べて、雲がくるのを待つ。

何を期待しているのか、布団のしわをじっかりと伸ばして、綺麗にしたのは秘密だ。

「…」心、ハンドームは持つべくか

俺の部屋のベッドの脇にあつてある、正を出しお中へと隠しておいた。

それから間もなくの事、家のインターフォンが鳴り、「はーい」と俺は声をあげて、玄関のドアを開けた。

「よし」

やつ聞いたのは俺じゃない。

無言のまま、俺はドアを閉めた。

「閉めんなよ。」

「…」はい、帰れ

「俺だつて、姉ちゃんを見たいんだよ。」

やつこたのまではなく、明だつた。

「帰れ、殺されたくなれば、今すぐこー。」

俺は怒鳴りながら、ドアの向こう側に居るであつて、明に怒鳴った。

諦めて「分かったよ。」と呟いて帰つていった。

明悪いな。今日だけは、俺に夢を見させてくれ！

そんなことを考えていると、再び家のインターフォンが鳴つた。

玄関のドアを開けると、そこには美人モードの雲が立つっていた。

「勉強道具は持ち帰つてきた？」

雲の言葉に俺は首を横に振る。

「俺は学校に、一切勉強道具を持つていっていない」

雲は一瞬驚いた顔をして、フツと鼻で笑い「大地らしい」と呟いて、俺の家の敷地を跨いだ。

そう、俺が零に送ったメールとは

『今日、俺の家で勉強を教えてくれないか?』と言ひ、優等生振りを見せるメールだったのだ。

#23 テスト勉強2（後書き）

… 分かりにくい文章の仕方だったかもしません(つゝ。)ス
ンスン

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言つアドバイスをくぐさ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailboxform/>

で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#24 テスト勉強3

零が家に来て、すぐに勉強が始まった。

とにかく、明日の英語と、化学を教えてもらうこととした。

俺の驚異的な覚えの速さと、わかりやすい零の教え方がマッチし、2時間後にはすべてが終わっていた。

「終わったあ！」

俺はグツと背筋を伸ばし、ベッドへと倒れこんだ。

「大地つて、本当は頭いいんだね…」

俺のノートを見ながら、零は呟く。

零から出された問題は、90%以上は正解だったのだ。

「まあ、天才つてやつですかね」

ニシシと笑つてやると、呆れた顔をしていた。

「それじゃ、あるじと連へなつたし、私帰るね

そうこうで、かばんを持つて帰ろうとする雲の腕を俺はつかんだ。

「…何?」

「その…もう少し、喋っていいかな?」

「…別にいいナビ」

雲はそう言つて、かばんを置き、さつき座っていた場所へ場所へ戻り腰をおろした。

そして、少しの間沈黙が続く。

喋りついたものの、何を話すつか…。

一緒にいたいだけで、何も考えていなかつた。

自分の計画性の無さに、半ば呆れてくる俺。

「や、そういえば、今日図書館で、注目の的だったんだぜ?」

…何言つてこるんだよ、俺。

「何がだつたの？」

雲は本当に何も気付かなかつたらしい。

「これで、また告白の日々が続くんじゃないの？」

俺はニヤリと笑つて、雲にひびと馬鹿にされた。

「大地つて、そういうとこりう馬鹿だよね。違う姿をしていたんだから、告白も何も無いに決まつてゐじゃない。分かっても学年と性別ぐらごよ」

性別は、確実にバレているのですが。

「まあ、これで、辺闊にその姿にはなれなくなつたな」

「だね」

「もし、バレたらどうする？」

俺の質問に、彼女は少し悩んだ様子を見せて、こう答えた。

「やのときは、諦めるしかないわね。もう一度ストーカーが出てきたり、即警察に通報するわ。」

もし、靈に分からなこいつにござたら、どうするんだ。

誰が守つてやれるんだ。

俺しか……いないだろ!。

「靈……」

俺はベッドの上であつ伏せになつながら、靈の名前を呼んだ。

「向よ

「やのときは……俺が守つてやるよ

「わい、恥ずかしい」と言ってしまった。

「な、な、何をこきなつ……聞こ出すのよ

「いや、やの……なんでもない」

『気まずい沈黙が流れる。

「や、やっぱり私帰るね」

そうついつて、再びかばんを持って立ち上がった。

嫌だ。

まだ、一緒に居たい。

帰らないで。

雲が愛しい。

勝手に俺の中から声が漏れた。

「お願い…帰らないで」

雲は俺の言葉で振り向き、立ち止まっていた。

#24 テスト勉強3（後書き）

今日更新する2つは結構短いですね。
…ハイ。

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと書くアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送ってください

<http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailboxform/>

で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

「お願い…帰らないで」

「…え？」

雲は驚いた表情を見せている。

「び、びひしたのよ、急に」

戸惑いの表情に変わった。

「その…もう少し、勉強を教えてもらおうかと」

「大地に教えることがないんですけど」

「まあ、そうだけど…」

…苦し紛れのいい訳だつたな。

「何かあつたの？」

俺の傍に寄ってきて、顔をうかがってく。

「何もなーよ

ただ、一緒に居たいだけなんだ。

靈と同じ空間に居たいんだ。

顔を上げると、俺の田の前には、世界一可愛くて、愛しき靈の顔があつた。

くちあじとした田、眉毛は細くて、輪郭もすっせつとして、髪の毛は少し肩より下にあります。下にあります。

触つたら離れなさうな肌に、少しおそく柔らかそうな靈。

…柔らかそうな靈。

そこには俺の田線は釘付けになり、少しずつ近づいていった。

唇に雪の柔らかい唇の感触を感じた瞬間に、自分がしてしまった過ちに気が付いた。

「うーんめんー。」

俺は雪から離れ、ベッドから降りた。

「本当にじめん」

雪は、状況を把握できていないのか、その場で固まっている。

「し、雪？」

「へ？」

どうから声が出たのか分からぬい声で、返事をしてきた。

「やつぱつ、家まで…送つてこへよ」

俺はそう呟つて、雫のかばんを手に取った。

中には教材が入っているのか、少し重さを感じる。

「う、うん」

帰り道は、一人とも何も話さなかつた。

氣まずい雰囲気になつてしまつた。

それもこれも、俺のせいなのだ。

キスをしてしまつた事によつて、俺の氣持ちはバレてしまつただろ
う。

してしまつたことは、後悔してももう遅い。

遅い……。

「雫……」

俺が名前を呼びかけても、雫は俯きながら歩くだけ。

「やつのは……」

何でもないわけが無い。

何も言えないまま、俺の発言は終わった。

もしかすると、このまま雲は何も話してくれないかも知れない。
もしかすると、この前みたいに、何も無かつたかのように接してくれるかも知れない。

もしかすると、雲に嫌われてしまったのかも知れない。

嫌だよ……雲ともう話せなくなるなんて。

嫌われてしまふなんて。

大好きだから、雲のことが。

愛しているから、雲のことを。

これ以上、大好きな人が、いなくなるのは嫌なんだ。

そう思つと、過去の過ちを学習できないまま、俺は雲の身体を抱き
しめていた。

「キスして」めん…雲。けど俺…雲のことが…」

彼女は抵抗をしようとしている。

誰かが通るかも知れない通路の真ん中で、俺に抱きしめられながら、ただ黙つて聞いていた。

彼女の表情は伺えないが。

俺は大きく息を吸い、覚悟を決めた。

「俺… 雲のことが、好きなんだ」

そう、好きなんだ。

会つたときからずっと。

この数日間で、雲を心から好きになってしまった。

俺に無くてはならない存在へと変わってしまった。

「… 大好きなんだ」

#25 印白（後書き）

やつとの思いで… 大地乙です。

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと書つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で書くにいく場合は

net_touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださいるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージページもできます。
宜しくお願ひします。

#26 現在、その後

「だから、俺を嫌わないでくれ……」

零を抱きしめ、涙を流しながら俺は呟く。

やはり、その腕をほどいてはせず、ただ困惑してこちらを見ついた。

「わ、私……」

彼女は俺の腕の中で口を開いた。

「だ、だ、大地の事は嫌いじゃ……ないよ

「本当かー?」

俺の腕は、零の背中から肩へと移り、零を少しだけ離した。

「で、でも……」

彼女は俺の顔を見ないようこ、手を向いたまま話を続ける。

「す、好きとか、そういうのは…ない」

俺の顔を見ない零を俺はもう一度抱きしめた。

『好きではない』と言われたショックより、『嫌いじゃない』と言われた嬉しさのほうが大きかつたから。

俺の心は、全くと言つていいほどに、その時傷はついていなかつた。

「それでもいい…嫌つていらないのなら、それでいい…」

本当に、それでいいんだ。

よかつた。

嫌われてなくて。

大好きな零に、嫌われなくて本当によかつた。

涙もいつの間にか止まつており、俺は少しづつ零を離した。

俺は零の手をとつて、再び零の家へと歩く。

2分もしないうち、「元の家が見えてきた。

その気まずい2分の間、俺たちは一言も喋れなかつた。

… むづくべで、今日せよしなくていけない。

「明日… 今日と一緒に電車に乗るから」

雪はボソッと雪へと走って家へと行ってしまった。

俺の手から雪の温もりが消えると、電池がなくなつたかのように、俺はその場に立ち尽くしてしまつた。

『明日… 今日と一緒に電車に乗るから』と雪の言葉は、これからも傍に居てもいいという意味だらう。

そういう分かりにくい表現をするとこりが、雪らしくて愛しい。

そして、俺…

とつとつと雪へと走ってしまった。

雪… 言つてしまつた。

好きだと。

大好きだと。

… 人といつものは恐ろしい。

死んでもいえないと思つたその言葉を、あつさうと言つてしまつたの

だから。

愛する人を目の前にすると、頭より、心に従ってしまう。

「…帰るか」

俺は一人残された道で咳き、とりあえず家に向かうことになった。

その道のりで俺は、やつをあつたことを思い出せりと、頭の中は必死に働きかけている。

しかし、その半分もの事が、緊張と興奮で忘れてしまっているようだ。

「俺…雲が好きなんだよな」

その感情は由梨以来。

少し、暑さを感じる7月の出来事だった。

家に着くと、ベッドに直行。

さつきまで、ここに雲が居たんだなと思うと、なんだか鼻が敏感になつた。

雲の臭いは俺を癒す。

今日はなんだか疲れた。

雲の癒しの臭いのおかげか、慣れない勉強をした疲れか、俺はそのまま深い眠りについた。

その後、起きたのはAM5時。

もう一度寝たら起きられないのではと思い、俺は教科書を片手に取り勉強を始めた。

それは人生でそう何度もない事である。

俺が自主的に勉強するなんて、明が聞いたら笑うんだろうな。

そう思ふと、心のどこかがくすぐったくなつて、一人部屋で笑つてしまつた。

「あはは…馬つ鹿みてえ」

せつまつて、俺はベッドに横になり天井を向いた。

神様……。

少しでも早く時間が過ぎますように。

雲と一秒でも長く一緒に居りたまおう。

雲が俺の事を愛してくれますように。

今になって、『好きではない』と言われたショックが心へとせまって
きた。

#26 幸田、その後は（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、いつしたほうがいいと書つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださるか、

http://plaza.rakuten.co.jp/m1q
84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージページもできます。
宜しくお願ひします。

#27 告白、その後の

「田覚し時計君、今日もいい朝だね」

今日も一日始まった。

昨日と同じよつて、電車に乗るには十分の時間。

と言つか、ただ単に寝ていないのだ。

あんなことがあり、そんな簡単に寝れるほど、俺の心はタフではない。

むじるガラスのハートなのだ。

「…どうしよう、田覚まし時計君

俺は、頭がおかしくなったのだろうか。

一人が寂しくなり、昨日の夜から田覚まし時計と会話をしている。

会話と言つより、一方的に話しているだけだが。

「雪元……どんな顔をすればいいだら?」

女に振られたのは一回田だ。

かといって、男に振られたことも無い。むしろ雪元なんでしたくない。俺はそつち系の趣味は無いから。

前の一回…由梨の場合、顔を合わせなくて済んだから、いつも迷いには至らなかつた。

まあ…一方的にいなくなつたんだけど。

しかし、今回は訳が違つ。

昨日、俺が告白した相手と一緒に登校するのだ。

…振られた相手と。

雪はそれでもいいから、俺に元の電車に乗るか教えたのだろうナビ。

俺は違う。

顔を合わせられない。

恥ずかしすぎて…。

色々考えてみると、田覚まし時計君がいきなり喋りだした。

ジコリコリコリと。

この時は、家を出る時間の合図。

「それじゃあ行ってくるよ

俺は用済まし時計盤をベッドの上へと放り投げて、家を飛び出した。

「よし、あれこれ考えてもなにも進まない。とりあえずは、いつもと一緒にようすればいいんだ。…ポーカーフェイスだ！ 俺！」

パンパンと顔を一度ほど叩いて、電車へと乗り込んだ。

周りの視線が少し痛いのは気にしない。

次の駅へと着くと、俺は零の姿を探した。

ポーカーフェイス、ポーカーフェイス。

ぶつぶつ心の中で呟きながら、零の姿を見つけようと、俺の目はあちこちに向いてくる。

『ドアが閉まります』

アナウンスが流れて、ドアは閉まってしまった。

…あれ。

雲が…いない。

昨日のあの言葉は、デマだったのか！？

そう思つと、悲しみが押し上げてきて、今にも涙腺で倒れそうになつた。

その瞬間、俺のふとももにブルルと何かが震える感触が。

…雲からメールだ。

『寝坊した。ごめん』

このパターンは会えないパターンか！？

…会えないのは嫌です。

『会えないのかよ！』

携帯にそう打ち込むと、俺の手は止まった。

なんか、厚かましいな。

『寝坊か、分かつた

：冷たすぎじゃないか？俺って。

『駅で待ってるから

いや、あいつのことだらう。俺が駅で待っていても、無視して進んでいくに違いない。

メールの文章を悩んでると、いつの間にか学校の最寄り駅にしてしまった。

『おつ。今日のテスト頑張りな』と打ち、メールを送った。

「会えないのか…

そう呟き、学校へと足を向かわせた。

少し、頭の壊れた大地を紹介です。w

前回の話と題名が少し似ています。

お間違えの無いよう(、 、 ; A

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつしたほうがいいと詰つアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で書いていく場合は

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール

を送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>

で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#28 勝負しないか？

「珍しいよな」

次の日の朝、俺は昨日と同じ時間の電車に乗り、雲を見つけた。

今日は、寝坊をしなかつたらしい。

「何が？」

「寝坊」

俺がグサツと言つてやると、雲の顔は少し険しくなった。

「い、色々…あつたのよ」

「やうなのか」

雲にも寝坊するまでの悩みがあるんだな。

そして、横田でちりつと俺を見て、ため息をついた。

「ため息をつくと、幸せが逃げてしまいますよ」

「馬鹿、死ね」

「な、なんだと…」

俺は人が居るにもかかわらず、大きな声をあげてしまった。

相変わらず、零は知らん振り。

それにして、死ねとこいつのはあまりにもひど過ぎじゃないのか…?

昨日の夜、『明日はちゃんと乗るから』とこいつメールが届いた。

顔を合わせるのが恥ずかしいと思っていた俺は、次の日、つまり今
だが、案外会つてみるとなんてことはない。

変わったことがあるとすれば、今まで見たいに零をずっと直視する
ことができなくなつたことだらうか。

唇にじどうも田が行つてしまつて、一昨日のこと思い出しちまつ
かう。

今日のテストの勉強なんだが、雲にあんな事をしてしまったから、俺の部屋で…といつか、二

人きりになり、勉強を教えてもらひのは申し訳なくて、昨日は家で自主的に勉強した。

雲からは何も連絡が無かつたので、それでいいといふことだらう。

…多分俺がそう思いたいだけで、連絡が無かつたことについては、さほど深い意図は無いと思つ。

そして、ここでも発見がひとつあったのだ。

案外、一人で勉強しても頭に入つていく。

雲と一緒にしていたほうが、やる気、勉強の進み具合は全くもつて異次元だが、2時間程度で勉強が終わってしまった。

もしかすると、俺は本当に頭がいいのかも知れない。

「なあ、雲」

俺のほうを全く見ようとしない雲に話しかけた。

「何？」

「俺と、勝負しないか？」

「は？」

「テストだよ、テスト」

一瞬二三歩を向いた。

俺はこりこりと笑う。

雲はぱっとすぐ顔を戻し、ふたたび知らん振りモードに入る。

「俺が雲に合計点数勝つたら、ひとつ言つことを聞いてよ」

「いいけど」

案外すんなりと、俺の勝負に乗ってくれた。

学校にまともに通つていなかつた俺が勝つなんて、無理に決まっていふと思つてゐるのだろうか。

「こじだけの話、一昨日と、昨日のテストは手こじたえがあつたのだ。

もしかすると、100点かもしれない。

「じゃあ、私が勝つたら何をしてくれるの?」

「え?」

「そういうもんでしょう。勝負といつものね」

「そ、そつやそうだけ?」

「こいつ、確信犯か。

負けない自信があつて、勝負もくそもあるか。

俺から持ちかけた話なんだけど。

「…こいよ

「私が勝つたら、大地は私の言つことを聞いてくれるんだよね?」

俺が、勝てばいい話。

雲は油断しているのだから。

これから、四教科頑張ればいいのだ。

学校に着くと、まず今日持ってきた教科書を開いて、勉強を始めた。

俺のその姿を見ると、明が笑い出したのはいつまでも無い。

そして、その日のテストが始まった。

明に笑われたつていい。

馬鹿にされたつていい。

俺が柄にも無く勉強しているのは、勝負のためだけじゃない。

心のどこかで思っているのだらう。

少しでもいい、雲に相応しい男になれるようになると。少しでも、雲の世界に入っていくようになると…。

#28 勝負しないか？（後書き）

すんません。

本日からもしかすると一日一話更新の可能性が…。

(、・；A w

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつしたまつがいいと書つアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださいね

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#29 勝負の行方はナポリタン

テスト終了後、土口をはさんで結果が出た。

俺たちの学校は、今の時代、遅れているであろうが、テストの点数の100位までが掲示されるようになつており、今回は俺の名前も掲示されていた。

今までサボっていたから、こんな所に名前を載せたことは一度も無かつた。

…けど、今回の俺の名前はと言つと、

「だ、大地が…学年2位！？ どんな裏技使ったんだよ！ バグか？ チートか？ カンニングか？ それともなんだ、ドラ江門の暗記パンを使ったのか！？」

そう、2位だったのである。

明の驚きようは異常だったが、先生たちにも、不正行為があつたのではないかと疑われたほどだ。

「そこまで、驚くことじやないだらつへ、

「驚くに決まつてゐるだろー」

明は驚きを隠せずに、掲示板にへばりついていた。

そして、俺のひとつ上にある名前、つまり学年1位の名前はもうるんこの人。

石上雲。

点数は、俺が8教科779点で、雲が781点と並んで、たった2点差で敗北を味わうことになった。

あの一問さえなれば…！

…俺は世界史のテストの時間に、とてつもなくお腹が減っていたのだろう。

『ナポレオン』と書かなくてはいけない場所に『ナポリタン』と書いたのだ。

とてつもなくダサすぎるぜ…。

そんな俺が落ち込んでいるときに携帯が鳴った。

「あ、雲からだ」

ぼそっと呟くと、掲示板に張り付いていた明の顔が、ニコオと明るくなり、俺の下へと歩み寄ってきた。

嫌な予感がする。

俺は直感で感じ、その場から走って逃げ去った。

校舎裏にこもり、周りを見渡すと誰も居ない。どうやら、明を巻けたようだ。

そして、もう一度携帯を開き、メールを開いた。

『2位おめでとう。しかし結果は私の勝ちね。もう少し余裕で勝てると思ったのに』

嫌味ですか。

このメールはわざわざ嫌味を言つたために送られてきたのですか。

『1位おめでとう。…勝負は負けた。約束どおりの嘘の言ひ方でも聞いてやる』

そう打つてメールを送り返すと、タイミングを見計らつかのように明に見つかってしまった。

そのまま教室へと連行されていき、『噂の人々』の話で明とは盛り上がった。

いや、明だけ盛り上がった。にしておこう。

俺は、決して盛り上がりはない。盛り下がつてもいい。『めん、意味が分からないな。

雪の願い事は何なんだろうか。

『めんくだりなー』とだらりと呟く。

雪は少しうきがあるから『土下座しなそこ』とか『私の足の指をなめなさいとか』

…絶対無いよな。

もし俺が勝つていたら『笑つて』とか『キスして』とか『一発ヤラセト』とか『結婚しよう』とか色々決めていたの…!!

なんで…ナポリタンって書いてしまったんだ。

あ、願い事がどんぐれートアップしているとは気がしないで。

そして、かなり不本意だが、先生に放課後職員室へと呼ばれた。

今回は説教なんかじゃなく、お褒めの言葉をもらー。

ダルそつと歩きながら、俺は職員室へと向かっていく。

お褒めの言葉なんか要らなーの…。

職員室の前までこぎ、ドアに手をのばすとしたら、勝手にドアが開いてしまった。

「のパターンは、前に一度あった気が…

同じ映像がもう一度繰り返されたかのよつて、雫は俺の前に立つていた。

「し、雫」

すると、以前同様『何?』みたいな目をしてくる。

「お褒めの言葉をもらつてきたのか?」

雫は少し黙つて、口くつと頷いた。その姿が小動物みたいに可愛くて…。

つて、ヤバイヤバイ。

学校と言つのに、まだ抱きしめそつになつた。

俺は雫の横を通りていぐと後ろで、前回俺の悪口を言つた先生と雫がなにやら話し始めた。

この展開も、前と同じ。

俺の耳の神経がするどくなり、なにやら聞こえてきた。じつも先生が「」の前の事を謝つてゐるらしい。

『池上大地の事を何も知らないで、あんなことを言つてしまつてすまない』と。

雪は、『なんで私に謝るのですか?』と不思議そうな顔をしていた。

先生は『前、怒つていたじゃないか! 彼氏のこと……その』

と言葉が詰まつてゐる模様。

『いや、先生は俺と雪が付き合つてると勘違つてゐるらしい。』

俺はそれでもぜんぜんいいのだが……。

「な、何言つているんですか!? あんな馬鹿な池山君と付き合つてこるわけ無いじゃないですか!—」

……貴方はこの前、先生が俺の事を『あんな池山なんか』と言つた事を怒つてくれた人ではないのですか?

俺は落ち込みながら、お褒めの言葉をさわさわと為し、担任の前までとテクテク歩いていった。

「おめでとう。いついて気分を損ねてしまつたら悪いが、お前が

…その…頭がいいとは思つていなかつた。今までとは違つ全うな道を歩んでほしいと先生は思つてゐる。きっと池山の前には、大きな道がたくさん広がつてゐるはずだから」

先生、全ひつとは何でしょつか。

その質問を俺はあえて先生には聞わなかつた。

どうせ答えられないだろ。そう思つたから。

#29 勝負の行方はナポリタン（後書き）

はい。

言つておきます。

このテストのミスは、事実です！！

盗鬼がテストのとき、ナポレオンと書かなくてはいけない場所にナポリタンと書いて…職員室で話題になつたそうです。

‥（つゝ。）スンスン

この前は、メンデルをヘンデルって書いたしね。。。

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいとアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net_touki-net@yahoo.co.jp にメールを送つてください

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>

で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#30 一人のお見舞い

あれから数日後。

いまだに零は何も『願い事』を言つてこない。

しかも、今日はなんと…

「え、休み？」

電車の中で一人ボソッと呟いた。

その原因は、零が学校を風邪で休んだからだ。

『今日は学校休む。夏風邪に…』

メールが届いたときの俺の顔は多分すげいものだったのだろう。

とてつもなくショックだったからな。

そのまま久しぶりに一人で学校に行き、教室の中でひたすら考えて
いたのは、勉強の事なんかじゃなくて、零の見舞いに行くかどうか
だ。

いや、むしろ行くのは決定している。

と並つか、俺自身がただ単に隣の部屋に行ってみたいからだ。

何を買つていいか。

教室で唸つてゐるとい、明に「腹でも痛いのか?」と心配された。

「そんなんじゃねえよ

…あ、どうしよう。

放課後、結局俺はミカンを買つてこへりとした。

ミカンを手にすると、店の人の視線が痛いほど分かる。

『万引きなんかしねえよ

そう曰で訴えても、信じる様子は無かった。

その前に、俺のトレーパシーを受け取つてくれはしなかつただろ。

ミカンを置つた後、俺はそのまま隣の家の家へと足を向かわせた。

家の人気が居たらどうしよう。

何と言つて、家の中に入れてもらおうか。

まさか、「彼氏です」なんていえないからな。

実際、彼氏じゃないけど…。

色々頭の中で考えていると、俺の足は零の家の前へと到着していた。

「と、とりあえず… インターほん鳴らしてみるかな。」

右手がスッと伸びて、その途中で止まった。

なんでこんなに緊張しているんだ？

好きな人の家だからか？ いや、待て。由梨のときは… こんなことなかつたぞ。

片思いだからか？

訳わからんねえよ俺。

大きく深呼吸を吸い、インターほんへと指を向かわした。

勢いよく押すと、家の中でピンポーンと鳴っているのがわかる。

その後、ガチャガチャと家のドアが開く音。

そしてドアが開くと、美人モードの驚いた雫が立っていた。

「よつ」

俺はミカンを上に上げて、挨拶をする。

「何できたのよ」

「心配だつたからに決まつてゐるじやないか」

紳士っぽく言つ俺に、雫は引いたのだろうか、かなり顔が引きつつている。

しかし、目線は俺には向いていない。

…？

俺は頭の上にクエスチョンマークを浮かべ、雫の目線を追いつのままで俺の右斜め後ろを振り向いた。

そこには雫がバレたくないと言つていた、あのときの友達、朋子が立っていたのだ。

「し、雫…見舞いに来たんだけど…」

相當困惑している様子。

やばこな、やつらがいたか？

雪の方を向くと、こつもの表情に戻つておつ、「朋子、中に入つて」と手招きしていだ。

俺は！

俺はどうなるの…

…やっぱ迷惑だよな。

そつ思つて、帰ろつとしたとき雪の声が聞けた。

「大地、何しているの。早くおいで」

そつ呼ばれたときは、天にまで登つてもいい…と心の底から思つてしまつた。

「お、おひ

俺は、小走りで雪の家の中へと入つてこつた。

霧の中の様子は、至って普通といったところだらうが。

「へえ……」が霧の部屋か。

俺はやべへしながら、朋子と霧の後を追つた。

あまりにも感心してしまって、つこ声に出してしまった。
霧の部屋は、性格とは逆に……と言つたら怒るだらうが、女のナリ
い部屋だ。

かわいらしく人形も置いてあって、とまあえず明るい色で部屋をそ
ろえてこると言つ感じ。

「あまりジロジロ見ない」

俺は「めんなさい」と謝り、下を向いた。

朋子は、美人モードの霧をビタリ知つてゐるらしい。

…女に隠しても意味ないからか。

それとは別に、朋子は俺に恐怖感を抱いているよつとは見えないの
だが、どうもわざわざからビクビクしている。

「朋子……」

雪が憑ひついて、朋子の声を出すと、朋子はなにかを言い始めた。

「……やの……せっぱくも合つてたのー。」

「……せっ。」

朋子の発言で、俺と雪の声が重なった。

#30 一人のお見舞い（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、いつしたほうがいいと書つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は
net_touki@yahoocom.jp にメール
を送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#31 朋子の勘違い

俺たちの声が重なった後、零は朋子に問い合わせた。

「『やつぱり』って『いつ』とは、私と大地が一緒に居るって『いつか…その、友達だったのを知つてたの?』

恐る恐る聞いてみると、朋子は馬鹿にしたように鼻で笑つた。

「し、零…あんた、池山君と美人な子…零が一緒に居るといひの『いつ』が流通していることを知らなかつたの?」

「え?」

零は本当に知らなかつたらしい。

「私があれだけ、零に見てよおつて言つてたのに、断固拒否してたから知つているものだと思つてたよ」

「あ、あの写真が、私と大地のだつたの?」

朋子は「そりそり」といしながら頷いた。

「大地は知つてたの？」

雪は朋子と喋るとさまた違つ声の低さで俺に問いかけてきた。

「あ、うん。知つてると思つて」

「なんで教えてくれなかつたのー？ 馬鹿死ね！」

やはり貴方は言ひすぎですよ。

俺だつて、そんなに言われたら傷つくなつて。

『なんで教えてくれないかなあ』なんて、ぶつぶつ呟きながら、俺が勝ってきたミカンに手が伸びる。

それを上手に向いて、ひとつ。またひとつへと口の中へ運んでいった。

3つ目を食べようとしたとき、朋子が喋りだした。

「それで、雪と池山君はいつから付き合つていたの？」

「付き合つひない！」

地球の誰よりも先に即答で答えた。

まあ、事実は事実でも、ここまで仲良くなっているのに思つてこなのは俺だけか。

ため息を心の中でついて、朋子に俺は話しながら。

「霧といはこの前、落とした定期を渡しに行つたときから、ちよつとした仲になつて話し始めるよになつたんだよ。ね？」

俺が霧に問いかけると、カクンと首を下に下げた。

あ～やつぱり可愛いや。霧……って俺は変態か！？

「あの時！…そつだつたんだあ。あの後、霧に問いかけても何も答えてくれなかつたからなあ」

「黙つてじめんね？」

霧が悲しそうに謝ると、朋子は両手を広げて『いいよー…いいよー…気にしてないから』とジエスチャーを加えていった。

霧は『ありがとう朋子ー』と感謝をしながら、朋子にギュッと抱きついた。

俺には、抱きつてくれないくせに。

心の中で拗ねていた俺に気が付いたのか、朋子がこっちを向いて「…と笑ってきた朋子に対し、俺はニコッとやり返してやったが、そのときにはもう俺のほうは見ていなかった。

…おいで。

けど、その朋子と、零の姿が微笑ましくて、俺もあんなふうになれたらなって…少し思つたことは事実である。

その後、俺と零と朋子の3人で過去話や、俺と零の間で何があつたかを話し合つて楽しんだ。

見舞いに行つたのに、そんなのでいいのかよ。とか思つたが、思つたより零は元気で安心した。

そこまでは楽しかつたのだ。…帰り、そつ問題は帰りであった。

俺と零の家は10分程度と近い割りに、中学校は別なのだ。

そのため、二人の家の間には、学校の地区境界線というものがある。

ある大通りで、俺の中学校側か、零の中学校側なのか別れてしまつたのだ。

話に聞くところ、朋子は零と同じ中学校であり、この境目の大通り付近らしい。

すると、帰りの何分かは必然的に俺と同じ道を歩むことになる。

雪にバイバイと言った後、案の定俺と朋子の足の方向は同じ方向を向いて歩いていった。

「ねえ、大地君」

雪が見えなくなると、朋子はいきなり俺に話しかけてきた。

「…はい？」

「大地君は、雪のことが好きなんですね？」

直球！！

直球過ぎて、一瞬俺はつろたえてしまつたが…大丈夫。

俺は意を決して頷いた。

「やつぱり。恋しているんだと思った」

「分かります？」

「だいぶね～。大地君ってそんなに分かりやすいんだ」

「ヒヒヒと勝ち誇ったかのような声を出すと、朋子は少ししんみりと

した顔になつた。

「 霊が、こじとは違う前の中学校で……」

言いたくなさそうにする彼女に、俺は言葉を上乗せした。

「ストーカー？」

「…知つてたんだ」

「無理やり聞き出した……っぽい感じだけだね」

そのまま少し沈黙のまま、大通りへとたどり着いてしまった。

「じゃあ、私はこいで」

「うん。気をつけ」

俺が手を振ると、朋子は少し大きめな声で言つた。

「 魔を……守つてあげてねー 」

当たり前だよ。

雲は……俺が守つて見せるから。

#3.1 朋子の勘違い（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつしたほうがいいと書つアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい場合は

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてください

<https://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailboxform/>

で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#32 夏休みの禁断症状

「夏だ、海だ、青い空だ、水着だ！」

「うー、全然面白くねえーー。」

ベッドの上でバタバタしていると、明に笑われた。

「雪ひやんに会えない禁断症状か？」

「ううせえよ

明は、俺と雪の事は結構熟知しているはずである。
俺がまだ片思こと言いつゝとも、雪が俺にあまりにも興味がないこととも知つてこのだ。

メールを送つても、一回返つてくるメールは10件もない。

これほど寂しことはあるだらつか。

「夏休みなんだから、もう少し女遊びしようぜ？」

「一人でギャルゲーでもして勝手にやつてみ

そう、今は夏休みなのだ。

夏休みと云ふことは、雲と唯一会えた学校の登校もないわけで。

自分で言つは恥ずかしいが、人生初、禁断症状といつものにかかりてしまったようだ。

雲に会いたい。

声だけでもいい…聞きたい。

あの温もりを感じたのに…なんで夏休みと言つて、甘心い者反対運同様なものがあるんだ！

これじゃあ拷問だ！ 体罰反対！

今まで夏休みなんて天国のように感じていたのに…

恋つて恐ろしがる。

「なあ大地、そんなに好きなら遊びに誘つまえばいいじゃん。祭りとかわ」

それが出来たらこんなに苦労しないって。

祭りかあ…。

携帯を片手に持ち、メールを打った。

『土曜日暇？ 遊びに行かないか？』

送信ボタンを押すと、俺はポイっと携帯を枕元へと投げて、明と話しあじめた。

10分後、俺の携帯がなり出した。

携帯のサブ画面をみると受信完了となつており、メールが届いたようだ。

メールを開くと、『いいよ！ 久しぶりに遊ぶねえ！』と元気がいいメールが来ていた。

『じゃあ、土曜日の5時に駅前集合でー。』

それだけ打つて、メールを送ると、俺は再び携帯を枕元に戻す。

「なあ、明。今週の土曜日暇だよな？ 遊ぼうぜ」

「用事があるといつても、大地は連れて行くんだろう？」

「瑞樹も呼んだから、久しぶりに祭りでも行くか？」

「お、行く行く！」

そつぎのメール相手は、残念ながら霊ではありませんでした。ハイ。

瑞樹とはじいのところ、遊んでいなかつたからな。

久しぶりに、このメンツで遊んでみると面白い。

小学校、中学校と、この時期になると俺たちは3人でよく祭りに行つていたのだ。

高校生になると、俺たちはなかなか会うことも無く、去年の祭りは不良仲間を連れて行つたもんだ。

なので、今度行く祭りは、俺たちの想い出の場所でもある。

「懐かしいよな。小学校のときは…空がいたんだよな」

「お前、そんな昔のことによく覚えてるなあ

…空とは、俺の双子の弟である。親の離婚時に父親に引き取られたのだ。

俺は今の母親に引き取られたのだが。

「空は元氣にしているのか?」

明は俺に聞いてくるが、俺がそんなことを知る由も無い。

小学校4年生のときに別れた以来、話した事も連絡を取ったことも無いのだから。

「わからんねえよ」

俺はボソッと呟き、携帯に目を向けた。

鳴らない携帯。

最近は玩具にしていた女からの連絡も無に等しくなった。俺が、一人の女にベタ惚れだという噂を流している奴が居るらしい。

…多分それは明だと思うが。

まあ、いちいち断るのも面倒くさいと思つていたから、明にはそことのところ感謝だ。

俺はふと気がつくと、片手に携帯を持ち、送信者の名前だけが書いてある、新規メールを作っていた。

『今何してる?
暇だああああ』

本文にせつづけて、メールを送つてみた。

：送信相手である、雲からはその日メールが返つてくることは無かつた。

#32 夏休みの禁断症状（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつしたほうがいいと書つアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価等で言いにくい人は、

net_touki@yahoocom.jp にメールを送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#3-1 お祭りの出来事1

「遅いよー。」

そういうわれたのは、俺じゃなく明。

「わりいー。可愛い女の子に捕まつてさあ。モテ男と言つのは、辛いんだよ。瑞樹ちゃん」

「瑞樹ちゃんって呼ぶなー。気持ち悪い」

瑞樹は一言入れて、明の頭をポコンと殴つた。

このやり取りは、昔から変わらない。明が冗談言つて、瑞樹が明をけなして笑いを取るというのは。

俺は、瑞樹の隣で笑つてゐるだけの存在である。

ただいまの時刻、5時半。

30分の遅刻。

昔から明は遅刻癖があり、中学校のときなんて、学校に行った日の5分の4は遅刻だったという伝説を持つほどだ。

俺たちが遊ぶときには必ずと言つていいほど、30分ほど遅刻をし

てくるし。

そのため、俺も瑞樹も、明と遊ぶときは15分ほど遅れて集合場所へとやってくるのだ。

「まあ、とりあえず、祭りに行こつづけー。」

俺がいまだに馬鹿なやり取りをしている瑞樹と明に言った。

明は「おつけえ！」と言つて、一番初めに改札口をくぐつていった。い、いつの間に切符を買つていたんだ。

祭りまでは駅4つほど先のところにある。

毎年祭りの時期になると、駅はどつかの都会の通勤ラッシュ並に人がいっぱい居るのだ。

人ごみはあまり好きではないので、少々人を殴りたくなつてくる。

これは、カルシウム摂取不足の症状か？

電車に乗り、目的地まで行くと、そこには、毎年見る風景が。

何故か毎年来ているのに懐かしく感じた。

この3人で出かけるのは、久しぶりだからだろうか？

「最初は、もちろん金魚すくいだよねー。」

瑞樹はハキハキと言いつと、明はフツと鼻で笑った。

「な、何よ？」

「瑞樹ちゃんはお子様だなって」

「明に言われたくないですぅー。」

「まあ、瑞樹の場合は、金魚を救うじゃなくて、金魚を食つちやい
そうだけど」

ギヤハハと笑い出す明に、瑞樹は問答無用で右ストレートをかました。

あ、ちなみに、瑞樹は小学校のころから、合戦道、空手を習っています。

ブンッと言ひ音と共に、バン！　と言ひ音が鳴り響き、明は数メートル先まで吹っ飛んでいった。

『痛そお…』といったのは、明を殴った本人である。

『南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏』と唱えているのは俺。

「ば、馬鹿！　そんなの冗談に決まってるだろ！　思いつきり殴ること無いだろおが！　いってえ」

自分の左頬を痛そうにさすっているが、音と、飛距離の割にはさほどダメージを受けていない様子。

…昔から殴られているから、打たれ強くなつたのだろうか。

「明が悪いんだからね！」

「じめんつて～」

そつ言つて拗ねた瑞樹を明は宥める。

傍から見たら付き合つてゐるのではないか？　という光景だ。
…こいつらが、もし付き合つていたら、天と地がひっくり返つて、天国へいつも上るはずの天使が地獄に落ちてしまつことになりかない。

その様な感じで俺たちは祭りを楽しんだ。

祭りの名物である、叫び太鼓。

名前のとおり叫びまくって、太鼓を叩くだけである。

…これを名物と言つていいのか分からぬが。

そして、祭りの最後のほうには花火が打ち上げられる。

俺が思つて、花火こそがこの祭りの本当の名物といえるだろ。

俺たちが笑いあつてゐると、射的を頑張つてやつていふ三つ編みモードの雰の姿を見つけた。

しかも、なんと浴衣なのだ。

か、か、可愛すぎる…。

この大人数の中、雰を見つけた俺はすごいとは思わないか？　俺の特技に『雰を見つけること』とでも書いておこうか。
俺がボーッと見ていると、明がちよこちよこつとやってきて、俺の

視線をたどった。

「靈ひひやんか~」

「な、何だよ」

「ヤニヤする明の顔を俺は睨む。

それでも、明のニヤニヤが納まらないので、俺は腹部に一発入れてやつた。

「ぐまつー。」

その場で少し痛そうにする明に『血業血得だ』と言こと捨ててやつた。

「そういえば、前に大地が石上靈の事を聞いてきたよねえ。ビリして?」

「まあ、色々あつてね」

「好きなの?」

瑞樹のその言葉に俺の顔は赤くなつたのだろう。瑞樹は驚きの顔を隠していなかつた。

「そ、そんなんじゃ……」

なくはないけど…。

「だつて、噂の『写メ見たけど大地の今』の彼女つて…超美人じゃん！」

「…彼女じゃないけどな」

俺は笑いながらそう答えた。

瑞樹は、一瞬顔を曇らせた後、『大地でも捕まえきれない女なんているんだねえ』と笑っていた。

「で、その超美人女の子と、石上雲とどっちが本命なの？」

「どっちと言つか…」

同一人物なんんですけど。

…これは言つていいのか？ それとも言わないほうがいいのか？

そんな単純な質問が俺の頭の中でぐるぐる回っていた。

「私たち友達でしょ！隠し事は駄目！分かつた？」

説教くさく言つてゐる瑞樹の顔は相変わらず笑顔だった。

その言葉と、笑顔を見ると言つしかないと、俺の心は決まった。

「絶対誰にも言つなよ…絶対だぞ？」

俺は念のため、瑞樹の『秘密』の約束をすると、快く頷いてくれた。

意を決して、俺は少し俯きながら口を開く。

「その…瑞樹の言つ超美人女の子と、あそこに居る石上雲…実は同一人物なんだ」

俺はそういう終えると、瑞樹の顔を見た。

明が見たら『ばつかじゃねえの！？』と言つぐらいい口が開いていて、目もいつも以上にぱっちりと開いている。

簡単に言つと、ひどい顔をしている。

やつとのことで、思考回路が正常に戻ったのか、顔は少し普通に戻り、少しほ納得した様子だ。

まあ、驚くのは分かる。

俺も、初めは信じられなかつたから。

#31 お祭りの出来事①（後書き）

久しぶりの、瑞樹ちゃん登場です。

瑞樹ちゃんはいつぱい出したいのだけれども、
出す機会がないといふか、なんといふか。

出来るだけ、出でて行きたいです（つゝ。）スンスン

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつまづがいいとアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい人は、

net_touki_net@yahoo.co.jp にメール
を送ってください

<https://plaza.rakuten.co.jp/m1q>

84s/mailboxform/
で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願いします。

#34 お祭りの出来事2

瑞樹との話も終え、俺は再び浴衣姿三つ編みモードの雫を見た。

いまだに射的で苦戦している。

そんなに欲しいものがあるのか？

話しかけたい。

こいつやって偶然だが、雫に会いつと運命だと思つてしまつ。

それに、夏休みが始まつてから、一度も声を聞いてないし、顔も見ていなかつた。

近寄りたいと思つ俺の気持ちは間違つてゐるのだろうか。

友達と一緒に居るみたいだし、話しかけるのは雫のためにも我慢しなければいけない。

俺は大きくため息を着いて、明と瑞樹に『行くぞ』と答えた。

この道は一本道だから、来た道を戻るか、雫たちの後ろを横切つていくかしかない。

出来れば、我慢するのが辛いから、横切りたくは無い。かといって、戻つていぐのも忍びない。

俺は意を決して、横切る決断をしたのだ。

なのに…なのに…あの女は…!

「あれ、大地君じゃない！　久しぶり～」

そう言つて、ブンブンと手を振るのは朋子。

あの馬鹿！

心中で思つたときにはすでに遅く、零と他と一緒に来た友達であろう2人が『あの池山くんと仲がいいの！？』なんて朋子に問いただしている。

俺は我慢をして無視をしようとした。

零のためと思つて。

よし、行く…つておい！

俺の心でつっこみを入れた相手は、あの馬鹿男、安藤明であった。

あるつことによ、あの4人集団に近寄つていったのだ。

「やつほお！　君たち、女の子だけで行動してるの？　女の子だけだと危ないから、僕たちと一緒に行動しない？」

…紳士ぶりやがつて。

『うせ明は、俺が困るのを楽しんでいるのだ。

隣の瑞樹はと黙り、呆れた顔をしていろし。

明の言葉に朋子と雫以外の一人が『どうする？ 一緒に行動する？』などと話しているのが分かる。

肝心の雫はと黙り、こまかに射的と遊んでいたようだ。

女の子たちの会話が終わつたと思つたら「いこですよー」なんて言ひ出した。

…嬉しけど、一緒にいると我慢するのが本当に辛い。

俺は仕方なく明の下へと寄つていって、女の子2人に挨拶をした。

挨拶が終わるとまず、俺の目は射的を頑張つてゐる浴衣姿の雫へと行つた。

なんか幼さが残つていて、可愛い…。

決して俺は口り系じゃないが。

朋子は雫のほうを向いて、「雫も挨拶しなよー！ 池山君たちがいるよー」と叫ぶと、びっくりしたのか、雫は銃を一発暴発した。

その姿に、俺の我慢がとうとう切れて、雫の下へと寄つてこつた。

「欲しいものもあるんですか？」

俺は周りの2人に怪しまれないように、他人行儀で零に接した。

零はとりあえず無視をする。

とりあえず、零を見ていると、いつになつても弾が発射されない。

よくよく見てみると、横にある銃のバーが降りていない。

「バー下ろさないと」

俺がそういうと、慌てて零はバーを下ろそうとした。

10秒ほどかけて下ろし終えると、再び構え始めた。

俺は何を狙っているのか気になり、視線の先を見てみるともう少しで落ちそうな赤色の缶があつた。

どいつもその缶を落とすと、イルカの人形が手に入るらしい。

零は一発打つと、その赤い缶とはかけ離れたところに弾が飛んでいった。

顔を覗いてみると、落ち込んでいる様子。

弾が無くなつたようだ。

そして零は俺を無視してまま、朋子の下へと寝ついていた。

その様子を少し眺めた後、俺は射的のおばちゃんに300円を渡したのだった。

「おーい！ 大地行くぞ！」

俺の後ろのほうで明の声がした。

「おひ、今行く！」

俺はおばちゃんから手渡されたイルカの人形を手にとつて、明の下へと軽く走つていった。

男子2人、女子5人と言つなんともハーレム状態の俺たちは、うまい具合に3：2：2で分かれたのである。

一番先頭には、明とわつきの女子2人。

その後ろには、さつきから話があつてゐるのか分からぬが、結構楽しそうに話す瑞樹と朋子。

その後ろには…残り物？ の俺と雲。

雲の顔を見ると、少し落ち込んでいるよりも見えた。

さつきのイルカが相当欲しかったのか？

俺は前の5人が見ていないのを確認した後、さつきのイルカを雲の顔の前に出現させた。

「僕、イルカちゃんでしゅ。雲ちゃんは元気が無いでしゅねー。」

イルカの人形をリズムよく動かし、俺は赤ちゃん言葉で腹話術らしきものでした。

すると、雲は可笑しかったのか、クククと笑い出した。

「わ、笑うなよ…」

「笑つてなんか無い。それより、それ何？」

俺はイルカの人形を雲の頭に乗せながら、ニヒヒと笑い「雲のために取つたあ。あげる」と言つた。

雲は「ば、馬鹿じゃないの？」と照れている様子。

俺つて、雲の前だと性格が変わる氣がするんだけど。

「まあ受け取れって。俺がこれ持つてたら恥ずかしいだろ?」

零は何かを考えたように口を開いた後、俺のほうをジロッと見てきた。

「…し、仕方ないわね。貰つてあげるわよ」

そう言って、零は俺の手からイルカの人形を奪つていった。

零はイルカの人形を見るとニヘッと笑みをこぼすと、じっと見ていた俺に気付き「何よ?」と言い、いつもの無表情の零に戻ってしまった。

そんな姿の零もまた可愛いと思つてしまつ俺は、完全に零にはまつてしまつた事を再び自覚するのであった。

#34 お祭りの出来事2（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、いつしたほうがいいと言つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価等で言いにくい人は、

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール

を送ってください

<https://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#35 祭りの出来事

俺が前を向くと、さつきからチラシチラシと瑞樹が俺等のほうを見ているのが分かった。

何か言いたいこともあるのだろうか。

「どうした瑞樹？」

「え、いや、なんでもないよ。」

そつ言つて、再び朋子と楽しそつに喋りだした。

もしかして、さつきの零の話が気になつてゐるのか？ そりや別人だからな。あの美人モードの零と、三つ編みモードの零は。

俺がチラシと零の方を見ると、未だに俺が取つてあげたイルカと遊んでいる。

そんなに嬉しかったのか。

けど、そんな顔されると、また体が勝手に抱きつてしまいそうで

…。

一度目をそらし、零をもう一度見ると、目が合ってしまった。

「な、何？」

「いや、なんでもないよ。霧は？」

「わ、私もなんでもないよ」

そして、霧は前を向いてイルカの人形と再び遊び始めた。

「こいつは子供か。

その様子を見てみると、どうも笑いがこみ上げてくる。

とつとつ我慢が出来ずに、クククと笑ってしまった。

「な、何なのよー。やつぱり言いたいことあるのー?」

「いや、そのあ、可愛いなって」

俺がそういうと、顔を真っ赤にする霧。

その姿になつてから、他人に『可愛い』と言わることに聞きなれてないのか？

「浴衣姿も…似合つてるし」

雲はとうとう、俺を無視して下を向いた。

怒りせるようなことを言つてしまつたか…。

「「」、「めん」

俺が謝ると、雲は「な、何で謝るのよー」と、余計怒り出した。

謝るのは、逆効果だつたらしい。

「えつと、その…あ！ そつこえば、もつすぐ花火やるじやん」

時計を見ると、19時40分となつていた。

花火は毎年、20時から打ち上げ開始なのだ。

1時間ほどで終わつてしまつが、毎回多くの人がこの祭りに見に来ている。

年々、その花火のおかげで、祭りの参加者が増えていると言つ話だ。

そのため、小学生の高学年から花火を見る場所がどんどんと無くなつていき、俺たちはあの頃、よりよい場所を探すために色々探索していたつけ。

そして、中学校に入った年の祭りのとき、俺たちはある秘密の場所を見つけた。

林の少し奥へ歩いていったところなのだが、崖の上となつており、花火を一望できる。毎年、三人で行くときはここで見るって決めていたのだ。

そして、多分…今日も行くのだろう。

「お、本當だ。どこで見ようか？」

そう言つたのは、あの秘密の場所を知つている明だ。

「そりゃ、もしかる…」

俺が『あの秘密の場所でいいだろ。』と言つとしたとき、明が俺の言葉を重ねてきた。

「川原行く？ あそこ少々入いるけど、そこまで悪い場所じゃないし。賛成の人は挙手！」

そうこうと、俺と零以外は手を挙げた。

雪は、明のトーンショントリニティにいひつけないよくな顔をしてる。

「あれ、お前たちは賛成しないの？　じゃあ、反対もの同士一人で
どうか行つてるか？」

「ばつか！　別にそこでいにつて！」

そういう終えると、ニヤニヤして居る明は俺の耳元でボソッと呟いた。

「あそこは3人の秘密の場所だから」と。

俺は睡然とした顔をしていた。

明がそんなことまで考えて居たなんて。

「じゃあ行きますか！」

元気よく明が先頭を歩き出した。

それにつられて、みんなが歩き出す。

10分ほどすると、その川原へと着いた。

川原にはカップルらしき人たちが5組ぐらいと、高校生グループがちょこつといただけだった。

上は少し林で見にくいが、そこまで悪い場所ではなかつた。俺たちの秘密の場所ほどではないが。

川原は結構暗くて、後ろのほうにある祭りにある出店の明かりで少し足場が見える程度だ。

そして、時間が8時になると、一発目の花火が上にあがり、パンツとはじく音が聞こえると、空の一部は綺麗なオレンジ色で染まつた。俺の前方数メートル先には、女の子2人とイチャイチャしながら花火を見ている明。

その後ろには、朋子と話をしながら空を見上げている瑞樹、その少し後ろには俺がいる。

そして、俺の隣には少し大きめな石に座りながら、空を見上げている零がいた。

花火が上がって空で舞い散ると、一瞬だけ零が見える。

この一瞬がなんだか嬉しくて、俺は花火より零の顔を見てしまうのだ。

そのうち、零は俺の視線に気付いて、「何よ?」と怒り出し、ひつ

そりと「雲を見ていい?」と聞くと「黙黙に決まってるでしょう」と俺の頭を「ツン」と叩いてきた。

俺は雲に気付かれないように、少し近くに寄つてみると、今度はギロツと俺を睨んできたのだ。

「今度は何?」

俺は何も言わず、雲の膝の上に置いてある雲の手をとった。

「な、何するのよー。」

周囲に聞こえなつこひびきたりと雲は俺に少し顔を寄せてくれつ。

そして俺は、もっと顔を近づけたりと云つた。せふやついた。

「少しだけ」

雲は離さうとブンブン振つているが、俺の力に勝てるはずも無く、4回ぐらつふつてから諦めたようだ。

俺がニヤリと笑つと、雲は俺の顔を一切見なくなつた。

#35 お祭りの出来事③（後書き）

今年最後のHPです。

今のところ目標である毎日更新できている模様。
しかし、文章能力の無さに泣けてきますw
来年の目標は文章能力UPUPW

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと書つアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい人は、

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださるか、

<https://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#336 お祭りの出来事4

「だ、誰かに見られたらどうするのよ…」

花火がすべて打ちあがったと同時に、零の手は俺の手から離れていった。

…ところで俺は、花火中に花火を見るどころではなかつた。

あれから40分以上、手を繋いでいたんだぞ？

自分から繋いだにもかかわらず、心臓がバクバクしているのがわかる。

それもそのはず、零がそつと手を握り返してくれたのだ。

その時、零は花火に夢中だったから、無意識に手に力が入つただけだろうけど…。

「まあ、そのときはその時だろ。しかもあの暗さ。絶対見えやしないよ」

「もひ、今日だけだからね…」

はあ、と大きくため息をついた零は、ゆっくりと立ち上がつた。

前の5人はとさうと、まだ花火の余韻を浴びていたいらしい。座つたまま、空を見続けている。

「おい、明そろそろ行くぞ?」

俺が声をかけると、「わかつたあ」と言つて、立ち上がる。

それにつられるかのように、周りの女子もぞくぞくと立ち上がった。

そして再び、明が先頭に立つて歩き出す。

何故か俺はいつも最後尾となり、雲と隣同士で歩く形になってしまったのだ。

夜9時半を過ぎたところで『女の子は夜遅いと危ないから…』と明が言い、解散と言つ形になつた。

方向が同じと言つこともあり、俺と瑞樹と朋子と雲は一緒に電車に乗つて帰ることになつた。明はと言つて、他の女の子を家まで送つていいくことになつたらしく。

『帰りに狼になるかもしれないから、気をつけてね』と女の子2人に言つと、片方が『それでもいいかも…』と呟いたように思えたのは、気にしないよつにした。

そして、明と2人の女の子を抜いた俺たち4人は電車に乗った。

零の手には、俺がとつてあげたイルカの人形を大事そうに持っている。

その様子が何故か俺には嬉しくて、勝手に笑みがこぼれてしまった。

電車の中では、今日あつたことや、楽しかったことを話したり、朋子と瑞樹のメールアドレス交換で時間は過ぎていった。

そして零が降りる駅へと着く。

零は電車を降りて、俺は零を見送つていくために電車を降りようとしたら、後ろの一人はどうも降りる零囲気が無い。

「降りないのか？」

俺がそう聞くと、彼女たちは『お気になさらず』と言つて、一いつつと笑つてきた。

どうやら、俺と零を一人きりにしたいらしい……。

そんな気遣いなんかいらないうといふのに。

「じゃあ、零と大地君バイバイ！」

と、朋子が言つて、電車のドアは閉まつてしまつた。

雪はあまり状況が分かつていな様子。

俺が『行くぞ』と雪を催促すると、雪は俺の後をついてきた。

駅のホームから出で、5分もすると雪の家が見えてくる。

その5分間は無言で過ぎした。

車はあまり通らない道らしい。俺たちの歩く音だけが無性に響く。雪の家まで20歩ぐらいのところで、こきなつて雪の音が無くなつた。

振り返ると立ち止まつた浴衣姿の雪。

「どうした？」

「お、おうへへへ..

「そ、それで、イルカちゃんが…ありがとうって何が言いたいんだ、この子は。

「そ、それで、イルカちゃんが…ありがとうって

「あつ、あの…イルカちゃんが、私の所に来たがつていたらしこの」

「うそ。どういたしまして、イルカちゃん」

俺は人形のイルカにナデナデしてやると、雲は俺の顔をじっと見ていた。

さうと、『ありがとう』って素直に言つのが恥ずかしいんだろうな。
そういうのも…可愛いんだけど。

イルカをナデナデしていると、いきなり俺の両肩に重みがかかった
と思ったら、今度は頬に何かが当たる感触がした。

「じゃ、雲？」

俺は動搖して、雲の名前を声に出すと雲は恥ずかしそうに口を向いた。

「イツ、イルカちゃんがお礼したいって言うからー。私が変わりに
…その…してあげたの！ ありがたく思え馬鹿ー。おやすみーーー！」
！」

やつぱり、雲は家へと走つていった。

「頬にキスなんて… 反則すぎやしないで…」

…もう、頬は洗えないな。

#36 お祭りの出来事4（後書き）

あけましておめでとうございます！
わ、去年は色々とありました。

今年は、この「君との日々」完結をまず目標します。

新年に「雫のほっぺにチュー」を公開できたのは

なんとも嬉しいw

(。・。)ノあいw

では、今年よろしくおねがいします。

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつしたほつがいこと言ひアドバイスをください
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい人は、

net-touki-net@yahoo.co.jp メール
を送ってくださるか、

<https://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>

で、監査でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

やつと…霊に会える…。

あの祭りが終わってからと言つもの、俺の禁断症状は激しくなった。

家中では『面白くない!』と連呼するようになつたし、散歩しているときは、霊がいかがキヨロキヨロし始めるし…。

わかつていただけど俺は、もう霊にベタ惚れ状態です。

そして本日、その最悪な夏休みともおさらば…

昨日は霊に会えるのが嬉しくて、なかなか寝付けなかつたほどだ。

俺は鼻歌交じりで、髪の毛をビシッと決めて、学校に行く準備を始める。

このときは思いもしなかつただろう、大変な出来事が今日一つも起ころなんて。

「雲ー。」

と心中で大きく呟んだ俺は、今雲を電車の中で発見した。

嬉しくて、抱きしめたくて、人目を気にせず雲の下へと軽く小走りで寄つていった。

その間、電車の揺れで転びそうにもなつたが。

「おはよー。」

雲の顔を見ると、いつもむじむじ。

挨拶を無視するのもこつもどり。

俺が話しかけると、素つ氣無く返事をするのもこつもどり。

…やつ、『こめんせり』とかいたのー。』

学校に着き教室へと向かつて、なにやら教室がぞざわとしている。

「どうした?」

近くにいた明に聞くと、じつやう一人転校生がやつてくるらしい。

「その転校生を見た奴の話だと、女が一人、男が一人らしい。そして、ここからが問題なのだ！」

「問題？」

「女の方がとてもなく可愛いやうしー」

…そんなことかよ。

『じつせ明のことだから、次に口を開くときは』『その子は俺が落とすー。』とでも言うのだらう。

「本当に可愛かつたら、俺が落とす！」

「ヒヒと笑いながら明は右手を元に突き上げてきた。

俺にそつ言つ事を予知されていたとも知らずに。

…予知していたからって、何かが変わる訳じゃないけど。

「そして、まだまだビックリコースが飛び込むぞ！ 聞いて驚け。

その女は俺たちのクラスにくるらしいんだ。俺の席の隣に作られた席こそがその証拠！」

「お、それは、よかつたね」

俺が素っ気無く返事をすると『なんだよ～大地には雲ひやんがいるからつて』と拗ねた様子を見せた。

そのとおりだ。俺には雲がいる。

「それで、男子のはづはどうなんだ？」

「男子？　あ～転校生か」

その話しかしていないうちが。

「えっとね、眼鏡をかけているが、格好男前らしい。俺様ほどではないが

「やうですか」

「そうそう、先生から聞いた話だが、頭がいいらしいぞ。何のとりえも無いこの高校に入ってきた意味が先生たちにも分からないうち

何のとりえも無いって、先生たちが決めちゃつていいのか。

「男子は雲ちやんのいるクラスに行こうぜ」

「そっか」

あとで、どんな子か雲に聞いてみよ。

どうせ、無視されるだろうが。

「それでも驚きだよな。高校にもなって兄弟でもない一人が同じ時期に転校してくるなんて。みっぽどの事情があるのだろうか」

…俺には、お前の情報網のほうが驚きだ。

今日転校してくる奴の情報をそこまで聞き出すなんて、明以外の人間に出来ないだろう。

そして、学校が始まる合図のチャイムが鳴った。

暨、転校生がやってくることを知っているのだろうか、いつも以上にざわざわとしている。

そこに、先生が一人で教室に入ってきた。

「みんな座れ。このざわめきを見たといふ、ほどんどの人が知っているだろうが、本日転校生がやってきた」

先生がそつ言ひと、教室全体に「お～」といつ声。

「入つていいぞ」

先生がドアの方に呼びかけると、ガラツヒドアが開く。

そこには、少しお嬢様のような雰囲気をかもし出した女の子が…。
つて、あれは…

「お、おい大地… あれは…」

隣の明は俺に話しかけてきたのだろうけど、俺の頭には入つてこなかつた。

転校生に見とれていたわけじゃない。

眠すぎて、氣絶したわけじゃない。

ただ、そこにいる人物は、俺の傍から泣きながら離れていった相手
だつたから。

「谷口由梨です。皆さんとは学年が一緒ですが、訳があつてひとつ
年上です。しかしタメ語で全然いいですので、どうぞ宜しくお願ひ
します」

転校生の自己紹介が終わると、俺と明以外の人たちが拍手を浴びせ
た。

なんで由梨がいるんだ。

俺の思考回路は今にも止まりそうだった。

#37 転校生（後書き）

久々の由梨登場です。
さて、これからどうなるのでしょうか..
作者にも分かりませんw

評価で言いにくい人は、

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージページもできます。
宜しくお願ひします。

#38 由梨そしてもう一人の転校生

「由梨…。な、何で…ここにいるんだよ」

無意識に口に出ていた言葉だった。

俺は由梨から視線を外すことが出来なかつた。

あの日、泣きながらの電話を最後にして、俺の下から立ち去つた彼女から。

零は明の隣に作られた席に座る。

かばんをそつと机の横にかけて、隣の明を見ると「明君、久しぶり」と呟いた。

明は「由梨さん…」と呟くだけ。

相当明もびっくりしているのだろう。

朝の挨拶の時間も終わり、休憩時間となつた。

案の定、由梨の周りには生徒たちが集まる。

教室の外には噂を聞きつけた、他の生徒たちがやつてきた。

『かわいいじやん』とか、『結構美人だな』など、由梨をほめる言葉が耳に入つてくる。

注目の的である、由梨はすくっと立ち上がり、俺の方へと体を向けた。

こっちにくるのか？

…やめろ。

話なんかしたくない。

「大地…久しぶりだね」

俺の声を呼ぶ、懐かしい声は俺の心に響いた。

苦しい。

もう、見たくない。

ガタンと音を立てて、俺はその場から離れよつとした。

「大地！」

後ろで由梨の声がする。

なんて…悲しい声なんだろ？

由梨は俺の下へと走ってきて、腕をつかんだ。

俺はその腕を振りほどいて、由梨のまへくと田を向けた。
あの日の事が一瞬にして頭によみがえり、味わった憎悪が心から沸
いてきたのに。

何故…こんなに苦しきのだ？

「俺に話しかけるな…」

「大地…ごめんね」

由梨のその声は、今にも泣きやみだつた。

俺の心は少し…いや、ひとつもなべ、この状況に耐えられるような
状況じゃない。

何かを吐き出せなきやせつてこない。

「何で…何で帰ってきたんだ！　忘れておいたのは由梨だらうが

！」

なにかが頬を流れていく。

嘘…馬鹿じゃないのか。

学校で泣くなんて、この俺が…。

「大地…」

隣にいる明が俺の名前を呼んだ。

こんな場所、居たくない。

とりあえず、気持ちの整理をしたい。

「その手を離してくれ…」

そう呟いたら、腕の重みも無くなり、再び歩き始めることが出来た。

向かう先なんて考えていない。

明も俺が心配になつたのか、ついてきてくれた。

…あとで、話でも聞いてもらおうか。

そんなことを思つてゐると、田の前の3組の教室がガラツと開いたのが分かつた。

音につられて、顔をあげると零がいた。

「だ…大地？」

零は心配になつたのか、学校と言つて俺の名前を呼んでくれた。

けど、ごめん零。今…まともに零と話が出来る気がしない。

俺は下を見て歩き出した。

すると、ドンッと誰かにぶつかってしまった。

「わりい」

声をかけると、その人は俺の肩を掴んだ。

「池山…大地」

見知らぬ声から呼ばれた俺は、再び顔をあげた。

その顔はどこかで見たことある顔だった。

「空…？」

#38 由梨そしてもう一人の転校生（後書き）

はい。

タイトルが、めちゃ長いです。w
そこらへんは、気になさらずにーー！
さて、今度は空が登場です。

波乱万丈の臭いが…

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、こいつしたほうがいいと言つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい人は、

net_touki_net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださいか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#39 弟参上、涙と友に

「大地！」

そうつ置いて、空は俺に抱きついてきた。

これだけを見るとホモっ子に見えるのだろうか。

それとも、感動の再開で感動する場面なのだろうか。

今の俺には…感動している余裕は無いのだろうけど。

「久しぶり…」

「大地…？」

久しぶりだと呟つのに、空に心配されてしまつ。

けど、今の俺にはどうしようもない。

「そ、空！ 久しぶり！」

この場で唯一俺の状況を分かっている明が助け舟を出してくれた。

「明！　久しぶりだなあ！　男前になつたじゃん！」

空は俺から離れて、明の下へと歩いていった。

その隙に、俺は空に『またな』と呟いて、歩き去っていく。

明は空と別れを告げたあと、俺の下へと再び来てくれた。

数分歩いて、着いた先は屋上だった。

屋上へ行く階段には手作り感いいっぱいの木のドアがあり、本当はそこに錠がかかっているのだが、少し強く引っ張れば錠はあっさりと外してくれるようになつてるので。

屋上のドアを開けると、この時期特有の暑さが襲つてくる。

後ろには、何も言わずについて来てくれた明。

俺は、近くの壁にもたれかかり、屋上の地面へと腰を下ろした。

明は俺の隣に座り、話し始めた。

「空が…帰ってきたな。あと…由梨先輩も」

『気まずやうに言ひ明は、俺の』の痛い気持ちが分かっているのだろうか。

「…大地は、由梨先輩のこと…その、好き…なのか?」

「好きなわけねえ。あんな女」

好きなわけが無い。

俺を見捨てていったあんな女。

忘れると言つたのはどいつもどいつだ。

もひつ俺を苦しめるな。

そんな言葉が、さつきから頭の中で飛び交つてゐる。

「俺は、大地の気持ちを100%分かつてあげることができない。出来てもせいぜい40%ぐらいなんだろう。でも、俺はお前のことひとつだけ100%分かつていることがあるんだ」

「…なんだよ?」

俺は明のほうを見た。

明は、空を見てから俺の顔を見ていつものようにヒーヒッと笑った。

「雪ひやんがいるだろ？？」

…
雪。

あの俺を心配するよつた呼びかけた声が俺の頭の中で木靈のよつた反響する。

『大地』

そして、ひとつ、俺の頭の中で違つ声が聞こえた。

由梨の…呼ぶ声が。

「もう、訳わからんねえ。…どうすればいいんだ！」

その場で泣き崩れてしまった。

理由は定かでは無い。

ただ、何故か涙がこぼれてきた。

雨が降つたかのように、洪水が起きたかのように、俺の目からは涙

があふれ出てきて、圍^{いわ}の地面をぬりじた。

「明

少し気持ちが落ち着くと、俺は明の名前を呼んだ。

「何?

「俺さ、由梨にびつひつ顔して会えぱこいだろ?」

「こつまぢめり接すればこいせ

俺は『あつがとう』と明に向ひと、こつものみつに笑ってくれた。

#39 弟参上、涙と友に（後書き）

弟参上です。
空はかわいいです。
…すんません。

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、いつしたほうがいいといつアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい人は、
net_touki_neet@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#40 いつまじおつ

屋上で明と話しながら、一限目をすこした。

休み時間になると、明が「教室に戻るか」と言つたので、俺たちはその場に立つ。

屋上を出て階段を下りていくと、偶然にも零に会つた。

「零ー。」

明と俺と零以外、誰もいないのを確認して、零の名前を呼ぶ。

心配そうな顔をした零が向いた。

「大地、何があったの？」

「何も無いよ」

零に心配されるなんて、どれだけ嬉しいか。

「とにかく、どうしたの？ こんなところで一人でうつむいて」

俺が質問すると、雲はあたふたしながらいつ答えた。

「べ、別に大地を探しに来たんじゃなくて、ただ…その、図書室に行こうとしたの！」

「そつか」

心配して、探しに来てくれたんだ！

こんな幸せ味わえるなら、少しいやなことがあるのもいいかもしない。

そんな雲が可愛くなつて、ギュッと抱きしめてみた。

「…何するのよ」

「ハグつてやつ…誰も見てないから～」

一シシと笑うと、雲は呆れた顔をして、俺の腕からスッと抜けた。

「私、教室に戻るから」

そう言って、歩き出す雲の後姿をじっと見ながら俺は気が少し晴れ

たことに気がついた。

『雪ひやんがいるだらう。』

明のあの言葉は間違つてなんかない。

俺には今、雪がいる。

「図書室はいいのか？」

俺が雪に声を掛けると、パッと後ろを向いてきて「馬鹿つー」と言ひ下した。

そして俺たちも教室へと戻ることに。

3組の前を通り、再び空と会つた。

「空ー」

「大地、さつまほじつしたんだよー。いきなり居なくなっちゃつて」

「お前じや、男前になつちやつて。その眼鏡はファッショソンか？
それとも、勉強のしそぎか？ すつげえ久しぶりじゃん！」

「眼鏡かけてたまつが、優等生に見えるだろ？ だからつけてるんだよー」

久しぶりに双子の弟と話した俺は、懐かしい気分を味わった。

由梨と会つたときはまた違つ、懐かしさを。

「立花君ー」

そう呼ぶのは、3組の学級委員長っぽい人だ。

明らかに、優等生と言ひ雰囲気をかもし出している。

立花とは、空の苗字である。離婚して父親に引き取られた空と母親に引き取られた俺の苗字は違つてくるのだ。

「なんだよ。委員長へあまり怒ると可愛い顔が台無しですよー」

今日、転校してきたと聞ひのこ、空は妙にこの学校の雰囲気に溶け込んではいるようだ。

「な…何を言つんですか！ 次は移動教室なんです！ 実験室の場所が分からぬでしょ？ から、教えてあげようと思つたのに

「あ、本当に？ ありがとうー！」

空は俺に「じゃあなー」と言つと、学級委員長の下へ行つた。

俺と明は教室へと再び向かつた。

教室へと入ると、みんなの視線が俺へと向けられた。

さつき、あんな悲劇？ ドラマチックなことがあつたから当然だろ
う。

俺は教室に入ると、真つ先に由梨と田があつた。

「さつきは悪かつたな」

「ううん。大丈夫だよ」

俺は少し生徒に囲まれていて由梨に謝つた。

うん。

いつもどおり出来ている。

「昼休み、話せるかな？」

「…うん」

由梨に聞かれ俺は、少し間を置いてから返事を返した。

#40 いつかおつ（後書き）

空君の本名は立花 空です。

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつしたほうがいいと詰つアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いくらい人は、

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>

で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#41 今までの理由

「あの夜、私は家族と共に夜逃げしたのは…知っているよね？」

昼休み、俺は由梨に誘われて、中庭にあるベンチへと向かった。

「ああ」

「夜逃げのことを知ったのは、あの日…大地に電話をする数分前だつたの…信じて。決して、大地を騙そなんて思っていなかつたの」

『信じてやる』とか、『分かつて』とか、肯定の言葉を入れてあげるべきなのだろう。だけど、今の俺には言えない。

あの時の苦しみ…怒りが完全に消えたわけじゃないから。

「…それで、その後は？」

「私のお父さんは、ひつそりと企業を立ち上げて、死ぬ気で働いたの。そうしたらとんとん拍子で会社の株価も上がり、2年でそこそこの地位を手に入れることができたの。借金もしつかり返した。そこで、私は1年遅れで高校へ入学することを決めたの」

「色々大変だつたな。」と返事をすると、由梨は「クツ」と頷いき、再び話し始めた。

「…………私は大地に心残りがあつたの」

「え？」

俺はびっくりして、返事を返すと由梨は笑っていた。

「私が忘れてつて言つたのにね……一番、大地との日々を忘れられなかつたのは私なんだよね。」

俺は何も言えず、下を向いてしまつた。

「けど、お父さんは大地と同じ高校に行くことを反対したの。無理に勉強させられて有名進学校に入学させられて……辛かつた」

由梨は俺と同じように下を向いてしまつた。

俺は顔をあげて、何でこの学校に入れたのかと聞くことにした。

「この高校に来たつてことは……お父さんの許しを得られたからだろ

「うへ」

由梨は俺の目を見て頷く。

「説得するのに、約1年半もかかるなんて…私も思っていなかつたわ。有名進学校で学年10位以内よ？到底無理だと思つていたけど、大地のためなら…つて思つて。そつしたら、なんと3位とれちゃつたのよ。」

Hへへと笑う由梨はやはり昔の面影がある。

懐かしい…。

「やつとお父さんも諦めてくれて、私は今Hの学校に転入することができた。大地の下へ帰つてこられた…」

由梨はしつかりと俺の目を見ている。だけど…俺にはその目を見返してあげることが出来ない。

なんと言えばいいんだら？。なんと言ひ返せばいいんだら？。

結局、何もいえないまま時間だけが過ぎていった。

「大地は…」

数分間の沈黙をやがつたのは、やはり由梨のほうだった。

「大地は、今でも私の事…好きかな？」

好き？

そんなわけが…ない…だろう。

ない…だろう。

そうすると、俺は由梨のことを今どう思つている？

ただの元カノか？

俺が何も言えず下を向いていると、慌てて由梨は俺の肩を掴んでき
た。

「い、いいの！ 私の事をもう好きじゃないのは、百も承知。私が
ら忘れてって言つたんだもんね。大地は…忘れてくれたんだよね」

「…忘れられるわけが無いだろうが！ 何が…何が私の事忘れてだ
よ…」

「「めんね。」

「何で謝るんだよ。由梨が悪くなつて、あの出来事は仕方が無い事だつて分かつてゐる。でも…今の俺には、喜んで由梨を迎えることは出来ない。」

俺がそうこうと、由梨は「うん…だよね。ごめん。変な」と言つて出して「と嘆いて、去つて行つてしまつた。

俺はそれを追いかけのことも出来ず、ただその場にじっと座つているだけだった。

心のどこから、あふれ出でたくなる涙を抑えて。

#41 今に至った理由（後書き）

さあ、由梨の告白です。。。

どうなるか…雲と大地はどうなるでしょうか？

自分の文章能力が本当に足りない…。

バンバン訂正とか、いつしたほうがいいとアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい人は、

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてください。

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>

で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#42 マイハウス

「…へ？ ダンボール？」

俺は、あの後午後の授業をサボって家へと帰つていった。

なんとなく、由梨と会いたくなかったから。

下校中は、由梨の言葉が頭の中でぐるぐる回つていた。

『今でも私のこと好きかな？』

嫌いじゃない。怒りもさつきの会話で消えた。

だからと書つて、この変な気持ちを『好き』と例えていいのだろつか？

否、俺はもう雲を忘れることは出来ない。

そう…雲が好きなんだ。

色々考えながら家のドアを開けると、そこには今日朝、学校出できたときは違う光景があったのだ。

そこへ、Iの話の冒頭に戻る。

ダンボールが複数並べられていたのだ。

あて先を見ると、俺の母親宛になつてゐる。住所もここに間違いない。

……この複数のダンボールは何のためにおいてある？　という所にぶち当たる。

「ひとつ……覗いてみるか」

一番左側に置いてあるダンボールのガムテープを外して、ふたを開けた。

「これって……どつかで見たような

そこには、少し色が変色したと思われる人形があつたのだ。

どこかで見たことがある気がする。

どじだらわ。

他にも色々とぐつてこると、さつきのような気持ちになる物ばかり

だ。

デジヤビュか？

俺の脳の底からある記憶を拾い出した決定的な物がそこにはあった。

「あのときの…キー ホルダーじゃないか」

そこにあつたのは、小学校4年生のときに空に渡した星型のキー ホルダーがあつた。

『これは俺と空だけの物だから。』

そう言って俺は、空が父親と引越しをしていくときと、あの当時俺の宝物だったこのキー ホルダーを渡したのだ。

「空の…荷物か？」

ダンボールの中の物を見てよく思い出してみると、昔、空が使っていた物だった。

…ここに空の荷物が入つたダンボールがあるのは何故だ？

この家に住む？

すると、父親はびびつた？

もしかして、あの母親と再婚したのか？

いや、ありえない。

だつて…あの母親他の男と寝ていたし！

色々考へてみると、家のドアが勢いよく開いた。

「たつだいま～。大地、もう帰つてたんだあ」

そこには、のんきな顔をした空だつた。

「お、おかえり？　でいいのか…な？」

ウンウンと頷く空。

「そ、それより、なんでこの家にダンボールが？　と言つか、なん
で空がここにいるんだ？　今日色々ありますぐで、頭がおかしくなつ
ているから、分かりやすく説明してくれ。」

俺は息を整えて、聞く準備をした。

「あれ、聞いてないの？ 粪親父がどつかの馬鹿女との間に子供が出来ちゃって、俺は追い出されたっていうわけや。一人暮らしは無駄に金がかかるからって言われてえー」「

「俺が最後に見たとき、親父は確か38歳だったよな？ 今は46歳か？ そんな年で、よく子を孕ましたよな。

「そんな年で、よく子を孕ましたよな。って、思つただろ？ 僕もやつ思つたあ！」

「お前はエスパーか？」

空は、俺達と離れてから、喋り方と性格が変わって……ない……
昔からエスパー気味っぽい所があつて、のほほんとした性格だったからな。

「まあこれからこの家に住むのだらう？ 余っている部屋があるから、そこにダンボール運ぼうか

俺はひとつダンボールを持って、歩き出した。

空も俺の後に続き、ダンボールを持ってきた。

部屋を少し掃除して、荷物を全部出して、整理するのは夜9時までかかった。

ベッドやクローゼットなどの家具は、どうやら明日届くらしい。

俺は晩ご飯を空に作つてあげて、思い出話をしながら久しぶりに誰かと食べる食事を楽しく終わらした。

#42 マイハウス（後書き）

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい人は、

net_touki-net@yahoo.co.jp にメール

を送つてください

<https://plaza.rakuten.co.jp/m1q/84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。

宜しくお願ひします。

#43 修学旅行前

あれから何日が経ったが、3人で登校することが多くなった。

俺と空は…格好いい男子の部類に入るのだろう。

傍から見れば、雲が両手に花だ。

そういうえば、早々と空のファンクラブ？ といつものが出来ているらしい。

俺と違つて、人当たりもいいし、顔もいい。頭もよくて、スポーツ万能。

どちらかといふと、俺よりも空の方が主人公に向いている設定なのではないのだろうか？

登校中、後ろのほうから声がかかった。

「お、おはよっ」

由梨だ。

あの話をして以来…といふか、由梨がここに来てからは、昔みたいには接することは出来なくなつたが、案外普通…ぎこちなさは残つてゐるけど。

「由梨……おめでつ」

しかし、やつぱり少し抵抗があるのは仕方が無い。

あんなことがあったのだから。

それはやつと、俺達がこんなにも気まずく挨拶をしてこねとこの時に、俺の横に座る姉はとこりと、一方的に話しかけていく。

『雪の返答は、「うる」「うる」など、一〇文字にも満たないほどの短文。

それでも話しかけるとこり空の根性を俺は褒め称えよう。

……けど、俺の心のどこかでやはつ、嫉妬？　とこりものがある。

『雪ひ んはりある、今度の修学旅行のイベント向こうしたの？』

「カヌー」

しかも、こいつの間でか空が雪の事を『池上さん』から『やひやん』に変わっている。

なんてこいつた。

ちなみに、俺達は明日に修学旅行を迎えている。

イベントといつのは、その修学旅行の中で普段味わえない事をするのだ。

選択肢は確か…カヌーとマウンテンバイクとか。

他にも多数あるのだが、俺はどうしても霊と一緒にしたかったから、メールで『カヌーにしよう』と送ったのだ。

特に決まっていなかつたらしく、『OK』の返事返ってきた。

あの時、家の中で喜んでたら、空に「大地…どうかしたの?」と心配されたっけ。

修学旅行には自由時間といつものがある。

明と朋子の計らいで、その自由時間に霊と一緒に行動できるのだ。

修学旅行っていいー！

妄想に浸つていると、いつの間にか俺の体は学校についていた。

3組の教室の前では、靈とバイバイしなくてはならない。

一緒に帰るわけにも行かず、ここ最近はずっと2人きりとこう状況

が無いのだ。

なんとも悲しい状況。

メールをしてこないことが、俺のこの寂しさを紛らわしている。

電話をかけてもいいのだが、俺は空と違つて話すのが得意ではない。

だから、雲と電話しても10分ともたないのだ。

『雲の声が聞きたくて電話した』なんて、恥ずかしくて死んでも言えねえ。

そんな事をいった日には、雲に絶交されたり……して。

いや……！

そんなことを考えただけで、胸が痛くなる。

熱くなる……。

学校では、ずっと雲の事ばかり考えていた。

隣にいる明と話しているときだけ、俺に笑顔があつただろう。

空と一緒に家に帰っている途中、空が「買い物行かなぐちやー」と
言に出した。

「俺も行くよ」

「いい！ 大地は先に帰つてー！」

そいつついで、どこかへと行つてしまつた。

俺は空の言葉に甘えて、家へと足を進めた。

そして、家の前に到着。

…。

と、到着したのはいいのだが、家の鍵を空に預けっぱなしだった。

「空に電話しよつかな

携帯を手に持つて、空に電話…。

いや、せっかく買い物に行つてもうつたんだし、気分悪くなる」とを言つ必要は無い。

少し考えた後、俺は散歩に行くことに決めた。

向かう先は、あの川原。

10分もたつただろうか？ もうあの川原についていた。

「ううで…」

ここで、靈を助けたんだ。

あの時の俺は、荒れていたよな。

そう考へてみると、何故か笑いがこみ上げてきた。

「ククク…」

「…何笑っているの？」

その声の持ち主は靈だった。

「雲ー、エヘン…」
「？」

そこには、制服、三つ編みモードの雲がいた。

「え？ そ、そんなことどうでもここじゃない。大地は何故ここに？」

「俺？ 俺は…家の鍵が無くて」

そうこうと、雲はボソッと「私と一緒にか。」とつぶやいた。

俺に聞こえないよう言つたのかかもしれないが、ちゃんと聞こえましたよ、雲ちひやん。

「へえ、雲も家の鍵がないんだ？」

クククと笑いながら言つてやつた。

「ば、馬鹿！ 大地と一緒にしないでよ！ わ…私は、そう…散歩に来ただけよ！ 勘違いしないで」

「まあ、鍵ぐらこ誰だつて忘れるわ」

「私の話聞いてないでしょー！」

「親はいつ帰ってくるんだ?」

雪は観念したのか、ひとつため息をついていつ答えた。

「今日は……夜遅いの。1時ぐらいかな」

「え? 普通に遅いじゃん! それまでビーフする気だつたんだよ」

「そ……散歩?」

馬鹿かいこつは。

「電話してみた?」

俺が聞くと、大きく頷いた。

「それで?」

「遠いところ行っているから、私たちが帰つてくるまでお友達の家にでも居させてもらつて。って…。朋子は今日、予定があつて無理とか言つていたから、どうしようかなつて…」

…当てが無いってことね。

「…じゃあ、俺の家にくるか？」

…少しこやかに言ひ方になつたかもしれない。

#43 修学旅行前（後書き）

さて、題名どおり修学旅行前でしたわ
修学旅行前は、皆さんはどうお過ごしでしたでしょうか？
私は極最近ところにて、全く『修学旅行』のことを思い出せないですわ

次回は、修学旅行前夜の です。

自分の文章能力が本当に足りない…。
バンバン訂正とか、いつのまつがいいと書つアドバイスをくださ
ると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい人は、

net_touki_net@yahoo.co.jp にメール
を送つてください

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願いします。

#44 修学旅行前夜の告白

「ただいま

俺が雲を誘つた後、川原で少し最近のことを持ちだしした。

…そんなに話は続かなかつたけれども。

その辺は気にしたら負けなのだ。

そして家に帰るひじま、空も家に帰つていて、家に入れた。

「おかえり！ 大地…と…？」

空が少し不思議そつくな顔をしている。

それもそうだ。

俺の後ろには、あの雲がいるんだからな。

「ど、どうしたの？ 雲ちゃん」

「あ～、なんか親が居なくて、家に入れないとらしいんだ。そこで、

たまたま散歩していた俺が靈を拾つたって説

「 もうなんだあ 」 と、空は納得してくれたようだ。

「 おじやましまわ 」

律儀に靴をそろえてから、俺の家に上がった。

前、俺の家に来たときもしなかったのに。

空が居るからか？

いい子に…見られたいのか？

もしかして靈は…

あ～！ セメヤメ～ 今は靈がいるんだ。少しでも楽しもう。

「 霊ちゃん、いじ飯食べていきなよ。親さんは何時頃帰つてくれるの
？」

「 一時半 」

「 もうか。じゃあ、食べてこいなよ。俺のいじ飯結構大地に評判なんだからさあ 」

「シシと笑う空は、男の俺から見ても格好良かつた。

なんか…悔しいな。

「じゃあ、俺の家にくるか?」

と聞いた後、零は「えつ?」と少し困ったような顔をしたのだ。

この前、あんな事をしてしまったのだから、当たり前なのだけれど。

だけどなんだか悲しくなつて…胸が熱くなつた。

「ほり、空もいるから変なことはしないよ。安心して

俺のその言葉で納得したのか、外でそちらの誰かに絡まれるより、俺のほうがまだ安全と思ったのかは分からぬが、小さく一度だけ頷いた。

『 空がいるから』 とこうことで語ったのではないが… とこういふことはあまり考えなこよつにしたのも事実だ。

雪が家に来てから少し時間が経ち、 空と俺と雪で『 J飯を食べていた。

「 雪ひやんは、 なんでカヌーしたの?」

「え?」

「 せひ、 今日の朝言つてこたよね?」

「 なんか… 面白わづだから」

「 もつかあ。 僕もカヌーにすればよかつたなあ」

空と雪のその会話を聞いているだけで、 なんだか辛い気持ちになつてく。

心臓がちくちくするような、 そんな気分になつてしまつから。

「だ…ち？　だ…い…ち！」

「「つへ？」

「どうしたんだよ、ボーとしちゃって。大地は何にしたの？」

「俺？　カヌーだよ」

「カヌーかよ…！　俺と代わってくれよ。顔似ているんだし、バ
レないって」

「嫌だよ」

「けちつー…」

空には悪いが、俺は譲る気は無い。

だって俺は…零が好きだから。

「」飯も食べ終わり、その後は結構楽しい時間を過ごした。

家にあるゲームで零と遊んだり、いつもよりたくさん色々話せたし、
空の質問のおかげで零の事を色々知れた気がする。

好きな色とか、嫌いな食べ物とか、聞いたことも無かつたからな。

そして、1時じになり、俺と空は雲を送つてこへ。

雲を見送ると、帰りは空と一人きり。

今日あつたことや、楽しかつたことを話していくと、空がいきなり雲の話をし始めた。

「大地ひだ、俺が雲ちゃんを紹介する前から、雲ちゃんのこと知つていただろお？」

「え？」

「態度とか見れば分かるよ。その…大地は、雲ちゃんの事…好きなの？」

さつきまで笑つていた顔だつた空の顔が真剣な顔になつた。

その証拠に、足がぴたりと止まつている。

何故、その質問をする？

「あ、そんな…」とはないけど

「やつこいつど、空は俺に一度笑みを見せた。

「俺は、雪がやつの」とが好きだよ」

何故、俺に雪ひづ…?

これから、急展開の予感です。

一、二、三、四、五、六、七、八

もしかしたら、まだもう一章続くかも知れませんが。
修学旅行編スタートです。

自分の文章能力が本当に足りない……。

バンバン訂正とか、こうしたほうがいいと言つアドバイスをくださると本当に嬉しいです。

評価で言いにくい人は、

を送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/mlq>

宜しくお願ひします。

#45 修学旅行へ出発へ

「俺は、霧けやんが好きだよ」

その告白から、家に帰るまでは沈黙の時が俺達の間にあった。

しかし、家に帰つてからとこつもの、空せやんなことも無かつた
かのように俺に接してくれる。

…空は俺が霧の事をなんとも思つてないと思つているんだもんな。

俺達は明日の準備を終え、布団へともぐつこんだ。

そして、朝がやつてくる。

「だ～い～ち～」

ポン！ といづ音と共に、俺の体に痛みが走った。

「こつてえー。」

「やつと咲あたあ

「の痛みの原因は、やつせり空が俺の体を布団越しに殴つたら
しき。

布団越しでもこの痛わ。

さすがは俺の弟といつべきだらつか。

「朝」ははん食べるから、早くコンビングに来いよお

空はそつこうと、鼻歌交じりで俺の部屋から出て行った。

俺はとこつと、未だに残つてゐる痛みと眠氣、両方と戦いながらベ
ッドから降りていた。

着替えも終え、空の美味しい飯が待つコンビングへと足を運ぶ。

俺が行くのは、机の上には料理が並べられていた。

「やつぱ、空の『飯はつめえな』

「だろ？　だろ？　もつと褒めてえー。」

「シシリと笑うのがひとつも空の癖らしい。

その笑顔が、女の子の心を掴むとも知らずに使つてこのだらつか?

それとも、わざとなのだらつか?

いまいち、俺にはわからない。

ご飯も食べて、修学旅行に行く準備をして、いざ出発。

修学旅行へ。

集合場所は学校となつていて

どいつもく、学校からバスで空港まで行くらしい。

目的地は北海道。

9月下旬のこの暑い時期に北海道とはなんもありがたい話なのだ。

こつものよつに電車に乗り、学校へと向かつ。

次の駅では、いつもより大きい鞄を持った霧に会つた。

「霧けやんー　おひはよー。」

いつも最初に挨拶するのは空と決まつてこる。

「おはよー」

そして、最近の俺はとこつと、霧に挨拶もしていないので。

挨拶できる霧囲気を空が作ってくれないとこつか、なんとこつか。

とりあえず、挨拶をしていない。

霧はこつものよつと、俺達のよつに一切見向きもしない。

空はそれでもかまわないかのよつと、一方的に話をしている。

たまに、霧から返事が返つてくる程度だ。

「霧」

電車を降りて、学校に向かっている最中、俺がふいに轍の脇の前を呼んだ。

「何?」

俺は何も言わず、雲が持っている鞄に手をかける。

「な、何よー?」

「…持つてやる

雲は、すんなりと手を離した。

やつぱり、重かったのだろう。

「あ、落とさないでよ。」

「セレまで馬鹿じやない

しかし、俺の鞄ひとつと、雲の鞄…すげえ重い。

思つたよつ、雲の鞄が重かつたのだ。

よく、こんな重い鞄を持っていたな。

いつたい何が入っているのか知りたいぐらいだ。

学校に着くと、空に霊の鞄を渡した。

「もってやれよ」とこと、空は素直に領いて、霊と一緒に3組の所へと行った。

霊が去り際に、「あつがとう」と弦いたのは、気のせいではないと思つておこつ。

修学旅行編スタートです。

一応、この章で終わりにしたいなあと思つてたりｗ
発展が急すぎてごめんなさい。

これから、少しじょんとした小説になりますが、
どうぞよろしくおねがいします。

評価で言つにくい人は、

net-touki-net@yahoo.co.jp メール
を送つてくださいか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/m1q84s/mailboxform/>
で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#46 修学旅行へ雪の隣へ

「寒くねえか…？」

「寒い」

修学旅行の行き先は北海道である。

9月の北海道といつて、まだ暖かいのではないか？　と言ひついで疑問を持つだれつ。

しかし、雨が降っていて、凝るよつて寒い。

外の気温を掲示板で見てみると、2度と表示されていた。

「雨、やばくねえか？」

「やばー」

こんな会話をしているのは、俺と明である。

外を見る限り、嵐がきているのではないか…と思ひせどの大雨ぶり。

風も強くて、スカートであればパンツが見えるのではないか？　と

思つせぬ。」

「雲はどこか、『H』と一緒に楽しめり…とは見えないが、喋つている様子。

そんな姿を見て、俺は大きくため息ついた。

「嫉妬か？」

「ち、ちげえよ。そんなんじや…ねえつて」

嫉妬…か。

「空ひて、雲ちゃんの」と好きなんだろ?」

「えー、知つているのかー…?」

「顔に書いてあるだる」

空の顔をよく見てみる。

…顔には一切文字は書かれていない。

「『H』にも書いてねえぞ?」

「そのボケはベタす、あ！」

明がそいつと先生が「一組からバスに乗りますよ」と囁いていた。

俺達は先生の指示に従い、バスへと歩いていく。

雪は……まだ空と話していた。

バスの中では、みんな好き勝手にしている。

寝ているやつもいれば、トランプを出して遊んでいたり、カップル同士でイチャついていたり。

雪と離れている俺にとっては地獄のようである。

そのうひ、田的田であのひの場所でバスはぴたりと止まった。

「すっげえ！ 馬がこじまー。」

クラス内の誰かがそう叫ぶ。

その言葉につられて、みんなは窓の外を覗いた。

俺はといつと、明と一緒にバスを一番に降りる。

修学旅行のしあとに運よく書かれていて、運よく俺が持ってきたこの折り畳み傘を片手に持ち差した。

「これが自然の…におことこのものか」

「雨くせえだろ」

俺がせつかくこの自然に感動をしようとしていたのに、明が無駄なツッコミを入れてきた。

「…そうだな。」

まあ、否定はしないけれども。

俺達がバスを降りて数十秒後、雲の乗るバスが牧場に到着した。

ふと、そっちを見ると、バスの中で隣同士で座る雲とH。

…。

その光景を見た俺の心の中で、何かが暴れだしたのだった。

見つめていた先の光景に気付いた明が、無言で俺の肩をポンポンと叩いた。

俺は振り返り、歩き出した。

そして、牧場の後に行つたところでも、その次のところでも……靈の隣にはいつも空がいた。

「へんつー。」

近くにある壁を殴る。

彼女の姿を見ることが…嫌だ。

つらい。

苦しい。

そして、座り込む。

科学館の外だけれども、立つてはいられなかつた。

霧のような雨が、風に乗つて俺にぶつかつてくる。

その雨が顔に当たると同時に、何かが俺の頬を辿り地面に落ちた。

この光景は、泣いているように見えるのか。

否。

：俺は泣いているのか。

人目を気にせず、俺の涙は外へと出でくる。

幸い、まだ学校の連中はこの科学館の中だ。

「大地…」

泣いていると、前方から明の声が。

名前を呼んだ後は、何も話さない。

俺はただ黙つて下を向いた。

それでも、俺の涙は止まつたりしなかつた。

「ハハ…ハハ…」

俺の口から少し漏れる泣き声を、この雨の音で消し去ってくれないだろ？

この辛い気持ちを、この雨水で洗い流してくれないだろ？

#46 修学旅行へ雲の隣へ（後書き）

（2008年1月）

さてと

何故か大地が涙。

これから大発展よそうです。

評価で言いにくい人は、

net-touki-net@yahoo.co.jp にメール
を送つてくださるか、

<http://plaza.rakuten.co.jp/mlq84s/mailboxform/>

で、匿名でのメッセージもできます。
宜しくお願ひします。

#47 修学旅行へ空の告白へ

あれから、皆が科学館の外に出てくるといひには涙も止まってくれていた。

騒ぐ気分にもなれず、俺はバスへと向かう。

明は俺の後ろを心配そうな顔をしてついてきてくれた。

「大地…何かあったの？」

そう話しかけてきたのは、由梨だった。

「…なんでもねえよ。気にするな」

心配してくれる由梨の言葉を軽く流し、バスの中へと入っていった。

バスの席に着くと、今更だが由梨の席が俺の後ろだとこいつことに気が付く。

今まで気づかなかつたのに、どうして今気付いたかつて？

それは…由梨が話しかけてきたからだ。

「本当に大丈夫？ 体調が悪いなら薬もりつけてよつか」

「いられえ。本当に大丈夫だから」

「でも……」

「大丈夫だつて言つてんだろ？が！！」

俺がそう叫ぶと、バスの中で好き勝手していた連中どもも静かになつていた。

…何やつてんだ俺。

八つ当たり？ だつせえ…。

心配してくれているのに、どうしてこんな態度をとつてしまふんだろ？

分かつっているけれども、俺の心は今にも壊れそうなほど何かに締め付けられていた。

最悪なことをしてしまったとは分かつている。だけど、由梨に謝ることはできなかつた。

俺は明の隣で、ただ黙つて外を見ることしか出来なかつた。

しばらくすると、バスのエンジン音が消えた。

びつやからホテルに着いたようだ。

今日はこれで終わりということなのか。

俺はバスの中にある自分の荷物を持ち、ホテルへと入っていった。

中に入ると、先生が「とりあえずクラス」とに整列をさせて、部屋別に鍵を渡していった。

一人部屋なので、俺はもじろんのこと明と同じ部屋を選択した。

鍵を受け取ると、俺と明は一番に部屋へと向かつ。

先生が注意事項を言つてゐるが気にしない。

「どうせ分かりきつてこる」とだ。

そんなことを言つなら、小学生相手にでもしてや。

面倒なことをしていらっしゃるかつづの…

違うんだ。

そんなことじゃない。

俺が、あの場所に居たくないのは…雲と空がいたから。

やつぱり一人を見てるのはやっぱり辛い。

「うわあー 案外広いなあー！」

部屋のドアを一番に開けたのは俺だ。

明に心配をかけさせないよう、テンションを少し上げてみる。

「大地…」

「見てみろよ、あれー。中庭なんてあるぜ。こういうホテルって
飯も豪華なんだよな！ 7時だけ？ 30分後だからホテル内を
回つてから行くか」

出来るだけ笑顔で。

「そ、そうだな！ 行くか！」

明もいつもと同じ笑顔を見せて賛同してくれた。

「じゃあ、荷物置いていくぞー。」

俺と明は荷物を置いて、部屋のドアを開けた。

部屋のドアが閉まるごとに、ガチャつといづ音が聞こえる。

…ひやひや

「オートロックかよ

オートロックのようだ。

しかし、鍵は部屋の中。

「先生に頼んで、開けてもらひつか

俺がそうこうと、明と一緒に階段を下りて行くことに。

やつぱり、注意事項はしっかりと聞いておくべきだった。

男子の階は3階で、ビルやら女子が2階のようだ。

俺達が2階から1階に降りみんなひよるじき、それに朋子と霊…そして霊の鞄を持った空がいた。

3人は楽しそうに会話をしながら、1階から階段をあがてくる姿がちらつと見えた。

俺は明と話しながら階段を降り始めて、どうしても霊達のほうに意識が向いてしまう。

重力に逆らわずこひとつ階段を下つるゝとい、元といふと、霊との距離がどんどん縮まっていく。

このまま行くと階段の中間地点で、俺達はすれ違う。

しかし、結局すれ違ったのは中間地点から7段ほど上の場所だった。

あきらかに、2階付近。

まだ3分の1も進んでいないであるうつ場所ですれ違った。

なぜなれば、俺の足がそこで止まっていたから。

こんな会話が聞こえてきたら、止まらずにはいられない。

「空飛ひて、あつと櫻と一縷に西るる

朋子がわいつらひと、咲ほ「まあ」と女の手を離させむつな笑みを作つてこね。

「櫻の事好きなんでしょおー。」

「ひよ、朋子！ 何言こと出かのー。」

朋子がからかひまつた声と櫻の荒てる声。

そして、次に空の声が聞こえてきた。

「櫻けんの事好きだよ？」

空がそつこつと、櫻はピタッとして、また息を吹き返したかのように歩み出した。

「あ、空も…向まつてゐるのよ

恥ずかしそうにして顔を赤らめる。

…そして俺の思考すべてが停止した。

零のその顔をみた瞬間ある確信を俺は持つてしまつたから。会話を聞かれていると知らずに、零は恥ずかしそうに視線を空から背けていた。

背けた視線は俺のほうへと徐々に向き、最終的には目が合つた。

「だ、大地…」

零がそう弦じたのははっきりと覚えていい。

そして、俺の横を走つて通つていつたのも覚えている。

しかし、後のことま全く記憶に無い。

この間にか俺は走り出して、ホテルを飛び出していた。

この寒い雨が降つてゐる中、何も持たずに…。

#47 修学旅行へ空の告白へ（後書き）

本氣で大地をいじめています。
とても「コメディー」という枠からそれていってます。
申し訳ない（ノ・ヽ・ヽ）ヌウ…

#48 修学旅行へ心の崩壊へ

「嘘……」

外へ出ると、車の走る音と囁きが地面とぶつかる音が聞こえてきた。

声にならないうまな音で『嘘』と発音されてくる音は囁きと車の走る音で消されていく。

「嘘……」

もう一度名前を呼んだ。

名前を呼んだといひで、何も変わらないのは分かっている。

俺に降りかかる雨は涙のように体全体にへばつてしまっていく。

そして傷がついた俺の心の中へと入り込んで、俺に痛みを味わせた。

その痛みに負けて、涙がどんどんとあふれ出していく。

「馬鹿野郎」

その声は後ろのせりから聞こえてきた。

声に反応して後ろを振り向くころには俺に降りかかる雨はなくなり

ている。

「あ……明」

「風邪引くや?」

明は持つてきた傘を俺の頭上で差す。

「う……ん」

「まひ、部屋に戻るぞ? 鍵ももひったし」

そんな優しさを持つている明に俺は従うしかなかつた。

涙は押さえ切れないまま、声は出せないにして部屋へと戻つていつた。

途中、先生に心配されたが、明がなんとか誤魔化してくれたようだ。

俺は逃げるよ^リうに部屋へと戻つたから、じつやつて誤魔化したかは知らないけれども。

明はドアの奥で倒れている俺に「シャワー浴びろよ」とせかす。

俺は立つ氣がしなかつたが、明に半ば強制的に立たされ服を脱ぎ風呂場へと行った。

シャワーヘッドから温水が俺に降りかかる。

れつきの冷たい雨とは違い、どこか俺を癒してくれる要素があった。

シャワーから出る水の水圧に耐えられなくなつた訳ではないが、俺はその場へと座り込んでしまった。

暖かい水が俺の顔に降りかかる。

そのまま少しふーとしていると、風呂場のドアが開いた。

「飯…食って行くか？」

当然そこにはいるのは明だ。

心配そうな顔をしている。

俺は無言で首を横に振った。

「わかった」

ドアが閉まるといは息を吹き返したかのよつて、その場にたつた。

そしてシャワーの水を止め、体を軽く拭き服を着てベッドへと足を進めた。

部屋全体を見渡しても明がいない。

どうやら、飯を食べに行つたようだ。

ベッドの上での伏せの状態になると、部屋のチャイムがピーンボーンと鳴り響いた。

けど今の俺にはそのインターホンを鳴らす主と会話をするなどの余力は残っていない。

しかし、次に聞こえてきた声で俺は不意に立ち上がった。

「私

俺はドアの前に立ち、ドア越しで返事をする。

「何?」

「大地、『めん』

謝るな。

「別に……悪くない」

「だとしても……」

「大丈夫だから」

ドアの向こうにいる人は少し黙った後、こう言った。

「顔見て話したい」

それは困る。

今、お前の顔を見たら抱きついてしまう。

そんな」としたら…

「駄目……だよね」

悲しそうな声が、ドア越しに聞こえてきた。

「俺に好きな人いるの… 分かってるよね？」

「…うん」

知つてこると思つてた。

彼女は昔から、俺の感情のこと一一番に気付くから。

「分かってるなら、一人にしてほしい」

その場から離れようとすると、「大地…！」と呼ぶ声が聞こえた。

「私がいるじゃない…」

「由梨…」

そうドアの向こうにいる由梨なのだ。

雪じゃない。

もはや、彼女の声は泣いているように聞こえる。

どうしても放つておけなくて、俺はとうとうドアを開けてしまった。

そして、その場に倒れこんでいる由梨を俺は抱きしめてしまった。

その光景を目に見られていたといふことを知るのは、もう少し後の話。

#48 修学旅行～心の崩壊～（後書き）

本当に、申し訳ない。
こんな展開になってしまって…。
もう少し、辛抱のほどよろしくお願いします。

#49 修学旅行～一人の夜～

「『めん…』

抱きついた後、俺が最初に言葉を発した。

「抱きついで、『ごめん』

由梨は涙を流しながら驚いた表情で顔を横に振っているけど、やっぱり駄目なものは駄目なのだ。

…けど、抱きついたことによって、なぜか心が少し軽くなつた気がする。

少し沈黙をおき、俺は話し始めた。

「俺、好きな人いるんだ…」

だから由梨とは、もう戻ること出来ない。

そつ言おうとしたとき、由梨の言葉が俺の言葉を遮った。

「石上霧ちやん… でしょ？ 3組の」

そこまで知っていたのか。

…なんという情報収集能力だ。

「…昔から大地は顔に出やすいの。」

涙も止まつたのか、ニコッと由梨は笑つた。

「だけど、私は…諦めたくない。大地の事が好きだから」

俺は何も言えず、ただ黙つて由梨の言葉を聞いていた。

「…心配だったの。今日ずっと大地おかしかつたから」

「由梨…」

「余計なお世話だよね。『めん…』

そう言つて、下を向いてしまつた。

悪くない。

由梨は悪くないんだ。

「謝るなよ……」

「うん」と頷いて由梨は無理やり一口笑と笑いながら俺に「元気出してねー」とこうと、走り去つて行つてしまつた。

ドアを閉め、俺はベッドの上で寝転んだ。

しばらくすると、ドアの開く音がした。

びつやら明が帰つてきたようだ。

「大地、起きてるか？」

「ひむ」

俺が返事をすると「そつか」と呟いて、何かを机の上に置いた。

「飯、少し無理言つて持つてきちゃつた。ちょっとは食え。元気でねえぞ?」

「ありがとう」

素直にお礼を言つて、『ご飯にありついた。

「大地、 雪ちゃんだけどな……」

「大丈夫だから」

雪の事は聞きたくない。

せっかく、心が少し軽くなつたといつの『』。

「大地……」

「そ、それよりも、『ご飯やつぱり豪華だつたな！ うめえ。持つて
きてくれてありがとよ』

俺はできるだけ笑みを作つて明にそいつた。

しかし、明は真剣な表情で俺を見ている。

「何があつたんだよ？」

「いや……その……」

明、唐突過ぎるだ。

少しほ前置きとこつものを持つてこよひよ。

「なんだ、お前は黙つてんだよ…俺達、心友つて言つたじゃねえか」

「明…」

拳にグッと力をいれて、明は腕を振り上げた。

殴られる。

そう思つて、俺は目をつぶつた。

コシン。

その音は、明が俺の頭を殴つた音。

いや、つづいた音といったほうが正しいか。

「正直に話せ、この野郎が」

「コシと笑う明は、いつもの明だ。」

「あのや…」

俺は、空が俺に告白していく話かい、せつときの空が雲に告白すると
ここまで順を追つて話した。

「やつか…」

大体の内容を理解したであらうが一番初めに発したのはこの言葉
だった。

そして、続ける。

「けど、その話だとまだ雲ちゃんは返事をしていないんじゃないかな？」

「でも… …でも、あの表情は…」

あの表情は、恋をしてくる顔だった…。

「大地、少し落ち着け。雲ちゃんは空に好きだと言ったか？　お前
のことを嫌いと言つたか？　もし、お前の言つとおり、雲が空を好
きだとしても、奪い取ろうとは思わないのか？　そんなネガティブ
な思いを捨てて、一回しつかりと雲ちゃんと話してみる。今日の飯
の時だつて、わざわざ雲ちゃんが俺に『大地、大丈夫？』って心配

して聞いたんだぞ？　望みを捨てるなよ

明はそのまま終ると、俺が食べ終わったご飯の皿を手に取った。

「明日は、イベントがあるんだ。雲ちゃんと一緒にカヌーを選択しあんだろ。この関係を開拓するいい機会じゃねえか」

「チヒ笑った明に俺は「ありがとウ…」と呟いた。

#50 修学旅行へ断固無視へ

修学旅行2日目朝。

昨日とはうつって変わって、雲ひとつ無い晴れ晴れとした空になった。
気温もそこそこ暖かくて、カヌーをするにちょうど良いぐらいだ
らう。

俺達はホテルを出る準備を終え、バスに乗り込んだ。

バスは「クラス」とに乗るのではなく、イベント事に分かれて乗ることになつていて。

パツと見る限り、俺が乗るカヌー組みのバスには20人ほど乗つて
いるようだ。

中には雫の姿もあつた。

「あ、大地君！ 明君！」

そう叫ぶのは、雫の隣に座つている男子だ。

人目を気にせず、手をブンブン振つている。

不良として恐れられている俺達の名前、しかも『君』で呼ぶ男子に

バスの中の人たちの視線が集まつた。

そんなことを気にせず、朋子は俺達に話しかける。

「私たちの前に座りなよ！ ね？」

いつもどおり朋子はテンションが高やつだ。

しかし、隣にいる雪は…「じとなく元気が無い様子。

気のせいかな？

…いや、俺と会うことが気まずいのだらう。

「おひさまよ、朋子ちゃん、雪ちゃん」

雪たちの前の席に着くと、明がいつもの爽やかスマイルで挨拶をする。

「おはよう 明君！」

「おはよう」

朋子が返事をし、その後に雪が挨拶をする。

俺も……挨拶を。

「おはよー!……靈」

俺は、何故か靈限定だ。

「……」

“うやうやしく、今日は無視のようだ。”

前までは、朝の挨拶を無視されることが多々あったが、最近は挨拶をしてくれていた。

なのに、今日は挨拶をしてくれない。

悲しいぞ！

俺はそのあと、何も問わず明が座った席の隣に腰を下ろす。

後ろにいるのは靈だ。

どうしても、神経が後ろのほうに行ってしまって、なかなか心拍数が下がらない。

つまり、緊張しているのだ。

らしくない。

そのまま、目的地に着くまで俺は無言のままだった。

「おーーー。」

バスを降りると、明が誰よりも早く声をあげた。

そこは自然といつ葉がぴたりあいそうな川と森が見える。

どうやら、ここでカヌーをするらしい。

バスを降りたところから少し進むと、カヌーらしきものが見えてきた。

そこで名前順で整列をさせられて、カヌーを教えてくれる先生の話を聞くことに。

すると『イケヤマ』の俺と『イシガキ』の

つまり前後になるわけだ。

前に座る二年生がどうしても気になら。

そんなことを考えてくると、先生がよからぬことを言つ出した。

「今日は一人一組でのつもりであります。いちいち決めるのが面倒なので、前後の子で乗つてもらひことにしようか

いつのを忘れていたけれども、零の前には先生しかいない。

つまり、「は…俺と零が乗るわけ

とこいつ」とは…俺と零が乗るわけ

「で…ええー？」

俺がいきなり発したこの意味不明な言葉により、みんなの注目が先生から俺へと変わる。

「どうしました？」

「なんでもねえよ」

俺は恥ずかしくなつて、顔を背けた。

先生の説明も終え、実際に乗ることになった。

雫は前に、俺は後ろに。

危険だからと、熱心に先生があれこれ教えてくれた。

まあ、前にいる雫が気になつて、半分も頭に入つていなかつたが。

「じゃあ行くよ」

そう言つて、先生がボートを押していく。

そして、少し川の流れに乗ると、手に持つてゐるパドルで水をかき始めた。

この川は普段から水の流れが非常に遅く、学生たちがやるのにまつてつけの場所だという。

氣を抜いたら、すぐボチャンらしいが。

無言のまま漕ぎ始めて10分ほどがたつたのだらつか？

この沈黙に耐えれず、俺はやっと口を開くことが出来た。

「し、雲…カヌー面白い?」

「……」

「…雲?」

弋うやら無視りじい。

この状況で緊張のあまり、昇天しそうな俺この扱いはひどいものだ。

勇気を出して話したといつのこと。

その後も少し話しかけたが、全てスルー。

結局、今日は一言も話してはくれなかった。

…どうして？

無視をするんだ？

空を好きになつたから？

やつぱり…やつぱり、俺のことが嫌いになつたのか。

俺は、ホテルの布団の中、明にバレないよう声を出さないように泣きながらその日の夜をすごした。

#50 修学旅行～断固無視～（後書き）

最近、大地が泣きまくっています。
すいません。
男の涙は…ね。

#5.1 修学旅行へ口論壁へ

修学旅行3日目。

予定では、山登りをするらしい。

この山登りの時間も、自由時間と一緒に、明と朋子の計らいのもと、
靈と一緒に行動が出来るようになってもらつた。

そのことを最初に聞いたときは、明と朋子が神様に見えたのだが、
今の俺にとっては余計なお世話である。

『靈と顔を合わしたくない』これが俺の本音。

正常でいられる気がしない。

靈だって同じだらう。嫌いな俺と一緒に居ることを好まないはず。

こいつのこと……別と変わつてもいいつか。

そんなことを考えてこると、明に引っ張り起された。

「ここまで寝てんだ」

「今日…休む」

明は大きくそこでため息をついた。

「昨日、霊ひやんに無視されたことが、そんなにショックだったのか？」

ギクッ。

いきなり核心をついてくるところが明らかしい。

と云うか、何で明は知っているんだ？

「そんなことで諦めるほど、お前の恋心は弱いものだったのか？」

「あ、明に…何が分かるんだよ」

俺は意地になつて、言つ返してしまった。

明は悪くないのに、心配をしてくれているだけなのに。

下を向くと同時に、俺の頬に何かがぶつかる感触が。

いや、これは殴られたのだ。

「こつて……」

「目、覚めたか？」

明日の日を見ると、本氣で起つて居る模様。

「覚めてるよ……」

「じゃあ、服着て出発するぞ。もつ一度殴られたかったら、そのままでもいいが」

「わ、わかったよ

俺は嫌々ながらも服を着て、ホテルを出発した。

本日の山登りのスタート地点は、さつきの山のホテルの傍にある。

そこまで歩きで向かうわけだ。

山で死ぬまじ歩かなければいけないの、こんなところで体力を消費されるのか。この学校は。

そして、数分が立つ。

歩くのが飽きたなと思つて、山登りスタート地点であつた場所に着いた。

やばい。

そろそろ雲と顔を合わす。

少し、憂鬱になってきた。

俺はなんとか、雲がいるであろう場所を見ないようにして、俺は先生の説明を聞いている。

その説明も全く、頭に入つてこないが。

「じゃあ、この前分けたグループで山登りをするからね！ まずグループ」とで集まつてちょうどい

先生がそういうと、ざわざわ騒がしくなつて、みんなが動き出す。

俺はその場に座つたままでいる、俺のグループである3人が集まってきた。

大地、朋子、そして…雲。

「大地、いくぞ？」

明に思いつきり引っ張られ、無理やり立たされる。

そして、先生の下へ。

どうやら、出発をする前に点呼をとらなければいけないらしい。

「気をつけて行って来い。何かあつたら、すぐ近くの先生に言つん
だぞ」

先生のその言葉に明が「はあい」と答えて歩きました。

先頭を歩くのは、いつもと同じ明。

気を利かせてか、なんだかは分からぬが、その隣に朋子がいる。

つまり、その一人の後ろにいるのは俺と雲といつわけで。

ありがた迷惑といつか、なんといつか。

俺も零も一緒に居たくないのよ。

本当に、勘弁してくれ。

「だ、大地…その『めんね』？」

零がいきなり話しかけてきた。

何を「『めん』なんだ。

俺を昨日避けたことか？

嫌いになつたことか？

それとも、俺の気持ちに答えられないことを？

「別に」

俺はふつぜんに答えた。

別に、今更…。

空と零なら幸せこやつてこけるだらけ。

「や、そういうえば空がね！」

空の話題か…。

そのあと、雲が何かを話しているが、俺の耳には入ってこない。

いや、入らないようにした。

だって、馴れ初め話なんて聞きたくない。

「大地？」

「何？」

「話、聞いてる？」

聞いてない。

そう言おうとしたけど、言葉にならなかつた。

そのまま喋らないまま無視状態に。

そうすると、雲も黙り込むような形になつた。

「」の辺で、お昼食べようか

明がそういうと、俺たち4人は足を止める。

俺は、鞄から先生に渡されたお弁当を取り出した。

そうすると、明が持ってきたうつシートを広げて、3人が座つて
いることに気がつく。

その輪にどうしても入ることが出来なくて、少し離れた所で俺は弁
当を食べ終わつた。

そして、再び4人で歩き出す。

しばらくすると、頂上らしき場所に着いた。

「おーっ。」

明がこの光景を見て、叫びだした。

いつも俺なら、ああやつて叫んでいるんだろうな。

「す、いねえ……」

その次に朋子が言葉を発した。

霊は、朋子の隣で楽しそうに話をしている。

俺は、その光景を後ろでじっと眺めているだけ。

はあ、早く帰りたい。

そんなことを思いながら数十分。

頂上にいる先生に点呼をつけ、そのまま山を下ることになった。

帰り道。

いつもよつ、積極的に霊が話しかけてくる。

しかし、俺の返事はほとんど無に等しい。

返したところも「うう」など、こつもの霊バージョンだ。

そんなことをしていると、霊が再び黙りだした。

そうだ。

やつじてゐる。

お前は、俺じゃなく空と樂しく話すべきなんだ。

「だつ、大地の馬鹿つー。」

いきなり、雪が叫んだ。

「やうか

「何で…何でそんな態度なのー?…せつかく私が話かけてるのにー。」

『せつかく?』

その言葉に俺の思考回路の何かがちぎれた。

「別に、誰も頼んでいねえだろ！ 霊は空と楽しく話していればいいだろ！」

「なんで、空が出てくるのよ！ 大地なんか…大地なんか、由梨さんと仲良くなればいいじゃない！」

「な…お前じゃ、何で由梨を出すんだよ！ 意味わからんねえ」

「だつ、抱きしめてたじやない！」

霊のその言葉に俺の思考回路は一瞬停止した。

何で…知っている？

あの日の夜のことを。

「お、お前…覗き見してたのか？」

「違うわよ！ み、見えただけよ。もつ…大地なんて知らない！」

霊はそつまうして、来た道へと戻つて行つてしまつた。

「お、おい、大地！」

「…俺は帰る

俺は、追いかけることもせず、そのまま山を下りはじめた。

#51 修学旅行へ口宣壁へ（後書き）

さて、そろそろ終盤も見えてきました。
あと6話？ 7話？ ぐらいで終了予定です。
もう少し短くなるかもしれません。

#52 修学旅行へ行方不明

山を下り終え、俺はホテルのベッドで寝転んでいた。

なんだよ。

なんなんだよ。

山で妙に話しかけてくれていたのは、『空と付せぬつかう、諦めて』って言つタイミングでも向っていたんだね。』

…そんな話、今更俺には関係ない話だよ。

あんな奴…もう知るもんか。

空と、仲良くしていれば良いんだ。

俺を…放つておいで。

「クソッ！」

「つづぶと回時」、「ドン」という鈍い音が響いた。

俺が右手の拳でベッドを殴ったのだ。

「知りねえよ…」

その右手をそつと皿の前まで持ってきて、視野を隠した。

どんどんと、手の平が濡れてくるのが分かる。

また、俺は泣いているのか。

「だつせえ…」

どうやら、じつこつ状況になると、独り言が多くなるらしい。

そんなことを考えていると、勢いよく部屋のドアが開いた。

「大地…！」

明だ。

息が荒い。

びつからぬひこうへ來たひしき。

「なんだ？」

「靈ひやんが……」

「靈が……どうした？」

ハア、と大きく息を吸うと明は真剣な目でいつ呟つた。

「居なくなつた」

「い、居なくなつた？」

「どうこう意味だよ。」

「え？」

俺が聞き返すと、明はもつ一度息を整えて

「居なくなつた。：行方不明なんだ。あの後、少し一人にさせてや
るつって俺が言わなかつたら……」

そう言って明は座り込む。

明、何が言いたいんだ？

「お、おい！ 何があつたんだよ！ 分かりやすく言え！」

「大地と零ちゃんが喧嘩して、零ちゃんが何処かへ行つただろ？
あの後、俺が少し一人にさせてやるうつて朋子ちゃんに言つて、あの場所で待機していたんだ。いくら待つても零ちゃんが戻つてこないから、下つてくる奴等に、零ちゃんを見かけなかつたかつて聞いたんだけど……」

「誰も見ていないつてオチか」

そんなこと、あるのかよ。

遭難なんでものは、アニメやドラマの中だけにしてくれ。

「とつあえず俺は、雲を…」

：探していく？

俺じゃなく、空に頼めば良いだろう。

もし『運命』といつものがあるのなら、空が見つけたるはずだ。

だけど…それでいいのか？

「……雪を探してくる。明日のことを先生と空に語り合ってきてくれ」と

たとえ、遭難者が雪じゃなくても、探しにこころべきじゃないのか？

明の「分かった」の言葉を聞いた後、俺は猛スピードで部屋を飛び出した。

どうか無事であつてくれと心の中で祈りながら。

山登りスタート地点にとつあえず俺は向かつた。

そこには立つてこる先生に聞くと、どうやら雪はまだ降つてきていな
いらしい。

『何があつたんだ？』と聞かれたが、ことなどひつもつも無むれりつ
な先生に説明する暇が惜しい。

「明に聞いてくれ！」

そう言って、俺は自分が降りてきたルートを再び走り出した。

人目を恥ずかしがらず、俺は大声で零の名前を呼んだ。

しかし、返つてくる言葉は無い。

こんな状況になつても、無視するほどあいつも馬鹿じゃないだろ？

「零、いねえのかよ！」

探し始めて、もうそろそろ2時間が経過しようとしていた。

その時ふと足元を見てみると、人気のないほつへ進んでいつている足跡を見つけた。

どうやら、一昨日の雨のおかげで陰になつていてる部分の地面がまだ水に濡れていようがだ。

しかも、この足の大きさは……。

「零かもしれない」

俺はそう眩いた後、その道を進んだ。

その中を進む「と」と、どんどんと道が狭くなつていいく。

「おひとー。」

進んでいると、いきなり足場が無くなる場所があつた。

ビuffersやら急な坂になつていて、「ひしー。」

「あつぶね

そう眩いて、下を覗くと人影がちらりと見えた気がした。

まさか、零?

そう思い、零の前を叫ぶ。

すると、反応があった。

「大地?」

その声の持ち主は、確かに零だった。

#52 修学旅行～行方不明～（後書き）

ベタベタの展開です。

もう少しで最終話となつておりますので、
最後までお付き合いでお願ひします。

#53 修学旅行へ強制連行へ

「 霊かー!？」

俺はそういうながら、急な坂をゆっくりと下りていった。

一番下まで行くと、少し大きな石に腰をおろしている霊がいた。

「 大地!」

「 霊ー。」

そう叫んで、俺はギュッと霊を抱き寄せた。

「 大丈夫か?」

「 う…」

その反応からすると、どうやらどうとか怪我をしてるらしい。

「 どうだ?」

零はもう一度石に腰を下ろし、そつと右足のズボンを少し上げて、足首を俺に見せてきた。

「ひでえな

そういう腫れでいる。

骨折とまでは行かないが、ビツやから捻挫をしてこらげしー。

「だ、大丈夫！」

そつ言ひの足をギュッと握つてやると、小さく『痛ッ』と呟いた。

「馬鹿か。無理するな。今、助け呼んでやるからな」

そう言って、俺は右ポケットに手を突っ込んだ。

「あれ？」

「無い」

確かに朝の山登りの時には入れていた携帯が、ポケットから消えていたのだ。

「馬鹿じゃないの」

「せっかく助けてやったのに、馬鹿よばわりは無いだろ？」「

「別に、助けてなんて言つてこません」

そう言つて霧はそっぽを向いた。

「この…。

「そうかい、そうかい！　じゃあ俺は一人で帰りますよ！　空でも呼んで、この人目につかない場所でイチャイチャしていればいいだろ？が」

「だ・か・ら・なんで、大地はいつも空の名前を出すのよ…　大地なんか、早く由梨さんの下へ帰つてあげたほうがいいんじゃないの！」

「やうやせてもらいますよ！」

そつぱつへ、俺は立ち上がり去つてこりつとした。

その時、再び雪の『痛ツ』といつ言葉が耳に入った。

くわつ。

なんてお人よしなんだ、俺は。

「早く、乗れ」

俺は再び雪の下へ寄つて、腰を下ろしあんぶが出来る格好になった。

「ば、馬鹿じゃないの！？ 恥ずかしいじゃない！」

「恥ずかしいのか、ここで死ぬのかどつちがこい？」

「死ぬほつがマシよ！」

はあ、この女はどこまでも…。

俺は雪の手を持つて、強制的におんぶの格好になった。

「な、何するのー。降ろして！」

「却下」

「も、もう……」

諦めたのか、俺の腰の上で暴れるのをやめた。

とりあえず、この急な坂を上るしかないのか。

一步踏み出してみる。

……なんか無理そうだぞ。爾でドロドロになった地面に足がとられそうだ。

俺は別ルートが無いか探してみる。

……無い。

はあ、と大きく息を吐いて俺は意を決した。

急な坂に挑戦だ。

雪の重いプラス地面の不安定な坂を、この強靭な太ももでなんとか上りきった。

そして、あたりを見渡すと真っ暗になつていいことに今更気が付く。

周りで何も足音がしないこと、「ま、ビーフやら搜索をしていないよつだ。」

そのまま正規ルートに戻り、俺はもう一度雲を背負い直した。

「大地……」

俺の背中で何か言おうとしている。

「…何?」

「あ……」

「何だよ

俺がもう一度聞くと、大きく息を吐いて「ありがとうね」と呟いた。

この言葉を聞けるのも、あと何度あることか。

こいつをホテルまで連れて行つたら、充分保険の先生が雲の面倒を見るのだろう。

そして、そのあと今までと同じ、空のもとへと行つてしまつ。

：今度から学校へ行くときは、電車の時間を変えなきや駄目だな。

俺はそんなことを考へながら、「気にするな」と答えた。

そして、雲を背負つて歩く」と一時間、なんとかホテルまで着いた。

そこには、先生と明、朋子、そして空が立っていた。

「雲ちゃん！ 大地！」

そう叫んで一番に、俺達に近寄ったのは空だった。

「大丈夫？」

そう聞くのは空。

雲は小さく頷く。

その光景が、なんとも羨ましくて…まぶしくて。

「空、櫻を保健室に連れて行つてやつてくれ

俺はさういつつて、櫻をあつとおひした。

空は大きく頷いて、櫻に向を真しげに歩いていく。

それに男子はついていった。

俺はといつといつ櫻の姿が見えなくなつた後、その場にじっと座り込んだ。

#53 修学旅行～強制連行～（後書き）

さて、最終話まであとこれを除き3話となっていました。
最後までお付き合ってお願いします。

#5.5 修学旅行～最終確認～

しばらく座り込んだ後、俺は明に肩を貸してもらいながら、自分の部屋へと戻つていこうとしていた。

「大地」

3階へと上がる手とする階段手前。

そこには、俺の名前を呼ぶ声の持ち主は空だった。

「零はどうだつた？」

いたつて普通に。

心の傷を負つていいことを気付かれないよつて、零の事を聞いた。

「今は疲れて寝てる。ちょっとした捻挫だつてさ。一週間もすれば歩けると想つて言つてたよ」

「やうか。ありがと」

空は小さく首を横に振った。

「大地…」

何か言いたそうな顔で俺を見つめる。

「何？ なにかあったか？」

「…本当に、俺…零ちゃんとっちゃん？」

え？

「大地、それでもいいの？」

零を空に取られる？

…いや、今更何を考えているんだ。

零は空が好きで、空は零が好き。

俺が諦めればいいだけの話。

難しい話じゃない。

難しい話じゃないけど……。

俺が何も言えず、その場に立つてると、先に空が口を開いた。

「明日、俺は零ちゃんにほつきつ好きと言つ。それで何が何でも零ちゃんを手に入れるから！」

空の顔はいつもと違つて、真剣な表情だつた。

この街に戻つてきてから、こんな真剣な表情を見るのは初めてかもしねい。

「あ、空……」

俺が言葉につまつてると、空は階段を上がつていく。

立ち止まつている俺を見かねて、隣にいる明が「行くぞ」と呟いて歩き出した。

部屋に着くと、さつきまでの疲れがどつと押し寄せてきて、さつきの会話を気にする余裕も無いぐらい、俺は睡魔という悪魔に未知の世界へと引きずり込まれた。

そこは見慣れた町並み。

人がぞろぞろと歩いている中心に俺は立っていた。

立ち止まっているというのに、誰一人として、俺を気にも止めようとしない。

なぜだ？　どうしてだ？

そんな中、俺は周りを見渡していると、ある建造物の柱の隣に一人の少女がいた。

その容姿は完璧で、百人中百人が見ても可愛いといつだらう。

俺は、その可愛さのあまり、とつたに話しかけようとする。

「おい、君ー！」

俺がそういうと、ふとこっちを向いて彼女はニコニコと笑った。

しかし…その笑みは俺に向かっているものではなかつた。

気がつくと、俺の隣には、俺…いや…これは空か？

その空の顔を見るのをやめ、もう一度女の子の顔を見る。

そこには美人モードの雲が立っていた。

何かを楽しそうに話している。

そして、雲と空は手をつないで俺の下から去つて…

5時半。

ふと俺は近くにある時計に目をやる。

「わうー、起つかけたか

びつから明が俺の頭で起きてしまったらしい。

「じつした…？」

ハジ、この夢もやのつ現実になるんだひとつな。

「あ…夢かよ」

俺は飛び起きた。

「ひー。おめで

普段の俺なり、もう一眠りするといいなのだが、日が覚めてしまつたよつだ。

まつ一度、明のまづ田を向かると、じつぜん寝てしまつたりして。

じつてもする」とが無から、俺はそつとドアを開けて一階のロビーへと向かつてみた。

階段を一段一段下りるごとに、太ももに痛みが走る。

びしうら、昨日の出来事で筋肉痛になつたよつだ。

そんなことを考えてこると、ロビーに着いた。

そこには、椅子にゆつたつと腰を下ろしていくる零の姿があつた。

「大地……」

先に声を出したのは零。

零の言葉の後に俺は「足、大丈夫か?」と聞いた。

「うん。だいぶ腫れも引いて、全然大丈夫だよ」

ん?

空の話だと、全治一週間じゃなかつたのか?

「そうか。よかつたな」

「大地…その、ありがとう」

「…おひ」

なんだか気まずい雰囲気が流れてしまつた。

「今日、行けないんだ」

「え?」

「今日の自由行動。足を捻挫しちやつたでしょ? だから、今日は
ホテルで大人しくしておきなさいって先生が」

そうだったのか。

「 もつか。ゆづくつしておけ。十丼貰つてしまひやるよ」

ありがと、と微笑む零を見て俺は心に何か染みるものを感じた。そして、もつ俺に向かはれるとは無いんだよなと考へると、悲しみがこみ上げてきた。

だけど、これを表情に出すわけにはいかない。

「あ、もつ姫が起きる時間だね。部屋に戻らなきゃ」

そういうと、零は一人で立つて、捻挫した足を少しかばいながら戻つていった。

俺は、その姿眺めた後、明が待つているであつた部屋へと足を進ませた。

#55 修学旅行～最終確認～（後書き）

夢の世界のようなものを、書くのは初めてで、かなり困惑しました。かなり分かりにくいかもしれませんが、そこはお許しください。

次回はちょっとかわった書き方をしました。

#55・5 修学旅行～決意・告白～

「あ…ら？」

俺は立花 空。

大地の双子の弟であり、恋のライバル相手でもある。

そんな俺は零ちゃんがいる保健室…じゃなくて、保険の先生の部屋に俺はやってきた。

保険の先生の部屋と言つても、先生は別の用事で今はいないのだが。

「はい！ 零ちゃん元気い？」

俺がドアを開けて話しかけると、零ちゃんは驚いた表情で俺の顔を凝視した。

理由は、何故か分かつてゐるけれど。

「…自由行動行は？」

「風邪引いたって言って、休ましてもうつたあ

「風邪！？」

心配そうな顔をする三つ編の彼女の顔を見て、俺は「コラ」と笑う。

なんとも、その表情が可愛いのだ。

「でも、安心して… 假病だからわあ」

一シシリと笑つてやると、心配の表情が、呆れた表情に変わっていく。

「ハハ、サボつさよくな」

「でもね、理由がちゃんとあるんだ」

「サボりに理由も向もない。今なら聞かれてから、行つておこで」

ぶつきあはうに返事をする彼女が、また愛おしく思つ俺を誰が責める。

「駄目なんだ」

「何故？」

零ちゃんは不思議そうな顔をして、一瞬だけこっちを見た。

その後は、窓の外へと視線を移す。

この前、俺に「好き」って言われたことなんて、冗談と思つてゐるんだろ?うな。

「それは…零ちゃんに、ちょっと言つたことがあって」

「私? 何?」

そつ返事する彼女の意識は、もはや俺を見ていかつた。

窓の外にいる俺達の学校の連中を見ていいく。

いや、複数形はおかしいか。

：大地を見ている。

俺は知っている。

大地が、俺に嫉妬していることを。

それによつて、霧ちやんとの関係が悪くなつてゐることも。

霧ちやんが、大地と由梨さんが好き同士だと勘違ひしているといふことも。

俺は知つてゐるんだ。

知つてゐる上でこのよつた行動をしてゐる。

俺は、最悪な男だ。

「霧ちやん、真剣な話なんだ。こつちを見てくれないかなあ？」

俺がそつこうと、霧ちやんは素直にこつちを向いてくれた。

そして再び「何？」と俺に聞く。

本当に何も分かっていないんだよな、この子は。

「 霊ひやん、俺好きだよおー 霊ひやんの」と

「 なつ、こちなり何言へ出すのよ。…私も好きだナビー 霊ひやんの」と

… いしは素直に喜ぶといひなのだらうか?

「 大切な友達と思つてゐる。これからもよろしくへ

靈ちやんがそつと笑つた瞬間に、俺は吉 興業も驚くよつなずつにな
ぶりを見せた。

… やうこうオチだとは思つていていたけど、やつぱり期待するじやない
か。

ああ、少しでも期待した俺を笑つてくれ。

「ちがつ

「え?」

何が違うの? のよつな、顔をしている。

本当の馬鹿だ、靈ひやんは。

「ちひりじゃない、俺と霧ちゃんは根本的なことが違つんだ」

「当たり前。男と女なんだから」

……こんな調子じしゃ告白でもあるまい。

「……いい？ 聞いて」

俺が真剣にそうつづつと、霧ちゃんはすこし真剣な顔をしてくれた。

「何？」

俺は大きく息を吸つて、その空氣をびっしり吐いた。

こんなことを言つのは、生まれてこの方初めてだ。

心臓が今にも爆発しそうなほど、バクバク動いている。

回つもあまり見えていない気がする。

俺が見ているのは霧ちゃんだけ。

「俺、雲ちゃんのことが大好きだ。雲ちゃんの『お友達』感覚
じゃない。俺は一人の女として雲ちゃんが好きだ。大好きなんだ。
…好きなんだよ」

「や、空…」

雲ちゃんは動搖して、田をキョロキョロしている。

もう一押し。

彼女の心は今傷ついている。

あと少し押せば確実に雲ちゃんは俺の物になる。

そうすれば、大地も完璧に諦めてくれるだろう。

雲ちゃんも俺しか見ないだろう。

大地の事を思い出としてくれるの…だろう。

だけど、なぜだ？

俺は今、何を言おうとしている。

もひ、止めようと思つたときには口が動いていた。

「…でも、雲ちゃんは大地の事が好きなんだよね。今から大地のと
ころに行つておいでよ。俺なら大丈夫だから」

「す、好きなんかじゃ…なこわよ」

大地と田梨わんのことを抱えたのか、雪ひやんの瞳から涙がこぼれてきた。

俺は雪ひやんをひつと呑めかれて、ぎゅっと抱きしめた。

「雪ひやん、少し素直になつたほうがここ。もう一度大地と話をしちゃおいで」

涙声を出す彼女の背中をさす。

彼女は小さく頷いた。

とりあえず、俺は少し雪ひやんと距離をあける。

「ほ、ほめと…私」

それ以上言わないでくれ。

「分かつたから。ほら、こいつをみて。早くしないことこのやう

？」

ポンッと背中を押して、俺はいつもの笑顔で雪ちゃんに言った。

雪ちゃんは大きく頷く。

そうすると、揺動している足をかばいながら立ち上がった。

足を痛めながらも、彼女はドアのまわり走っていく。

本当は痛いくせに、大地に会いたいからって。

雪ちゃんがドアを開けて、大地の下へ走っていくを見届けると、さつきまで雪ちゃんが座っていたベッドの上に俺は体を寝転ばせた。

少しの間だけ、雪ちゃんととの日々を俺は忘れることが出来ないよ。

じこまで好きになつたんだから。

自分がよければ、それでいい。そんな考えだったのに。

今回は少し違つたようだ。

雪ちゃんの幸せを願つてしまつた。

今、彼女を本当の幸せに出来るのは大地しかいない。

「あ～、本当の馬鹿はこの俺か…」

そんなことを呟きながら、俺の人生最大の恋ははかなく散つていった。

#55・5 修学旅行～決意・告白～（後書き）

空視点です。

本当は、大地目線オンラインで書こうとしたのですが、どうしても、この話を書きたくて、はい。

もう、明日最終話です。

最後まで、お付き合いのほうよろしくお願いします。

最終話 修学旅行へ 霊との日々

雪とロビーホテルで話してから、俺は部屋に戻った。

その後は、着替えを済ませ、ホテル内で用意されている朝御飯を食べに行く。

その朝御飯が用意されている場所には、雪の姿は見当たらなかつた。どうやら、揃揃しているために、保健の先生がいる部屋でご飯を食べるようだ。

俺は、飯を食べ終え、朝の集合場所である中庭に足を進めた。

今日は、自由行動をする口。

雪がいないから、事実3人で行動することになる。

明と一緒に向かうと、集合場所にはもう男子がいた。

「明君！ 大地君！」

そう言つて、いつものように手をブンブン振る男子。

多分、これからもあんな感じで俺達は呼ばれるのだろう。

「 霊は今日、来れないんだってさ~」

朋子は悲しそうな声で、そのことを俺達に告げた。

明も「 そりなんだ」と呟いて、少し落ち込む様子を見せる。

俺は、そのことを多分、誰よりも早く霊から今日の朝聞いたのだが、
あえてこの場所では言わない。

なぜかつて?

深い意味は特に無い。

「 空君も、今日風邪でホテルに残るらしいし

…空もホテルに残るのか。

風邪なんて、どうせ仮病だらう。

その理由は多分、霊に告白するため。

こんな機会、もう他にないからな。

そして、霊がOKを返す。

…想像すると、少し胸が痛くなつたが、これくらい我慢しなきゃ、これからがもたない。

空と雲が一人で並んでいふのを、毎日見なくてはいけない日々になつてしまふのだから。

そう、あの夢のような。

今までの日々は本当に楽しかつた。

最初は雲が俺にぶつかってきたことから始まつたんだつけ。

そういうば、あの時はどうして美人モードの雲だつたのだらう？

… 考えても意味ないか。

わへ、終わつたことだ。

三つ編みモードの雲を見つけて、本当にびっくりしたのも覚えている。

雲があの時、定期を落とさなければ、もう話すこともなかつただろ

う。

だって、美人モードの零に会い「」となんて、もつ無いじゃん？

そして、不良にからまれているのを助けたり、そのお礼をかねてデートをしたり、隆一のグループと喧嘩したり、俺が零に気持ちを伝えたり…。

色々あつたよな。

零との日々を俺は思い出していると、心がとても痛くなつた。

泣くな俺。

こんな人前で、泣いては駄目だ。

「大地？」

明の声で、俺の正常心が戻ってきた。

「あ、おひ。びひした？」

「お前、おひひした？ そんな…顔して」

心配そうな顔をしている。

何もないこと言つても、明には通用しないんだろうな、多分…。

「まあ、気にするなよ」

俺はできるだけの笑顔で明に答えた。

これで誤魔化せない」とは百も承知。

そんな俺の心境を察知してくれたのか、明は「そっか」と言つてくれた。

そして、先生がタイミングよく、出発の合図の言葉をかけた。

生徒たちは、その先生の指示に従つて、バスのまづくと歩いていく。

今、零は何をしているだろうか。

空の鞄紐をつけて喜んでいるところかな。

……。

も、諦めよう。

そ、思つたときだつた。

俺の目に、捻挫した足を少しかばいながら走つてくる三つ編モードの雲の姿が飛び込んできた。

顔は痛みをこらえている表情をしている。

雲、どうした？

お前は、ここにいてはいけない。

空のところへと歸るべきだ。

何をしてる…。

「大地…」

そつ叫んだのは、まさしく雲だった。

「し、雲…」

しかも、ここには今3年全員が集まっている場所である。

大声で叫んでは、注目されてしまつぞ？

雲、嫌がつていたじやないか。俺と関わりあることが、他の誰にばれてしまつことを。

それなのに何で、俺の名前を叫ぶ。

「大地！」

さつきより近い場所で、もう一度雲は俺の名前を叫んだ。

周りから注目されているのを知らないのか、知っているが気にしてないのかは知らないが、俺の下へと声を張り上げて走りよつてきた。

朋子が走ってきた雲に「大丈夫？」と聞いても、息を整えながら「大丈夫」と答えるだけ。

そして、雲は俺の顔を睨んだ。

「な、何してんだよ、雲」

「べ、別に……その、監を送りにきただけよ

そういう彼女の目は、めずらしく俺の目をじつかりと捉えていた。

「君のところへ、行かなくていいのかよ？ 多分、あいつ待ってるぜ？」

その言葉にびっくりしたのか、零は扉をまっさと開かせた。

「なつ、な、なんどよ」

「だって、その……空の事好きなんだろ？」

自分で、何言つてんだか。

せつかく、俺達を送りに来ててくれたと言つて、こんな事を言つなんて。

ありがと。のひとつ言えればいいのじゃ。

素直になれないな、俺つて。

ほひ、俺がそんなことを言つもんだから、下を向いて零はじっと黙ってしまったじゃないか。

申し訳ないとか、そういう感情を俺に持たないでくれ。

俺は、お前が幸せならそれでいい。

諦めがつく。

俺は、今まで見せたことの無いような満面の笑みで零に「送つてくれてありがとうよ」と叫つた。

すると、彼女は下を見ながら首を横に振る。

俺はぐるっと振り返つて、バスの方向へと足を進める。

そういえば、祭りの零は可愛かつたな、とか想像しつつ、今までのことをそつと思い出しながら。

5歩ぐらい歩いただろつか。

聞き覚えのある叫び声が再び俺の背後から聞こえた。

「大地！」と。

俺はその声に反応して、振り返る。

そこにはるのは、やつきの零とは違つた。

いや、雲は雲なのだが、また違った雲だった。

そう、美人モードの雲。

あれほど、俺と朋子以外に見せたがらなかつたその姿を、この2年生全員がいるであろう場所でその姿を現した。

「し、雲ー。」

俺は着ている上着を脱ぎながら、雲の下へと走りよつた。

そして、上着を雲の頭からバサッとかける。

「な、何してんだ！ その姿見られると、またストーカーとか… 現れるかもしねないぞ？」

雲はそつと、頭にかかっている俺の上着をどけて、またしつかりと俺の目をしつかりと見ていく。

「だったら、私を守つてよー。」

え？ 今なんて？

零は人目を全くと重つていいほど気にせずに、俺にいきなり抱きついてきた。

「私、大地のこと大好きだよ」

「え…え？」

「だから、私は池山大地が大好きなの！ 分かつたー？」

俺に抱きつきながら、少し頬を赤らめた顔だけ上に向いている零の姿は、世界で一番可愛いと思つた。

これは嘘じやない。

「し、零？」

俺が零の名前を呼ぶと、そつと零は一歩一歩と俺から離れていった。

「…でも、大地は由梨さんが好き…なんだよね」

「…は？」

不覚にも声が裏返つてしまつた。

「して、霧、何を言つて……」

「わかつてゐる。もつ、諦めるから」

俺が最後まで言つて、霧は俺の言葉を遮つて後ひをむいた。

「ちよつと待てよー。」

俺はさう言つて、霧の肩をぎゅっと握る。

「お前、勘違つてゐる」

俺に肩を握られ、霧はこっちを向べと、今にも泣きやうな顔をしていた。

「俺の『氣持ちは……』霧と呑合つた、あの時から、何ひとつ変わつちやけつてしまつた。あの時から、何ひとつ変わつちやけつた。」

「や、それつて……」

「ない」

いつ俺の田を見るのでやめてしまつた分からない霧の田をしつかり見ながら、笑つて言つてやつた。

最高の言葉つゝやつ。

「俺は、ま、瞳をじの井で一番愛してゐるよ」

そんな瞳を、そっと俺は抱き寄せた。

瞳との日々を思いながり。

最終話 修学旅行へ暁との日々へ（後書き）

これにて『暁との日々』本編完結とさせていただきます。

最後まで付き合ってくださった人や、ちょっとでもこの話を見てくださった皆様に心から感謝します。

本当に、ありがとうございました。

最終話まで56話と長々とじめちゃいましたが（本当は30の話ほどで終了予定だった）

完結できてよかったです。

当初の予定であった、毎日更新も実行できましたことだし…。

途中、自分の文章力の無さに書く気をたびたび失っていましたが、メールや、メッセージ、評価等を送ってくださったおかげで、最後まで書くことが出来たと思います。

そして、この小説が一応、小説家になろう�デビュー作というわけです。

今度書く小説は、私自身本当の小説書きデビュー作です。いつ公開するなどは全く決めていませんが、遠い未来に公開というわけではどちらもなさそうですね。

この後に、大地のあとがきがあります。
基本、大地の独り言ですので…。

気が向いた人は、見ていてあげてください。

最後に、もう一度：

この小説を見てくださった皆様、本当にありがとうございました。

大地からのあとがき

読者の皆様！ 最後まで俺に付き合っていただきありがとうございました！

一応、主人公の池山大地です。

作者情報によると、次に書く小説も決まっているらしいぞ。

…俺達はどうなるのって話だよな。

そして、この場を借りて、作者に言いたいことがある。

こんなボロクソな小説の書き方をしたせいで、俺の不良という設定
が台無じじゃねえか！

…まあ、こんなところで俺がキレイても仕方ないのだけどな。

作者にはもつと上手く書いて欲しい所だった。

それで……って、あんなといひて雲がいるじゃないかー。

しかも、美人モード！ って、あの劇的な告白以来ずっと三つ編みモードにしてないんだナビ。

その分、俺がしつかりと寄り添おうとしますよ。
あ、雲がどこか行きそつなんで、すみません。雲のところへ行つて
きまますね。

「おーい、雲ー。」

「何？」

「向じてゐるんだよ、こんなところへ。」

「少し、空を眺めてた」

「え？ 空？ バイカルなんだよ」

「はあ……、そつちの空じゃないわよ。上にあるのでしょ？ 【空】」

「……そつちかよ」

「あ、そつこえば大地」

「どうした？」

「あのテストの時の約束覚えてる？」

「テスト……ああ、負けたほうが、何でも言つことを聞くつていう約束？」

「それ。まだ大地に言つてなかつたよね」

「そりだな……あの後も、色々あつたし」

「そ、それでね、今決めたの」

「何だよ？」

「あのね、その……こつ、一生……わ、私の傍にいて……ね？ 絶対だよ
！」

あ、それだけ言って靈はむどいかに行っちゃいました。

とりえず、恥ずかしいといふをお見せしてすんません。

いへり、読者様でもこんな可愛い靈は渡らないからな！

これ以上、長話すると靈を見失つたり、それとも俺は靈を追いかけます。

また、この作者が書いている小説を見かけたら、読んでやってください。

では、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2160d/>

君との日々

2010年10月10日10時49分発行